

Kamiharitani

Shimoharitani Site

上針谷・下針谷遺跡

—私立保育園園舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016年3月
宮崎県都城市教育委員会

Kamiharitani

Shimoharitani Site

上針谷・下針谷遺跡

—私立保育園園舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

序 文

本書は、私立保育園の園舎建設に伴い、都城市教育委員会が平成26年度に実施した上針谷・下針谷遺跡の発掘調査報告書であります。

本書に所収いたしました上針谷・下針谷遺跡は、都城市的南部の今町に所在しております。ここで、縄文時代、弥生時代、平安時代末～鎌倉時代の遺構・遺物がみつかりました。中でも縄文時代の墓である可能性が高い遺構や、弥生時代の極めて遺存状態の良好な竪穴住居跡が5基確認されたことが注目されます。さらに、平安時代末～鎌倉時代の遺構としては、庇をもつ掘立柱建物跡1棟をはじめ土坑などがみつかっています。本遺跡が位置する市域南部では、これまでにも数多くの発掘調査が実施され、都城盆地の歴史を読み解く上で重要な遺跡がみつかっています。本遺跡もこのような遺跡の一つとして調査・記録され、発掘調査報告書としてここに刊行いたします。

本書が地域の歴史や文化財に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料として多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に御理解・御協力いただいた関係者の方々、市民の皆様に心から感謝の意を表します。

2016年3月

都城市教育委員会
教育長 黒木 哲徳

例　言

1. 本書は、私立保育園の園舎建設に伴い都城市教育委員会が平成26年度に実施した上針谷・下針谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 上針谷・下針谷遺跡の発掘調査は都城市教育委員会が主体となり、同市文化財課主査山下大輔、同嘱託玉谷鮎美が担当した。現場での発掘作業にあたっては、同市文化財課主幹栗畠光博と同主査栗山葉子の協力を得た。
3. 本書で使用したレベル数値は海拔絶対高で、基準方位は真北である。
4. 本書で使用した遺跡位置図は、国土地理院発行の5万分の1『都城』を基に作成した。
5. 現場における遺構実測は、発掘調査作業員の協力を得て栗山・山下・玉谷が行った。遺構図のトレースについては、株式会社CUBICのトレースくんを用い山下・玉谷が行い、それを山下がAdobe社のIllustratorで編集した。
6. 本書に掲載した遺物の実測は整理作業員および山下、文化財課嘱託早瀬航・川俣唱子が行い、トレースは山下が行った。
7. 現場での遺構写真撮影は栗山・山下が行い、出土遺物の写真撮影は山下が行った。空中写真撮影は九州航空株式会社に委託した。
8. 石器の観察・分類・実測については、栗山の助言・協力を得た。
9. 本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真的番号は一致する。
10. 土壙と遺物の色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)2001年度前期版を参考にした。
11. 炭素14年代測定・植物珪酸体分析・リン・カルシウム分析については、株式会社古環境研究所に委託した。土器圧痕分析を大西智和氏(鹿児島国際大学)、小畑弘己氏・宮崎大和氏(熊本大学)、中村直子氏・寒川朋枝氏(鹿児島大学埋蔵文化財調査センター)に依頼した。
12. 本書に掲載した遺構実測図の縮尺は竪穴住居跡を1/60、掘立柱建物跡を1/80、溝状遺構を1/100、土坑・ピットを1/40とした。遺物実測図は基本的に土器類・陶磁器類など石器以外の遺物は1/3とし、石器・石製品・軽石製品を1/3・2/3・1/6とし、各図版に示している。
13. 石器実測図における----は敲打痕、——は磨痕、-----は微細剥離の範囲を示す。
14. 本書の執筆は第4章の自然科学分析については株式会社古環境研究所に委託し、土器圧痕調査については小畑弘己氏・中村直子氏に玉稿を賜った。それ以外の執筆および編集は山下が行った。
15. 発掘調査および発掘調査報告書の作成にあたっては、以下の方々のご指導・ご協力を賜った(順不同・敬称略)。
大西智和(鹿児島国際大学)、小畑弘己・宮崎大和(以上、熊本大学)、中村直子・寒川朋枝(以上、鹿児島大学埋蔵文化財調査センター)、下田代清海((公財)鹿児島県文化振興財團埋蔵文化財調査センター)、武田浩明、近沢恒典、加賀淳一、中岡剛史、原栄子、早瀬航、川俣唱子(以上、都城市文化財課)
16. 発掘調査で出土した遺物と全ての記録(図面・写真など)は都城市教育委員会で保管している。
17. 遺構の表記に使用した略号は以下のとおりである。尚、遺構番号は時代に関わらず遺跡内の通し番号とした。
SA: 竪穴住居跡 SB: 掘立柱建物跡 SC: 土坑 SD: 溝状遺構 P: ピット
18. 本文中で参考にした報告書等の文献は巻末にまとめて示した。
19. 出土遺物の時期比定に関しては、以下の編年研究の成果を参考とした。
縄文土器
堂込秀人 1997 「南九州縄文晩期土器の再検討 - 入佐式と黒川式の細分 -」『鹿児島考古』第31号 鹿児島県考古学会
水ノ江和同 2009 「黒川式土器の再検討 - 九州の縄文時代晩期土器 -」『新弥生時代のはじまり 弥生農耕のはじまりとその年代』第4巻 雄山閣
弥生土器
加賀淳一 2014 「都城盆地における弥生時代中期から後期前葉の土器様相」『新田栄治先生退職記念論文 Archaeology from the South II』 新田栄治先生退職記念事業会
栗畠光博 2000 「中溝式系土器の検討 - 宮崎県における弥生時代中期後半から後期前半にかけての土器編年にむけて -」『古文化談叢』45 九州古文化研究会
中岡聰 1997 「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』9 人類史研究会
貿易陶磁器
山本信夫編 2000 『太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』 太宰府市の文化財 第49集 太宰府市教育委員会

本文目次

第1章 序説	1	第5節 平安時代～中世の遺構と遺物	45
第1節 調査の経緯と経過	1	1 据立柱建物跡 (SB)	45
第2節 調査組織	1	2 土坑 (SC)	45
第2章 遺跡の位置と環境	1	3 溝状遺構 (SD)	47
第1節 地理的環境	1	4 ピット (P)	48
第2節 歴史的環境	2	5 包含層出土遺物	49
第3章 発掘調査の成果	3	第4章 自然科学分析	63
第1節 調査の方法と概要	3	第1節 上針谷・下針谷遺跡における放射性炭素年代測定	63
第2節 遺跡の層序	4	第2節 上針谷・下針谷遺跡における植物珪酸体分析	65
第3節 縄文時代の遺構と遺物	8	第3節 上針谷・下針谷遺跡におけるリン・カルシウム分析	70
1 土坑 (SC)	8	第4節 上針谷・下針谷遺跡出土土器の圧痕調査報告	73
2 ピット (P)	17	第5章 調査のまとめ	76
3 包含層出土遺物	18	第1節 縄文時代晚期について	76
第4節 弥生時代の遺構と遺物	28	第2節 弥生時代中期について	76
1 壁穴住居跡 (SA)	28	第3節 平安時代～中世について	77
2 包含層出土遺物	40		

挿図目次

第1図 遺跡位置図 (S=1/50,000)	2	第29図 包含層出土縄文土器実測図⑩ (S=1/3)	28
第2図 調査区位置図 (S=1/5,000)	3	第30図 SA1 実測図 (S=1/60)	29
第3図 調査区域図 (S=1/500)	4	第31図 SA1 出土遺物実測図① (S=1/3)	30
第4図 調査区土層断面図① (S=1/80)	5	第32図 SA1 出土遺物実測図② (S=1/3・1/6)	31
第5図 調査区土層断面図② (S=1/80)	6	第33図 SA2 実測図 (S=1/60)	32
第6図 遺構配置図 (S=1/200)	7	第34図 SA2 出土遺物実測図① (S=1/3)	33
第7図 縄文時代遺構配置図 (S=1/200)	8	第35図 SA2 出土遺物実測図② (S=1/3)	34
第8図 SC5・6 実測図 (S=1/40)	9	第36図 SA2 出土遺物実測図③ (S=1/3)	35
第9図 SC5 出土遺物実測図① (S=1/3)	10	第37図 SA2 出土遺物実測図④ (S=1/3・2/3・1/6)	36
第10図 SC5 出土遺物実測図② (S=1/3)	11	第38図 SA3 実測図 (S=1/60)	37
第11図 SC5 出土遺物実測図③ (S=1/3)	12	第39図 SA3 出土遺物実測図 (S=1/3・2/3)	38
第12図 SC5 出土遺物実測図④ (S=1/3)	13	第40図 SA4 実測図 (S=1/60)	38
第13図 SC5 出土遺物実測図⑤ (S=1/3)	14	第41図 SA4 出土遺物実測図 (S=1/3・2/3)	39
第14図 SC5 出土遺物実測図⑥ (S=1/3)	15	第42図 SA5 実測図 (S=1/60)	39
第15図 SC5 出土遺物実測図⑦ (S=1/3)	16	第43図 SA5 出土遺物実測図 (S=1/3・2/3)	40
第16図 SC5 出土遺物実測図⑧ (S=1/3)	17	第44図 包含層出土弥生土器実測図① (S=1/3)	41
第17図 SC5 出土遺物実測図⑨ (S=2/3・1/6)	18	第45図 包含層出土弥生土器実測図② (S=1/3)	42
第18図 縄文時代のピット (P) 実測図 (S=1/40)	18	第46図 包含層出土石器実測図① (S=2/3)	43
第19図 包含層出土縄文土器実測図① (S=1/3)	18	第47図 包含層出土石器実測図② (S=1/3・2/3)	44
第20図 包含層出土縄文土器実測図② (S=1/3)	19	第48図 包含層出土石器実測図③ (S=1/3・1/6)	45
第21図 包含層出土縄文土器実測図③ (S=1/3)	20	第49図 SB1 実測図 (S=1/80)	46
第22図 包含層出土縄文土器実測図④ (S=1/3)	21	第50図 SB1・SC1・P2 出土遺物実測図 (S=1/3)	46
第23図 包含層出土縄文土器実測図⑤ (S=1/3)	22	第51図 SC1 ～ 4 実測図 (S=1/40)	47
第24図 包含層出土縄文土器実測図⑥ (S=1/3)	23	第52図 SD1 実測図 (S=1/50・1/100)	47
第25図 包含層出土縄文土器実測図⑦ (S=1/3)	24	第53図 平安時代～中世のピット (P) 実測図 (S=1/40)	48
第26図 包含層出土縄文土器実測図⑧ (S=1/3)	25	第54図 包含層出土平安時代～中世の遺物実測図① (S=1/3)	50
第27図 包含層出土縄文土器実測図⑨ (S=1/3)	26	第55図 包含層出土平安時代～中世の遺物実測図② (S=1/3・1/6)	51
第28図 包含層出土縄文土器実測図⑩ (S=1/3)	27	第56図 曆年校正結果	64

第 57 図 上針谷・下針谷遺跡における植物珪酸体分析結果	68	第 60 図 上針谷・下針谷遺跡 土器圧痕・レプリカ SEM 画像 1	74
第 58 図 上針谷・下針谷遺跡におけるリン・カルシウム含量	71	第 61 図 上針谷・下針谷遺跡 土器圧痕・レプリカ SEM 画像 2	75
第 59 図 プレス試料と元素マッピング図およびポイント分析箇所	72		

表 目 次

遺物観察表①～⑩	52～62	第 2 表 上針谷・下針谷遺跡における蛍光 X 線分析結果	71
第 1 表 上針谷・下針谷遺跡における植物珪酸体分析結果	67	第 3 表 上針谷・下針谷遺跡出土土器と圧痕属性	74

図 版 目 次

図版 1 上針谷・下針谷遺跡の調査	79	SA3 土層断面① (南東から)	
上針谷・下針谷遺跡遠景 (南東上空より霧島を望む)		SA3 土層断面② (北西から)	
上針谷・下針谷遺跡調査区全景		SA3 完掘状況 (南西から)	
図版 2 土層断面・縄文時代の調査	80	図版 5 弥生時代の調査③	83
調査区土層堆積状況		SA4 検出状況 (西から)	
B1 区 縄文土器出土状況 (西から)		SA4 土層断面 (南から)	
B1 区 縄文時代の遺物出土状況 (北西から)		SA4 磨製石斧 (360) 出土状況 (北から)	
B1 区 磨製石斧 (450) 出土状況 (西から)		SA4 完掘状況 (西から)	
SC5 土層断面① (東から)		SA5 検出状況 (北西から)	
SC5 土層断面② (北東から)		SA5 土層断面① (北西から)	
SC5 白色粘土塊 (北東から)		SA5 土層断面② (南東から)	
SC5 完掘状況 (北から)		SA5 完掘状況 (北西から)	
図版 3 弥生時代の調査①	81	図版 6 平安時代～中世の調査	84
SA1 検出状況 (北から)		SB1・SC1 検出状況① (西から)	
SA1 調査風景 (北西から)		SB1・SC1 検出状況② (東から)	
SA1 遺物出土状況 (南東から)		SB1・SC1 完掘状況① (西から)	
SA1 土層断面① (南東から)		SB1・SC1 完掘状況② (北から)	
SA1 土層断面② (北西から)		SC1 土層断面 (北から)	
SA1 完掘状況 (北東から)		SC1 完掘状況 (北から)	
SA2 検出状況 (北から)		SC2 土層断面 (東から)	
SA2 土層断面① (北東から)		SC3 完掘状況 (東から)	
図版 4 弥生時代の調査②	82	図版 7 縄文時代の遺物① (SC5 出土遺物)	85
SA2 土層断面② (南西から)		図版 8 縄文時代の遺物② (包含層出土遺物)	86
SA2SC 内遺物出土状況 (南東から)		図版 9 弥生時代の遺物① (SA 出土遺物)	87
SA2 柱穴完掘状況 (東から)		図版 10 弥生時代の遺物② (SA 出土遺物・包含層出土遺物)	88
SA2 完掘状況 (南から)		図版 11 弥生時代の遺物③ (包含層出土遺物)・包含層出土石器①	89
SA3 検出状況 (西から)		図版 12 包含層出土石器②・平安時代～中世の遺物	90

第1章 序説

第1節 調査の経緯と経過

平成 25 年 5 月 10 日、個人の土地所有者より都城市教育委員会文化財課（以下、市文化財課）に都城市今町 8917 番における文化財所在の有無について照会がなされた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地（上針谷・下針谷遺跡）の範囲内に位置していたため、平成 25 年 5 月 23・24 日に市文化財課が確認調査を実施した。その結果、対象地に満遍なく設定した全てのトレンチにおいて土器片等の遺物の出土を確認し、一部のトレンチではピットを検出した。そのため、対象地においては遺跡が遺存しているものと判断された。この結果を受け、対象地において保育園の建設を計画している社会福祉法人真光会はじめ関係者と協議を重ね、建物建設に伴い遺跡が破壊される範囲 666 m²については記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。この後、平成 25 年 11 月 7 日付で社会福祉法人真光会と都城市との間で上針谷・下針谷遺跡における埋蔵文化財の取扱い等に関する協定を締結し、さらに平成 26 年 4 月 1 日付で上針谷・下針谷遺跡発掘調査業務委託契約を締結した。現場での発掘調査は平成 26 年 4 月 17 日から実施し、同年 7 月 30 日に全ての作業を終了した。この発掘調査と並行して出土遺物の洗浄を市文化財課で行った。現場での調査終了後には、出土遺物の接合・復元・実測等の整理作業および遺構図の整理を行った。発掘調査報告書の刊行については、協定に基づき、平成 27 年 4 月 14 日付で社会福祉法人真光会と都城市との間で上針谷・下針谷遺跡発掘調査（報告書作成）業務委託契約を締結し、その後、発掘調査報告書の執筆・編集を行った。本報告書の刊行もって、発掘調査に関わる全ての作業を完了とする。

第2節 調査組織

平成 26 年度の組織（発掘調査実施年度）

調査主体者	宮崎県都城市教育委員会
調査責任者	教育長 黒木 哲徳
調査事務局	教育部長 児玉 貞雄 文化財課長 新宮 高弘
	文化財副課長 松下 述之
	文化財課主幹 栗畑 光博
調査担当者	文化財課主査 山下 大輔 文化財課嘱託 玉谷 鮎美
庶務	文化財課事務嘱託 松村 美穂

（～平成 26 年 4 月）

文化財課事務嘱託 畑中 夏奈

（平成 26 年 6 月～）

・発掘調査従事者 今村まさ子、今村ミツ子、奥 利治、高橋露子、竹中美代子、留野優兵、福重光夫、馬籠恵子、森山タツ子
・整理作業従事者 奥 登根子、尾曲真貴、園田孝子、楨尾恵美子、新徳より子、水光弘子、矢上由香利、山下美香
平成 27 年度の組織（報告書刊行年度）
調査主体者 宮崎県都城市教育委員会
調査責任者 教育長 黒木 哲徳
調査事務局 教育部長 児玉 貞雄
文化財課長 新宮 高弘
文化財副課長 武田 浩明
文化財課主幹 栗畑 光博
報告書担当 文化財課主査 山下 大輔

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

今回発掘調査の対象となった上針谷・下針谷遺跡は都城市南部、今町に所在する。都城市は九州東南部、宮崎県の南西部に位置し、都城盆地のほぼ中央部を占める。平成 18 年 1 月 1 日に高崎町、高城町、山田町、山之口町の北諸県郡 4 町との合併により新都城市が誕生した。この合併に伴い現在人口は約 17 万人となり、市域は約 650k m²に及ぶ。人口規模では南九州第 3 の都市となる。

都城市が位置する都城盆地は、南北約 25km、東西約 15km の橢円状を呈している。北西に霧島火山群を仰ぎ、西側を瓶台山や白鹿山などの山地に、東から南を鶴塚山・柳岳を主峰とする山地に囲まれ、西南方のみわずかに開かれた地勢を呈する。上針谷・下針谷遺跡は市域南部の今町に所在しており、大淀川とその支流の梅北川に挟まれた成層シラス（二次シラス）台地上に位置する。遺跡の東側に隣接して国道 269 号線が都城市街地から鹿児島県曾於市末吉町に向かい南下する。

第2節 歴史的環境

上針谷・下針谷遺跡が所在する市南部は、市内の中でも最も遺跡の密度が高い地域であり、遺跡詳細分布調査の成果からは縄文時代から近世まで多くの遺跡が確認されている。また、この地域は近年、開発等により本調査が数多く実施されている地域もあり、これらの発掘調査からは多くの知見が得られている。都城市教育委員会による調査だけでなく、高規格道路（都城志布志道路）

の建設に伴い、宮崎県埋蔵文化財センターにより数多くの調査が実施されている。ここでは、これまでに実施されてきた発掘調査の成果を参考に、時代ごとに本遺跡を取り巻く歴史的環境について触れてみたい。

市域南部において最も古い遺跡として、大岩田町に所在する大岩田上村遺跡が挙げられる。本遺跡は平成11年度に調査され、旧石器時代～近世までの遺構・遺物が確認されている。ここでは、旧石器時代の細石刃や細石刃核が出土している。

縄文時代になると都城市内各地で遺跡がみられるようになるが、市域南部でもこれまで多くの遺跡が確認・調査されている。本遺跡の周辺に所在する遺跡をみてみると、まず、遺跡の北500mのところに所在する筆無遺跡では、縄文時代早期および後期前葉～晚期突帯文期にかけての遺物が出土している。遺構についても、後・晩期に属すると考えられる土坑が3基検出されている。

梅北川を挟んだ東側に位置する大岩田町黒土遺跡では、晩期末の刻目突帯文土器や丹塗磨研の壺、胎土に押痕がみられるものや、米そのものが混入した土器片など貴重な資料が得られている。また、擦り切りの石包丁も出土しており、当該時期の水田跡がみつかった南横市町所在の坂元A遺跡とともに、都城盆地における当該時期の稻作の存在を直接的に示す遺跡として重要である。

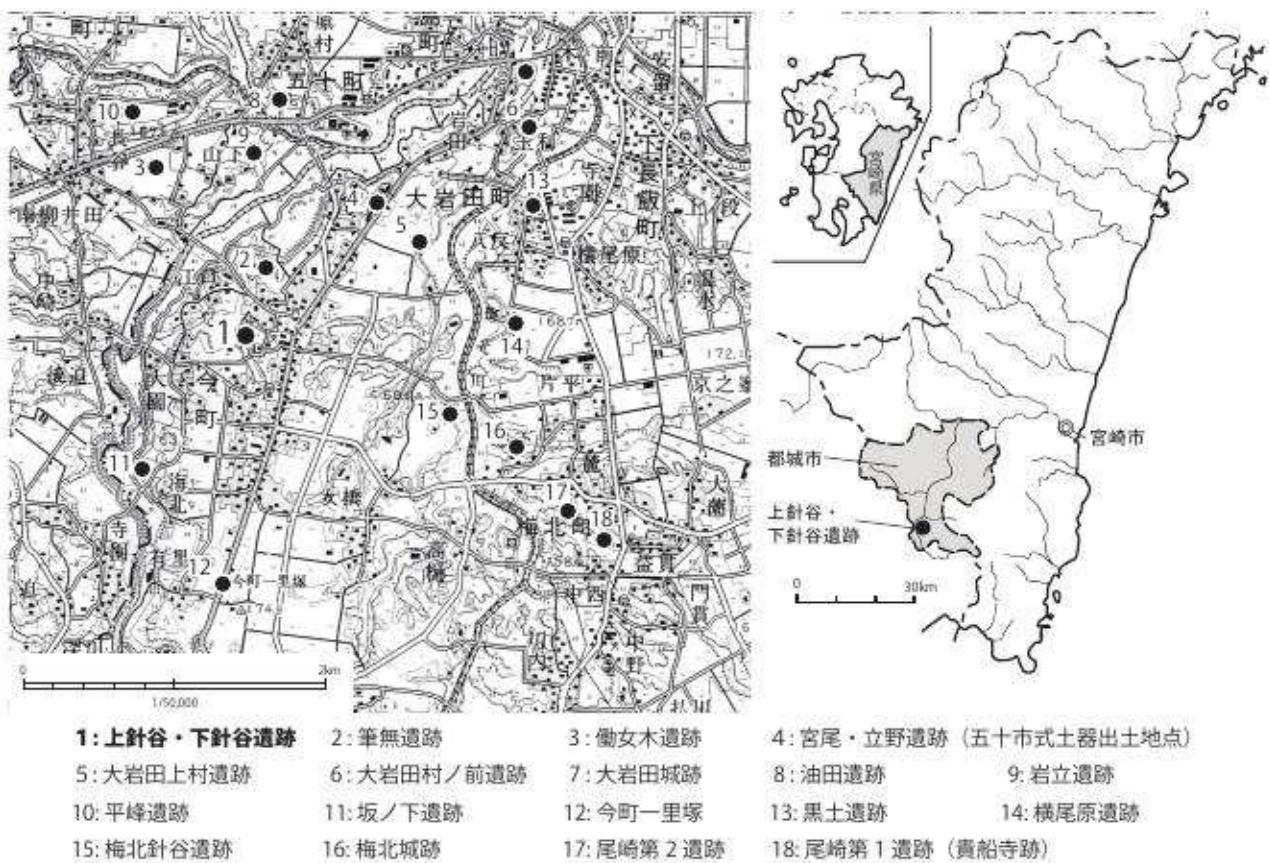
また、正式な発掘調査で得られた資料ではないが、国

道269号線沿いでは「五十市式土器」と呼ばれる完形の土器がみつかっている。当資料は、昭和37年に行われた道路拡幅工事の際に偶然発見された外器面全体に縄文を施す早期の資料である。この時期の円筒形土器で全縄文施文土器は珍しく、同様の完形資料は鹿児島県上野原遺跡でみつかっているのみである。

他にも晩期の住居跡等を検出した大岩田町横尾原遺跡、早期～後期の遺構・遺物が出土した五十町岩立遺跡、晩期の土器が出土した油田遺跡なども周辺に位置する。

弥生時代の遺跡としては、円形の住居跡や前期～中期にかけての遺物が出土した大岩田村ノ前遺跡、同じく住居跡および前期～後期の土器が出土した今町所在の坂ノ下遺跡などがある。このような弥生時代の住居跡を伴う集落遺跡は、近年の宮崎県埋蔵文化財センターによる高規格道路関連の遺跡で調査事例が増加している。堅穴住居跡から瀬戸内系の回線文土器が出土した諸友遺跡や、堅穴建物跡が13軒検出され、瀬戸内系の壺や矢羽根透かし孔を有す高杯が出土した働女木遺跡もこのような高規格道路の建設に伴い調査された遺跡である。

古墳時代の遺跡は縄文・弥生時代の遺跡に比べ多くないが、周辺には堅穴住居跡が2基検出された尾崎第1遺跡（貴船寺跡）や、五角形・六角形の堅穴建物跡や豊富な鍛冶関連遺物が出土した平峰遺跡がある。下長飯町城ヶ尾遺跡では古墳時代前期の土器が採集されている。



第1図 遺跡位置図 (S=1/50,000)

古代の遺跡としては、上述の筆無遺跡があり、掘立柱建物跡や円形周溝墓、土坑墓などが検出されている。古代末、万寿年間（1024～1028）には大宰府大監平季基が開発し、藤原頼通に寄進したことで日本最大の荘園である島津荘が成立したといわれている。しかし、この時期の遺跡は市内全体をみても多くない。その中で筆無遺跡では、10世紀後半～11世紀前半の標識磁器である白磁碗X1類が出土しており、島津荘立荘時期の数少ない遺跡の一つといえる。この他にも梅北町尾崎第2遺跡では昭和30年代に須恵器の藏骨器が1点採集されている。

中世に入ると市域南部では寺院跡などの宗教施設や城郭跡が数多くみられるようになる。今町より東にある梅北町や安久町では正応寺や西生寺などの寺がみられるが、いずれも明治初期の廃仏毀釈により廃寺となっている。現在では建物は残っておらず、古石塔類が残るのみとなる。また、周辺には大岩田城跡や梅北城跡といった中世城郭も存在している。一方、この時期の集落遺跡の調査事例としては、水田跡、溝状遺構、道路状遺構が検出された嫁坂遺跡や上述の筆無遺跡などがある。

近世では、中世末～近世の墓壙が合計143基も検出された尾崎第1遺跡（貴船寺跡）がある。これらの墓壙からは、煙管、土鈴、軽石製独楽など豊富な副葬品がみつかっている。また、中世に引き続き西生寺跡などの宗教施設が数多く確認されている。さらには、国道269号線沿いに位置する今町一里塚は近世の道標であり、国指定の史跡となっている。

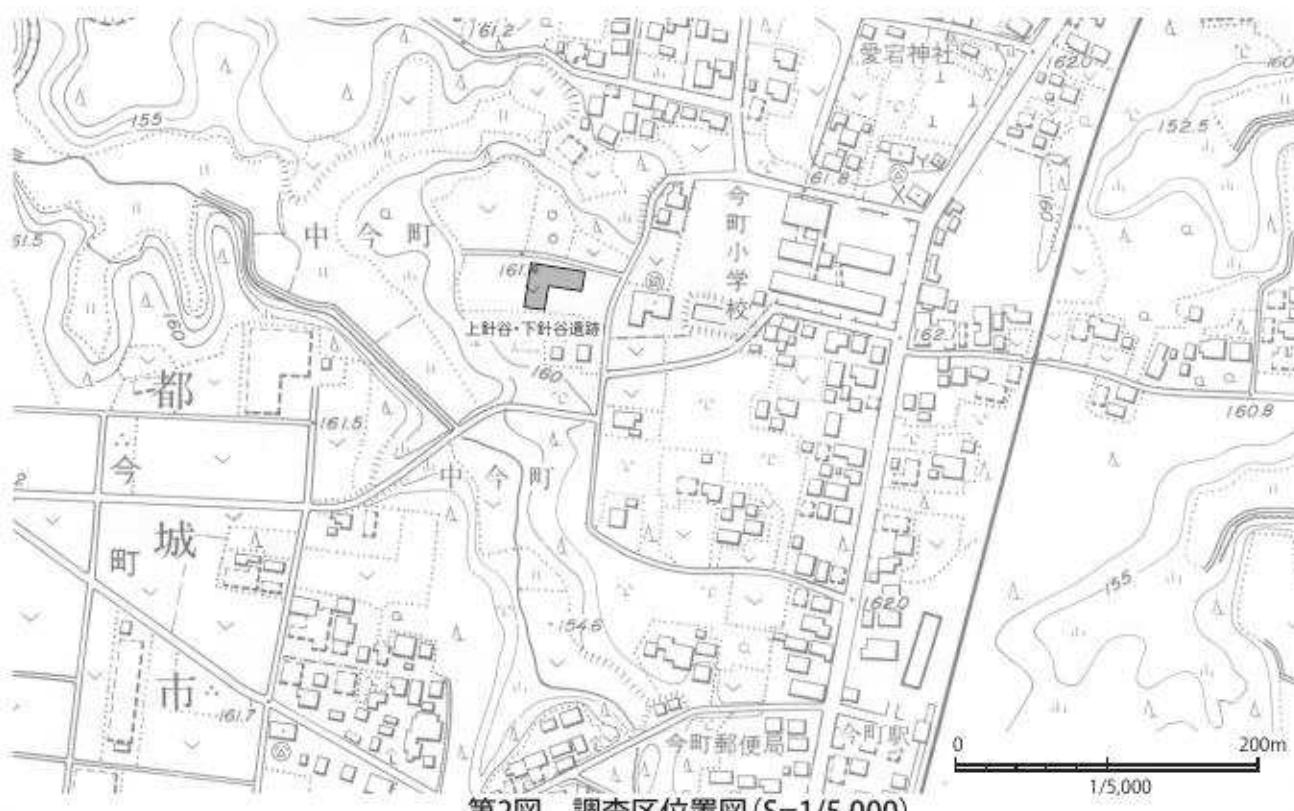
第3章 発掘調査の成果

第1節 調査の方法と概要

調査対象地は都城市今町8917番に所在し、国道269号線から西に200m程入った場所に位置する。調査前は畠地であった。工事計画によれば、既存の建物の隣接地に保育園の園舎を建て替えるというものであった。そこで、計画地内で事前の試掘調査により遺跡が遺存していると判断された約666m²について発掘調査を実施した。

調査区は南北に約30m、東西に約36mのL字を時計回りに90°回転させたような形を呈する。調査区の西には大淀川、東にはその支流である梅北川が南北に流下しており、本遺跡は両河川に挟まれた成層シラス（二次シラス）台地上に位置する。標高は調査区の西部が高く、そこから東に向かうにつれ緩やかに下がるが、ほぼ平坦といってよい程の緩い傾斜である。現地表面である表土層以下、概ね水平な堆積をみせる。なお、調査区の設定にあたっては、公共座標軸系のSN座標線に一致した10×10mを1区画とし、東西方向を西から1、2、3…の順に算用数字で、南北方向を北からA、B、Cの順にアルファベットで表記した。この組み合わせで区名を付けた。

発掘調査はまず重機による表土剥ぎを行った。事前に実施した確認調査では、現耕作層である表土層の直下が平安時代～中世相当の遺物包含層である範囲が多かったため、表土のみを重機により剥ぎ取った。調査区南東部の一部で桜島文明軽石が遺存している範囲については、



この軽石層も残した。それ以下は人力で掘り下げ、まず基本土層のIV層上面での遺構検出を試みた。その結果、平安時代～中世期の掘立柱建物跡が1棟、土坑4基、ピット16基、硬化面を伴う溝状遺構1条を確認した。掘立柱建物跡SB1は東辺1面に庇が付く。また、同一面で弥生時代の竪穴住居跡4基を検出したが、これは本来の掘り形を検出したものではなく、遺構が完全に埋没する以前の擂鉢状を呈していたところに平安時代～中世の包含層（基本土層Ⅲ層の下部）が流れ込んだ範囲を捉えたものである。そのため、まずトレンチを設定し、本来の遺構の立ち上がりおよび掘り込み面を確認した後、その面まで全体的に掘り下げた。遺構の調査はIV層中で行っている。

これらIV層上面で検出した遺構を調査後、土層観察用トレンチを掘り下げた際に縄文時代の遺物が多く出土していた調査区北西側のA～C1・2区についてはV層を掘り下げ、VI層上面での遺構検出を試みた。この範囲ではV層中より多くの縄文時代晚期の遺物が出土した。当該時期の遺構としては、土坑2基とピットを4基検出している。この中で土坑墓と考えられるSC5からは縄文時代晚期黒川式期の深鉢と浅鉢がセットで出土しており、この時期の土器編年を考える上で貴重な資料といえる。また、VI層上面でV層に似た土が遺構内に堆積する弥生時代中期の竪穴住居跡1基も検出した。

第2節 遺跡の層序

本遺跡は大淀川・梅北川に挟まれた成層シラス台地上に位置しており、通常都城盆地の台地上およびその縁辺部の遺跡でみられるものと同様の土層堆積が確認された。鍵層となりえる火山灰は上位より桜島文明軽石、霧島御池軽石、鬼界アカホヤ火山灰等がみられる。標高的には西から東に向かい緩やかに低くなっていく。基本土層の設定にあたっては、試掘調査で確認できていた層順を基準とし、以下のとおり基本層序を設定した。

I層：灰白色砂質土（灰白色軽石を多く含みルーズ）

=表土

II層：浅黄橙軽石=桜島文明軽石

III層：黒色粘質シルト土（軽石をほとんど含まない）

IV層：黒褐色砂質シルト土

（1mm以下の黄橙色軽石をまばらに含む）

V層：黒褐色砂質シルト土

（1mm以下の黄橙色軽石を多く含む）

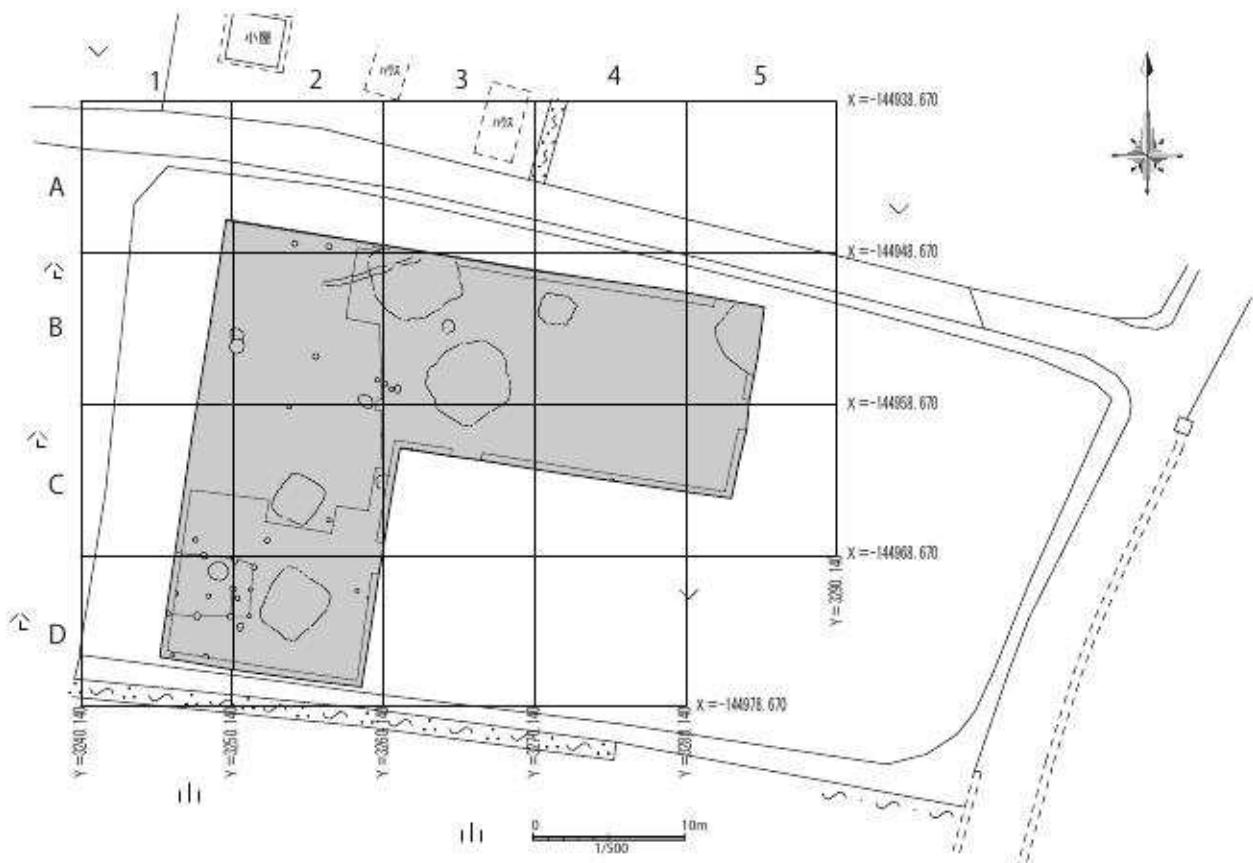
VI層：黒褐色砂質シルト土

（2mm以下の黄橙色軽石を多く含み硬くしまる）

VII層：黄橙色軽石=霧島御池軽石

地点により黒褐色砂質シルト土（1cm程の黄橙色

軽石を多く含む）と黄橙色軽石ブロックの混層



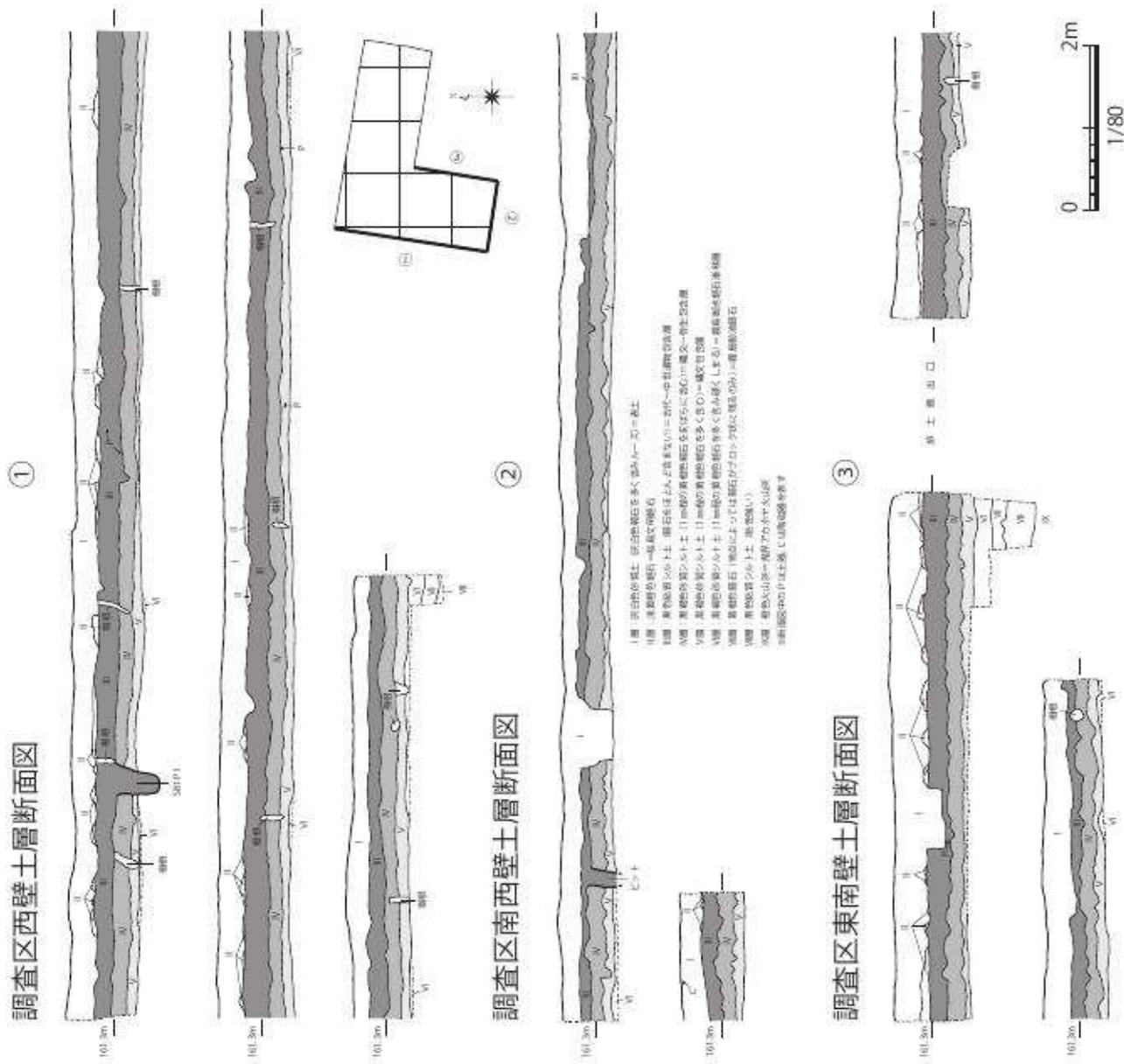
第3図 調査区域図 (S=1/500)

VII層：黒色粘質シルト土（粘性強い）

IX層：橙色軽石＝鬼界アカホヤ火山灰

I層は表土層で、多量の灰白色軽石を含む現代の耕作層である。耕作の際に持ち上げられたためか、わずかに弥生土器、中世の土師器、近世薩摩焼などが出土地する。II層は桜島文明軽石の一次堆積層に相当する。調査区全体で確認できるものではなく、標高の低い調査区南東付近のみに遺存する。水田面のような攪拌状況や凹凸、畝状遺構のような起伏もみられず、下位のIII層との境界はフラットである。III層は黒色粘質シルト土で、古代～中世の遺物包含層である。軽石はほとんど含まない。IV層は黒褐色砂質シルト土で、III層に比べてやや色調が明るくなり、黄橙色軽石を含むようになる。弥生土器および縄文土器を包含する層である。V層はさらに多くの軽石を含む層で、上部では縄文土器が出土する傾向にあ

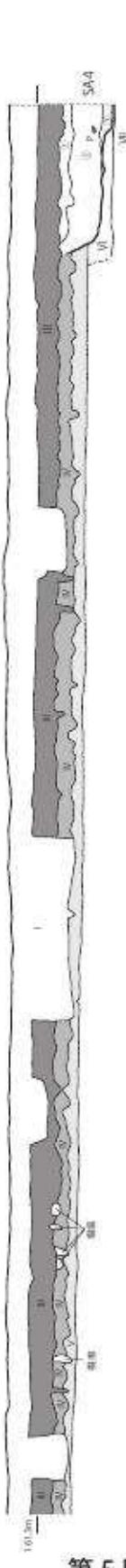
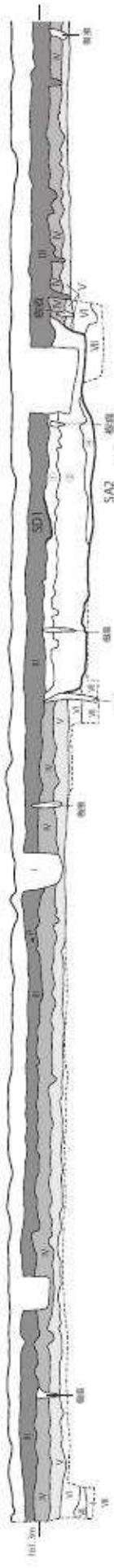
る。VI層は霧島御池軽石の漸移層で、黄橙色軽石を多く含み硬くしまる。遺物は出土していない。VII層は霧島御池軽石層である。ただし、本遺跡での御池軽石の堆積は不安定で、VI層と軽石層のブロックが混在して堆積するような状況をみせる範囲が多い。御池軽石が層として堆積する範囲についても層厚は薄く、10cm程度を測るのみである。VII層は黒色粘質シルト土で、粘性が極めて強い。VII層との境界付近には御池軽石が混在する状況がみられる。IX層は鬼界アカホヤ火山灰に相当する層である。VII・IX層については、トレンチの一部の深掘りを行った部分と弥生時代の住居内にみられる柱穴の壁面のみで確認している。また、確認調査では鬼界アカホヤ火山灰よりも下位の層を確認しているが、遺物・遺構は検出されていないため、本調査では基本的にVII層より下位までは掘り下げておらず、本調査の対象は御池軽石より上位の時代・時期（縄文時代後期以降）となる。



第4図 調査区土層断面図①(S=1/80)

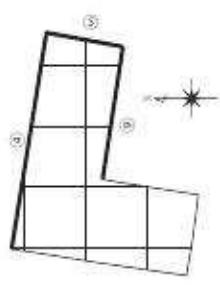
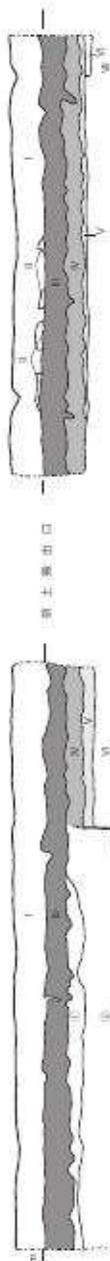
調査区北壁土層断面図

④



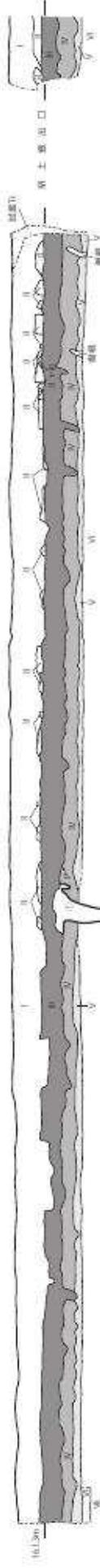
調査区東壁土層断面図

⑤



調査区南東壁土層断面図

⑥



P20

1. 砂白粘性土 (白色細粒砂多く含むルート) → 粘土

II. 黄褐色砂 (ルート) → 粘土とほとんど混ざる) → 砂白粘性土

III. 黄褐色砂質粘土 (ルート) → 砂白粘性土多く含む) → 砂白粘性土

IV. 黄褐色砂質粘土 (ルート) → 砂白粘性土多く含む) → 砂白粘性土

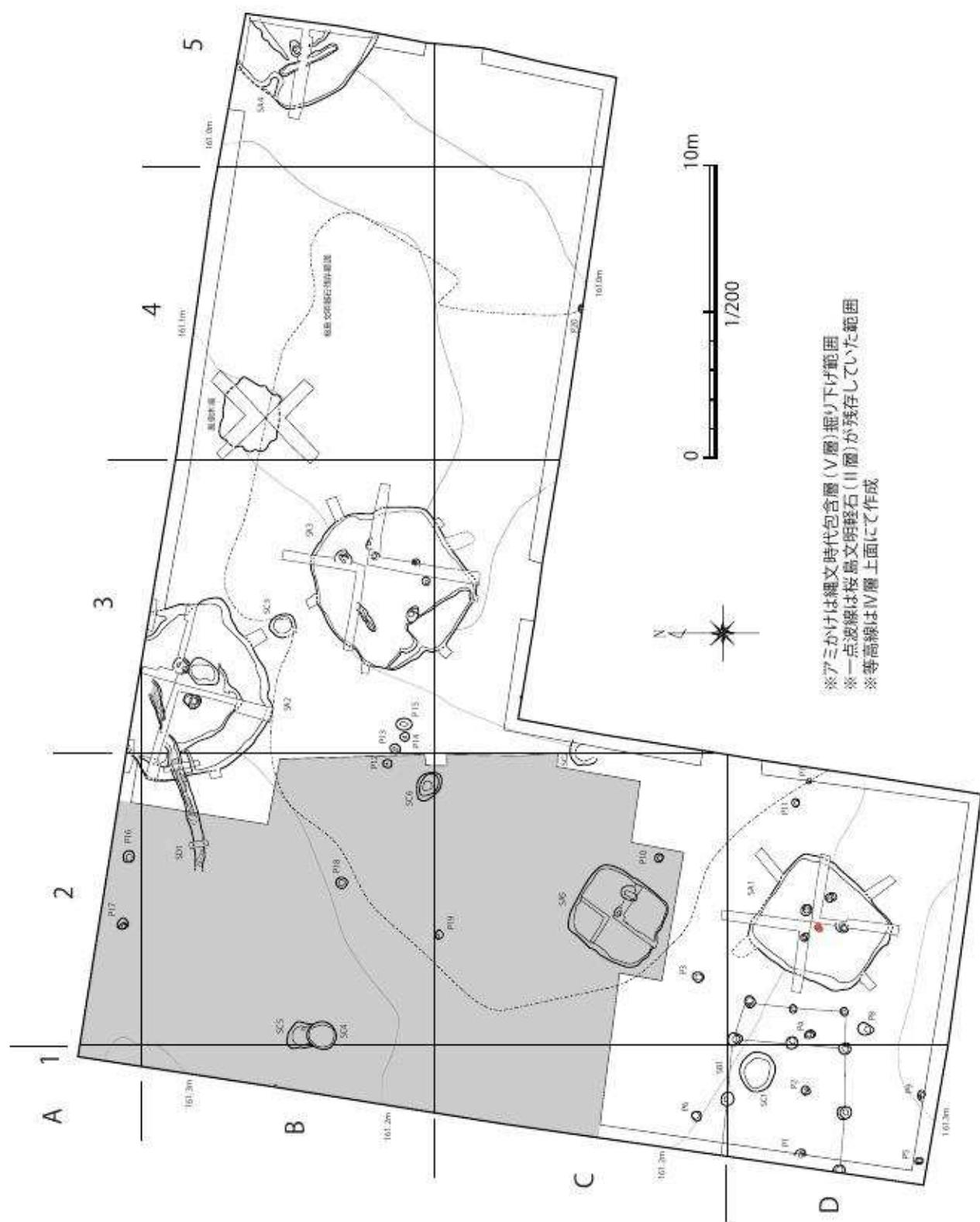
V. 黄褐色砂質粘土 (ルート) → 砂白粘性土多く含む) → 砂白粘性土

VI. 黄褐色砂質粘土 (ルート) → 砂白粘性土多く含む) → 砂白粘性土

地盤面

0
2m
1/80

第5図 調査区土層断面図②(S=1/80)



第6図 遺構配置図 (S=1/200)

第3節 繩文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては、2基の土坑と4基のピットを検出している。これは調査期間を考慮し、調査区外縁に沿って設定した土層観察用の先行トレントの掘り下げ時に、縄文時代の遺物がまとまって出土した調査区北西部のA～C1・2区のみを対象として調査した結果である。そのため、既に弥生時代の堅穴住居跡の掘削により縄文時代の遺物包含層が消失している範囲以外については、この他にも縄文時代の遺物・遺構が遺存していた可能性は残る。

出土土器をみると縄文時代後期後葉中岳II式土器が極少量出土しているが、大部分は晩期中葉の黒川式期の資料といえる。遺物が出土しておらず、細かな時期比定が難しい遺構もあるが、出土遺物の量からは、検出した遺構の多くが縄文時代晩期の所産であるものと推測される。以下、検出した遺構・遺物を個別に報告する。

1 土坑 (SC)

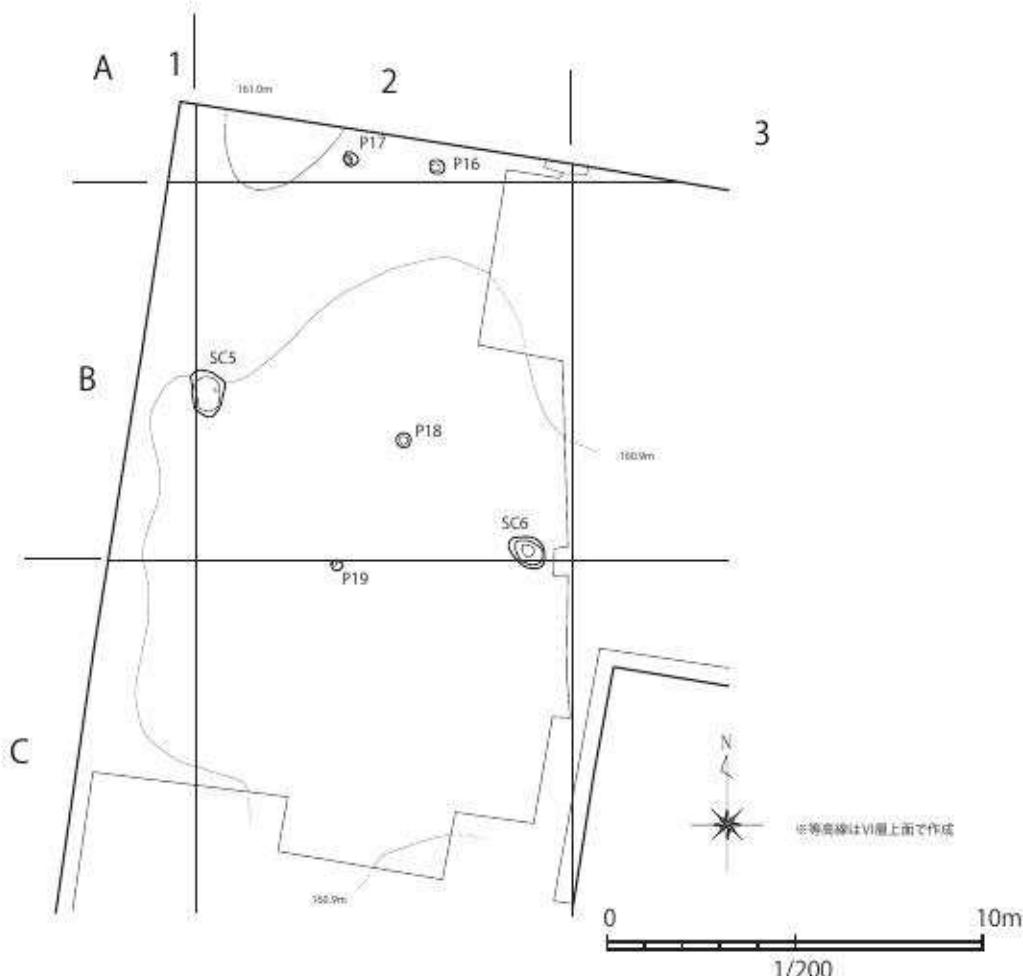
縄文時代の土坑は2基検出している。長軸が1m以上

あるものを土坑とし、それ以下の円形を基調とするものをピットとして調査した。

SC5 (第8～17図)

B1・2区で検出した長軸1.22m、短軸0.87mの不整長椭円形の土坑である。断面形態は概ね縦長の逆台形を呈する。検出面からの深さは85cm程を測る。VI層上面で検出しているが、土層断面を観察すると、本来の掘り込み面はV層中にあった可能性が高い。断面観察からも掘り込み面付近の明確な立ち上がりは確認できなかったものの、V層の掘り下げ中にも遺構の上位から遺物が多く出土する傾向にあった。そのため、V層中からの出土として取り上げた遺物の中にも、本来はSC5の埋土上部から出土したもののが含まれているものと想定される。

遺構内埋土の観察からは、最上位から底面まで合計4層の堆積土を確認できた。いずれの層も擂鉢状の堆積をみせる。上位の1層とその下位にある3層の境界からは大きめの土器片が出土している。擂鉢状の堆積ではあるものの、個別の層に厚みがあることや3層にはアカホヤ火山灰ブロックが含まれることなどから、土坑を掘り上げた後、短期間で埋め戻された可能性が高いといえる。



第7図 縄文時代遺構配置図 (S=1/200)

遺物の出土状況をみると、最下層の4層からもわずかに遺物が出土しているが、大部分は1層中より出土していることがわかる。ただし、4層出土の土器と1層出土土器が接合関係にあることから、先述のように短期間で埋め戻されたものと推測される。

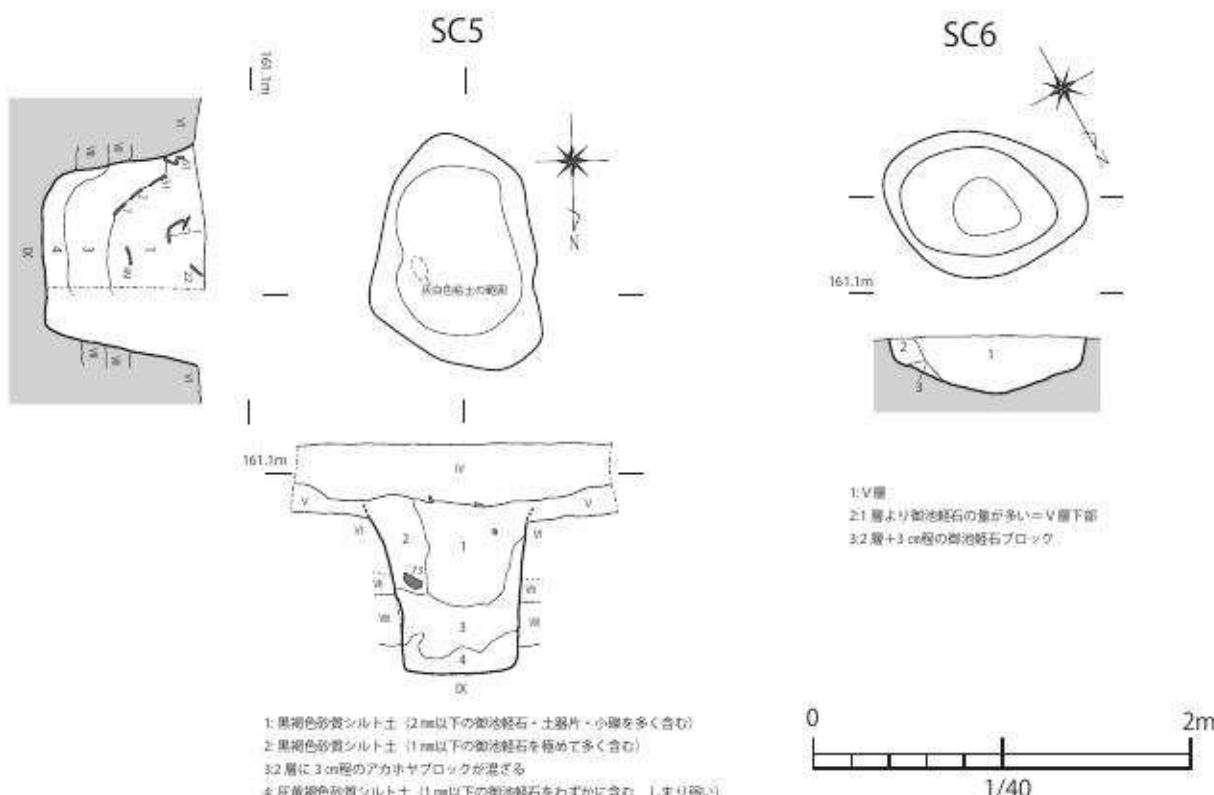
また、最下部の底面付近に堆積する4層中の一部分、底面から若干浮いた状態で、10cm四方の灰白色粘土のブロックを検出した。この灰白色粘土ブロックを含め、SC5内の埋土および比較対照のために基本土層のV層について蛍光X線によるリン・カルシウム分析を実施している（第4章第3節参照）。その結果、遺構埋土内で採取した土壤サンプルのうち、上位（1層）より採取したものはリン・カルシウムとともに高い値を示している。さらに、床面近くで検出された灰白色粘土では高い値のカルシウムが検出されている。遺構内埋土の下層（4層）からはリン・カルシウムとともに目立つ値はみられない。

次に出土遺物をみていく。1～52は深鉢である。いずれも完形に復元できる資料ではないが、遺存度の高い1・2・47・49・50をみると、外側に張り出す底部から胴部にかけて開きながら立ち上がり、肩部で逆「く」の字に屈曲し、再度頸部から口縁端部に向かい開きながら立ち上がる形態を呈する。1～3、5のように頸部外面に沈線あるいは強いナデ状の段がみられる資料がある。内外面ともにナデにより調整されるものが多いが、4のように

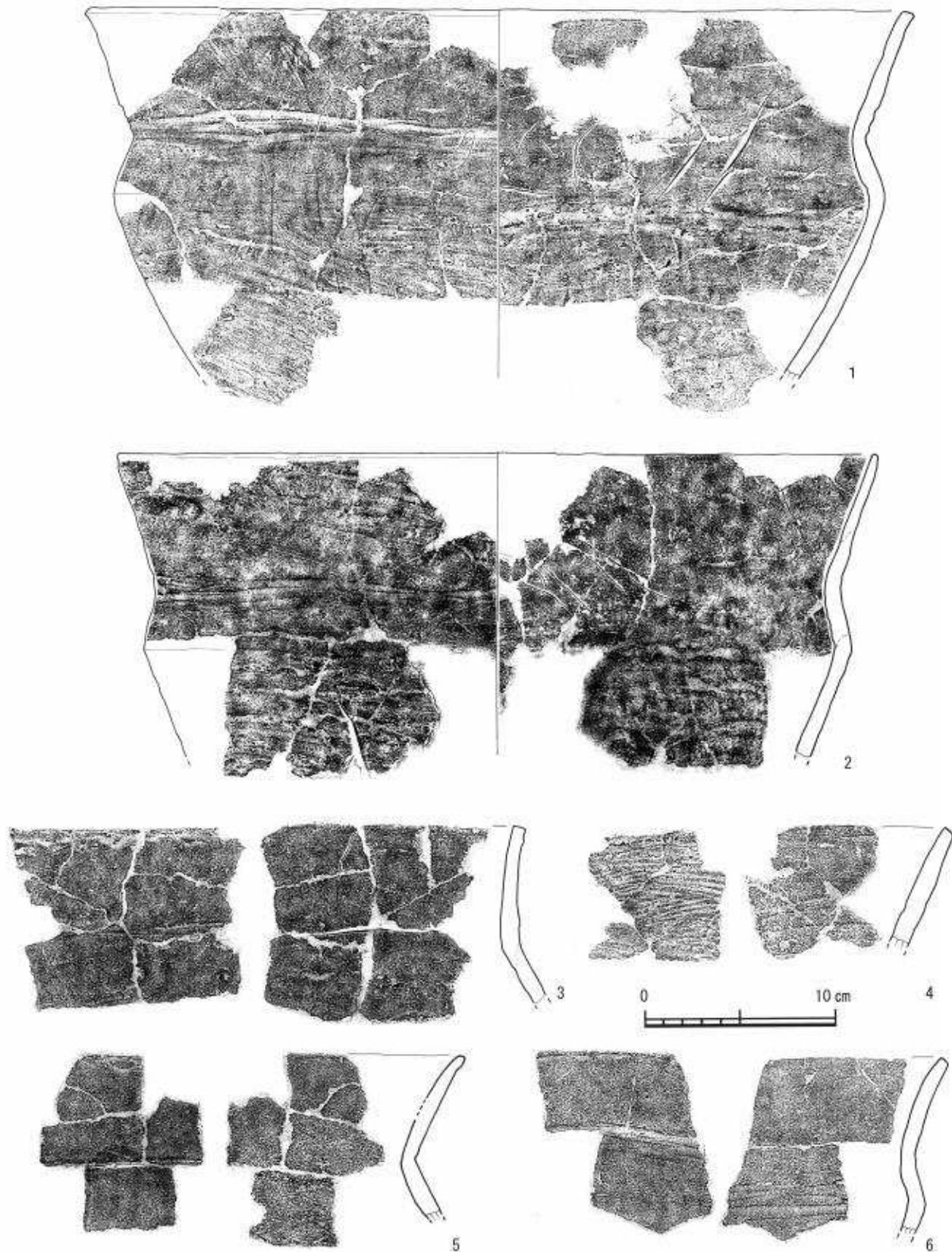
外面が条痕調整のものも認められる。1や2のようにナデ調整が粗雑で、細かな削痕が残るもの、5・6のように比較的丁寧なナデ調整が加えられ器面が平滑となる資料などがある。内面は頸部の屈曲より上位は丁寧なナデ調整、下位は粗雑なナデ調整になり中にはケズリ状のナデ調整が加えられ、砂粒の移動の痕跡が顕著な資料もある。52も深鉢の底部と考えられるが、平底であり胎土に金雲母が大量に含まれるなど、やや顔つきの異なる資料である。また、2と47の資料は出土位置や器形、胎土などから同一個体の可能性が高いが、接合しなかったことと図上復元した法量が若干異なることから別個体として報告している。

53～60は半粗半精製の鉢形土器である。丸底で口縁部に向かい大きく開きながら立ち上がる器形を呈すると考えられる。53と55は同一個体の可能性が高いが、接合しなかったこととそれぞれ異なる地点の包含層から出土した破片と接合したため、別個体として報告している。いずれも外面は粗いナデ調整で、砂粒の移動が顕著である。内面はミガキあるいは条痕調整後にミガキが加えられる。内外面ともにススが付着している資料が多い。53の資料は¹⁴C年代測定を行ったところ、 $2,930 \pm 30BP$ (cal BC 1220～1020) という値が得られている（第4章第1節参照）。また、組織痕をつける資料は皆無である。

61～66は精製の浅鉢である。61と66についても、



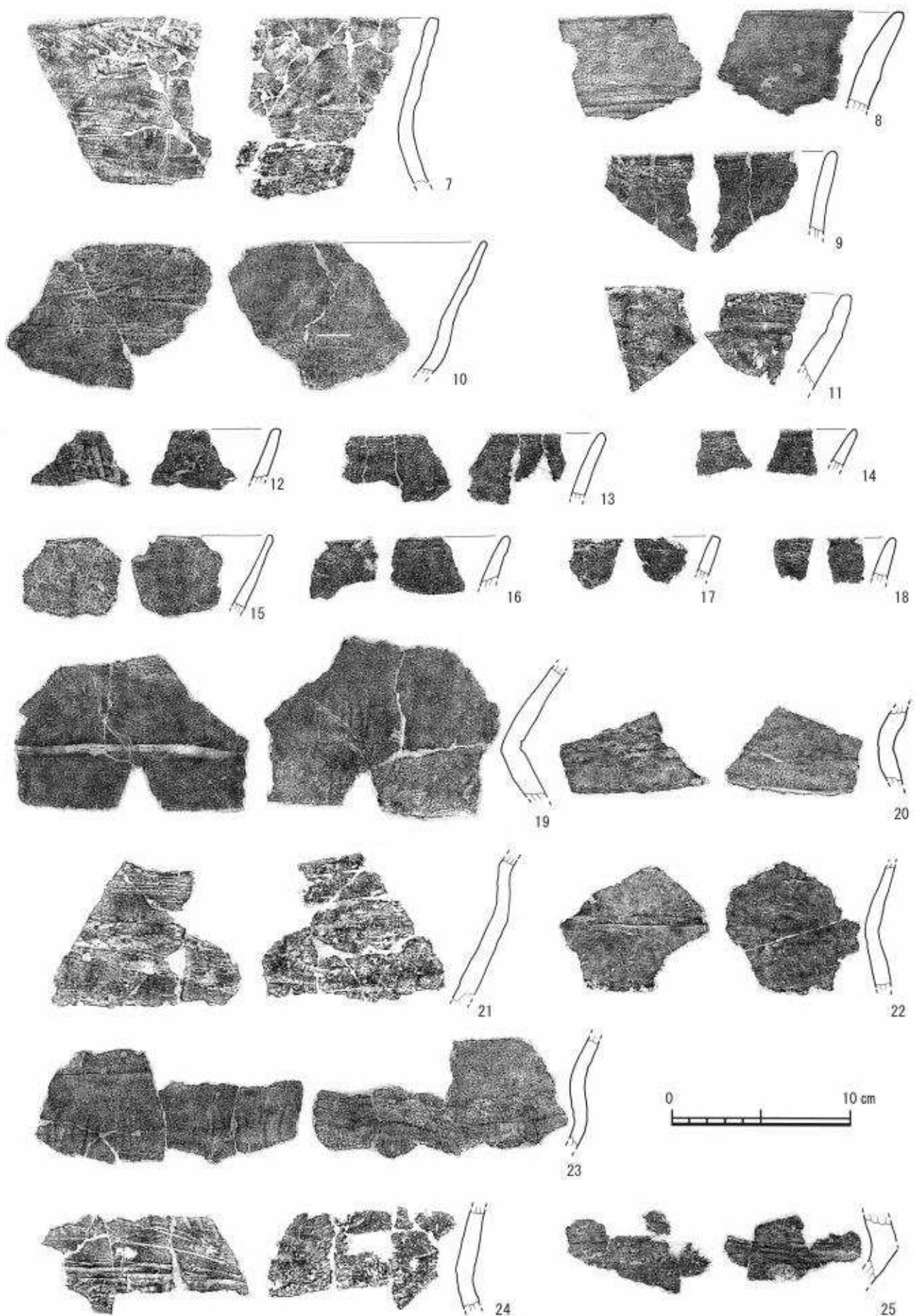
第8図 SC5・6 実測図 (S=1/40)



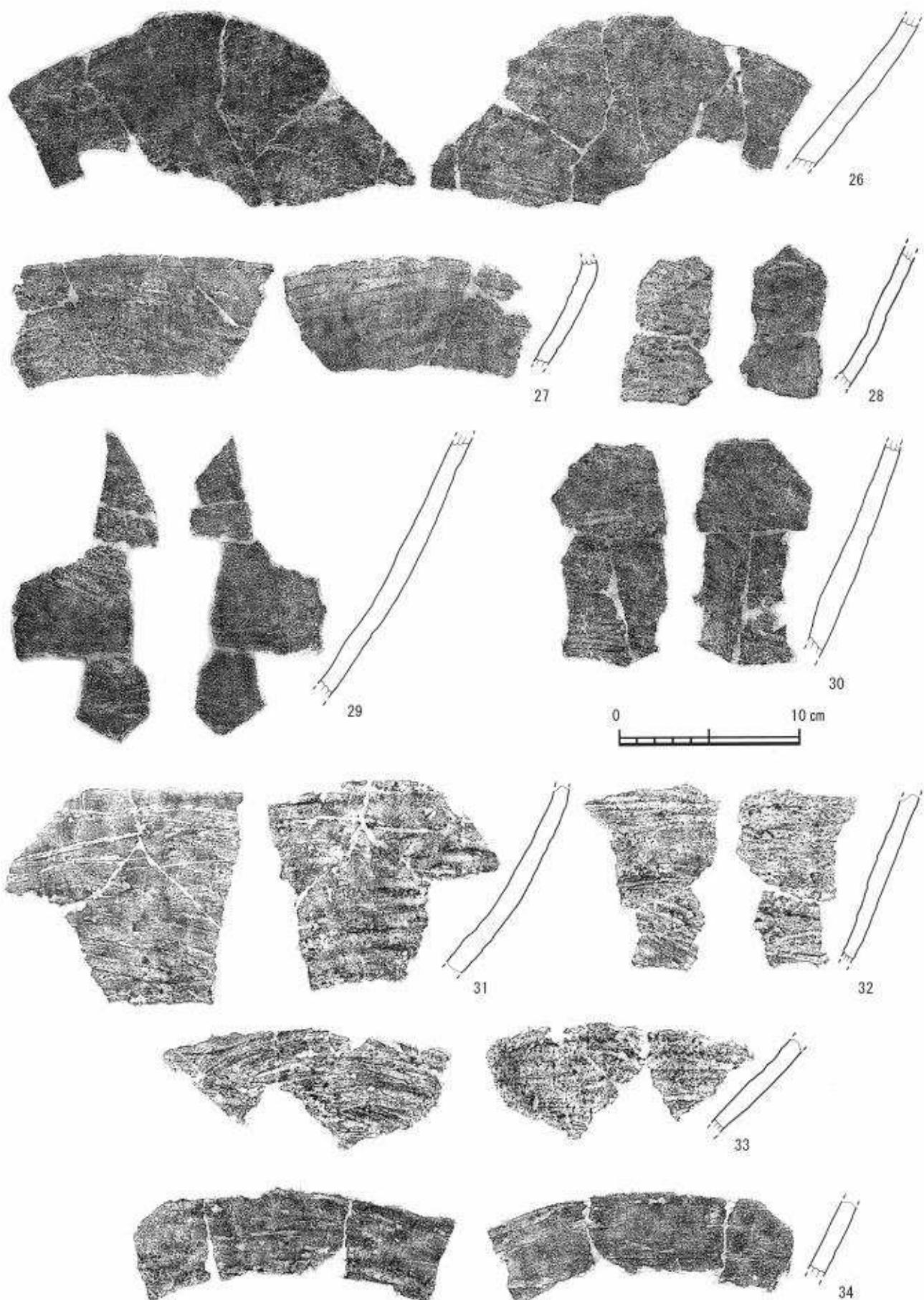
第9図 SC5 出土遺物実測図① (S=1/3)

同一個体の可能性が高いが、66は接合した破片のうちSC5から出土したのは小破片2点のみであり、大部分は包含層からの出土であるためこれも別個体として報告している。61のように逆「く」の字の胴部が丸みをおび、

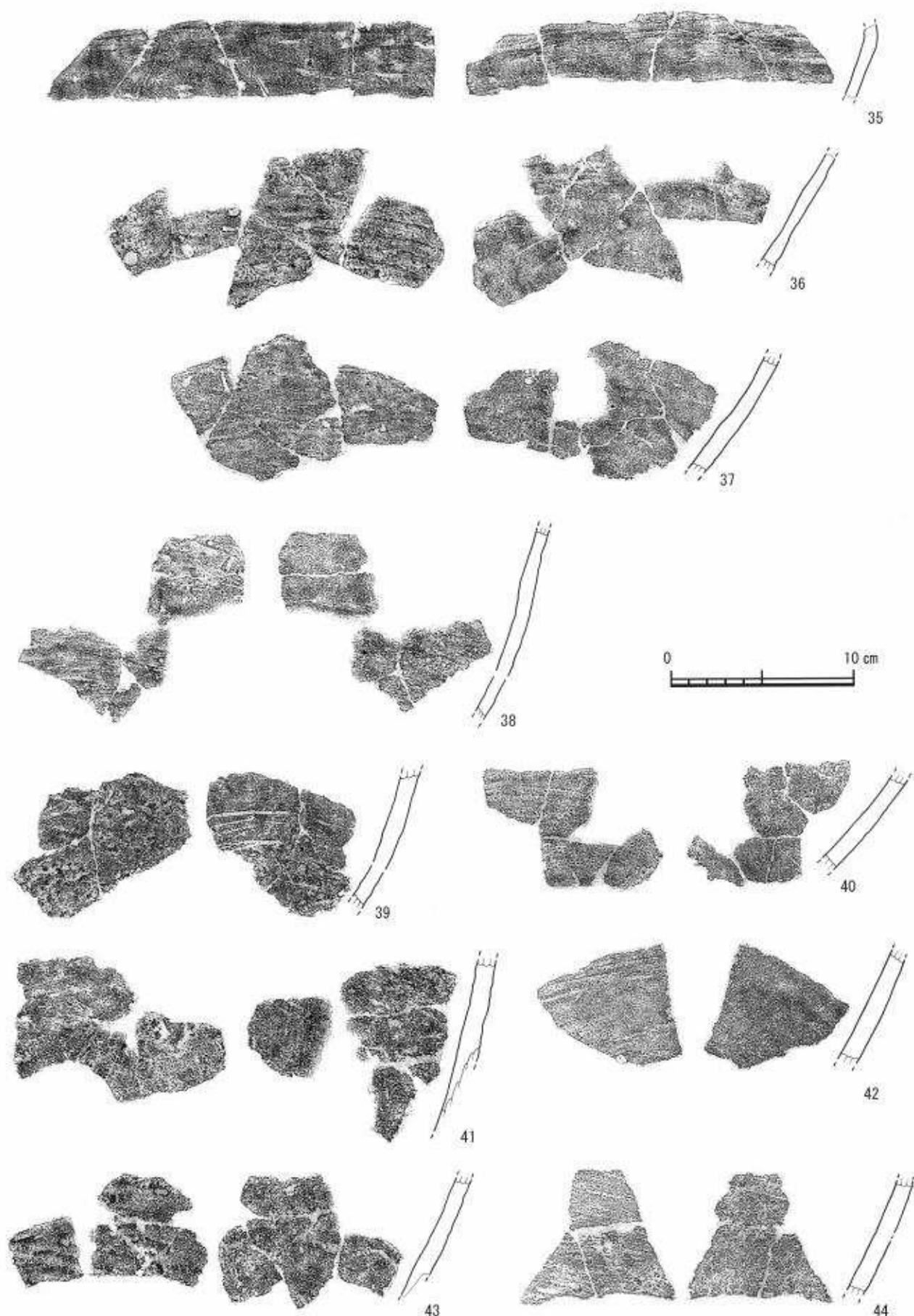
頭部から口縁部にかけ再度「く」の字に短く屈曲するものや、62のように胴部が強く屈曲し、稜線が明確なもの、63のように胴部が強く逆「く」の字に折れ、頭部から口縁部までやや長めに延びるものなどバリエーションが



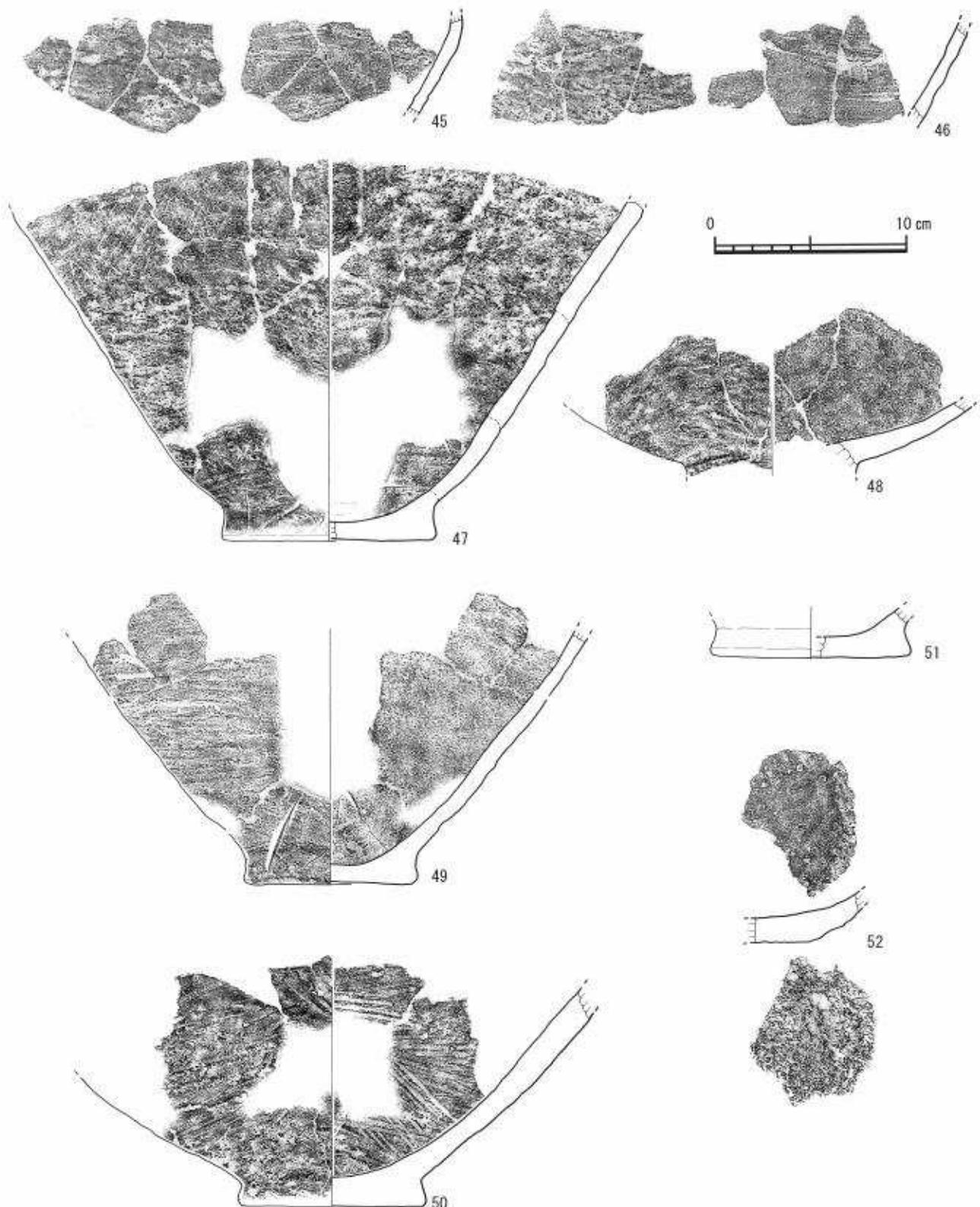
第10図 SC5出土遺物実測図② (S=1/3)



第 11 図 SC5 出土遺物実測図③ (S=1/3)



第12図 SC5出土遺物実測図④ (S=1/3)



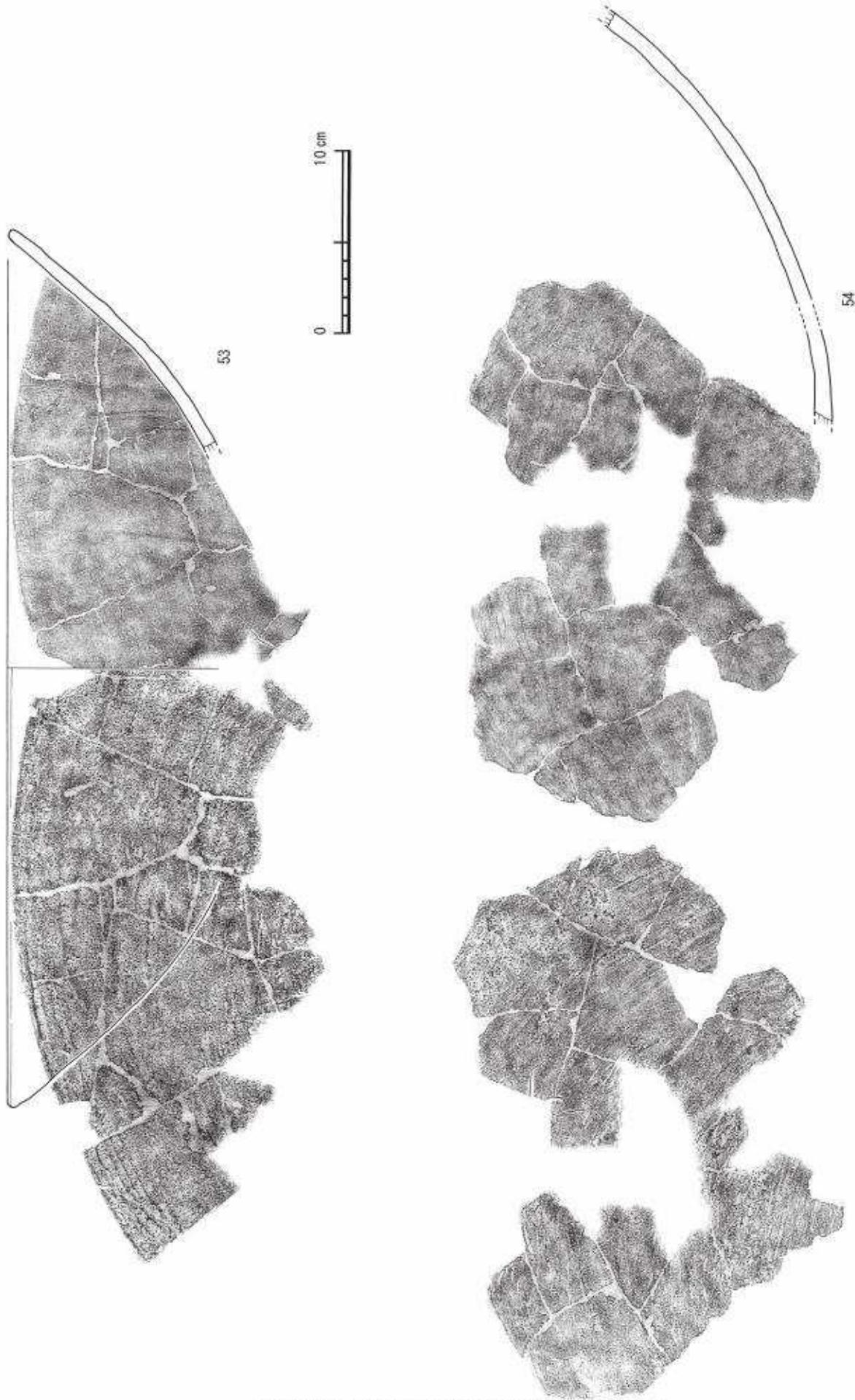
第13図 SC5出土遺物実測図⑤ (S=1/3)

みられる。口縁端部の外面には沈線がめぐる。66の胴部には2箇所の補修孔が認められる。

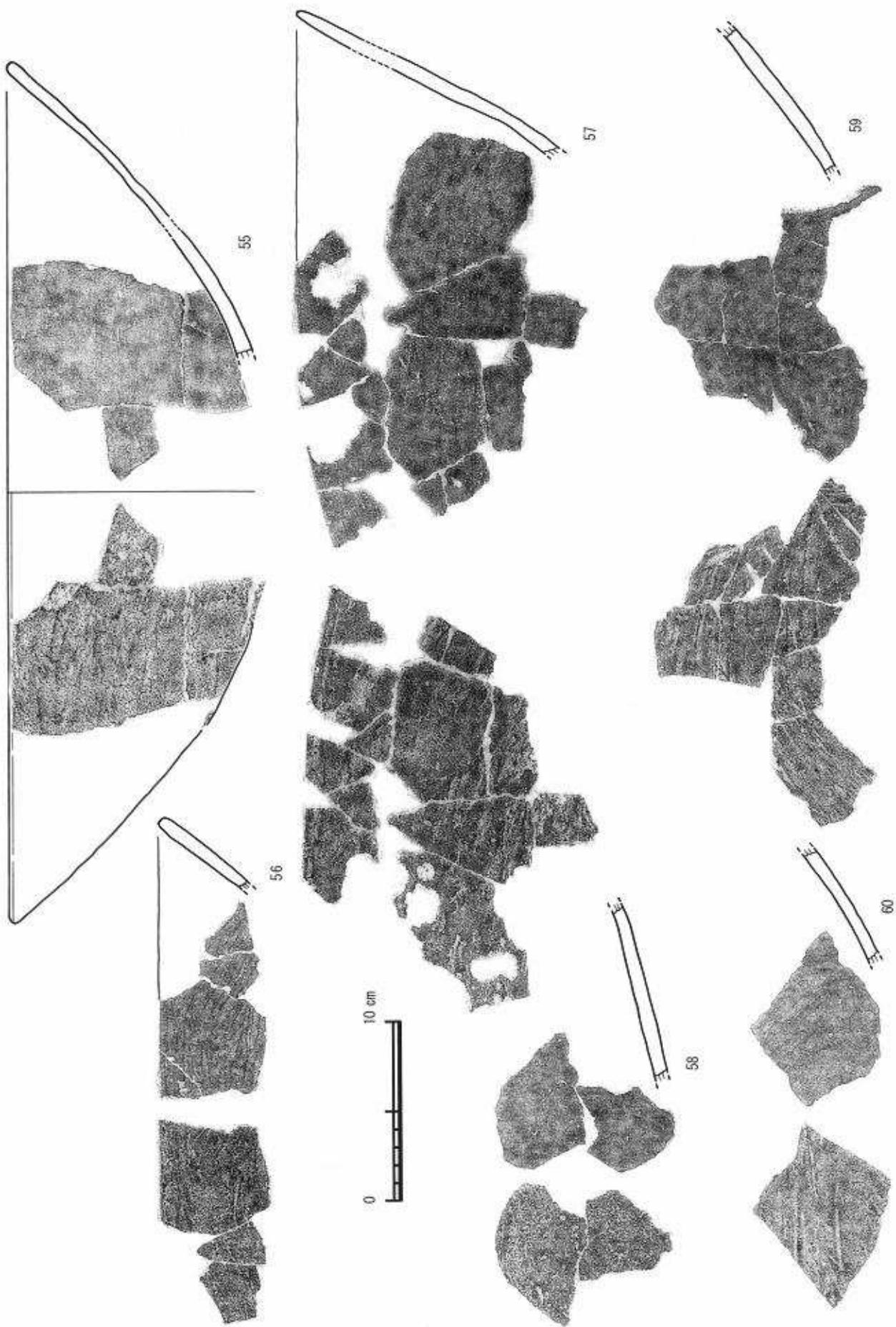
67～73はSC5から出土した石器である。67はチャート製の石鏃で五角形を呈する。68は頁岩製の石鏃未製品。71・72は横刃型石器である。73は石皿。

以上のような出土遺物の様相からは、縄文時代晩期黒川式期の中でも古手の様相が看取できる。

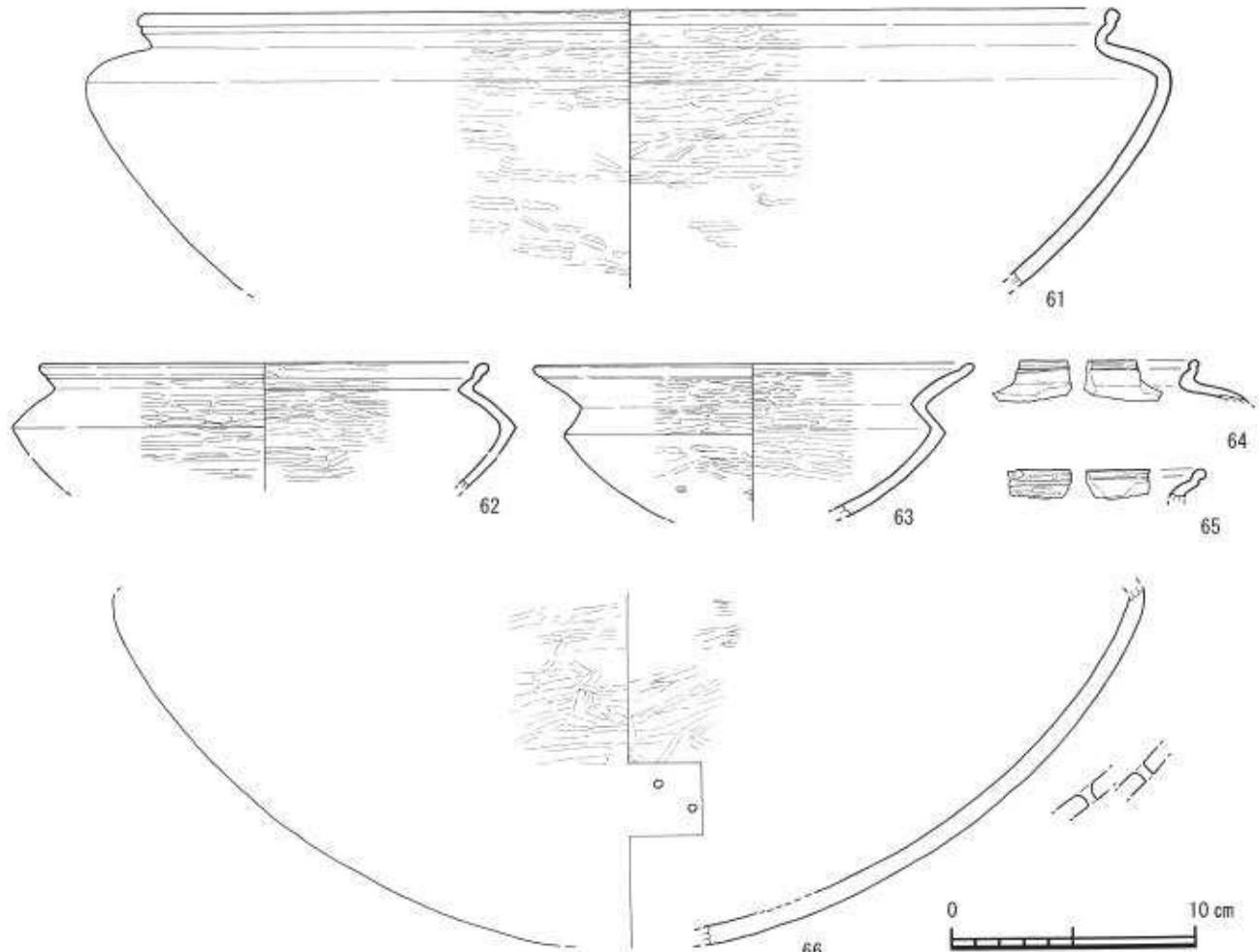
本遺構は、調査時にも遺物の出土状況や遺構の形態等から土坑墓の可能性が高いと考えていたが、リン・カルシウム分析からもなんらかの生物遺体等が存在していた



第14図 SC5 出土遺物実測図⑥ (S=1/3)



第15図 SC5 出土遺物実測図⑦ (S=1/3)



第16図 SC5出土遺物実測図⑧ (S=1/3)

可能性が高いとされる。しかし、墓であるという確たる証拠となりえる人骨は検出されておらず、また、土坑内からは多くの遺物が出土しているものの、副葬品たる完形の資料は皆無である。さらに、遺存度の高い資料についても、土坑周辺からやや離れた地点の包含層出土破片と接合しているものが多く、土坑内で完結するものではない。そのため、土坑の規模・形態並びにリン・カルシウム分析の結果からは土坑墓である可能性が高いものの、確定できる程の要素は揃っておらず、ここではその可能性を指摘するにとどめておきたい。

SC6 (第8図)

B・C2区のVI層上面で検出しており、長軸1.04m、短軸0.78mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最大で30cmを測る。埋土には基本土層のV層が堆積する。遺物は検出面近くで黒川式の浅鉢片が出土している。

2 ピット(P)

今回の調査で縄文時代に属すると考えられるピットは

4基検出している。これらは掘立柱建物跡のような規則的な配置をみせるものではなく、いずれも単体のピットである可能性が高い。

P16 (第18図)

A2区で検出しており、長軸0.38m、短軸0.36mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは40cmを測る。埋土の上半には基本土層のV層が堆積する。

P17 (第18図)

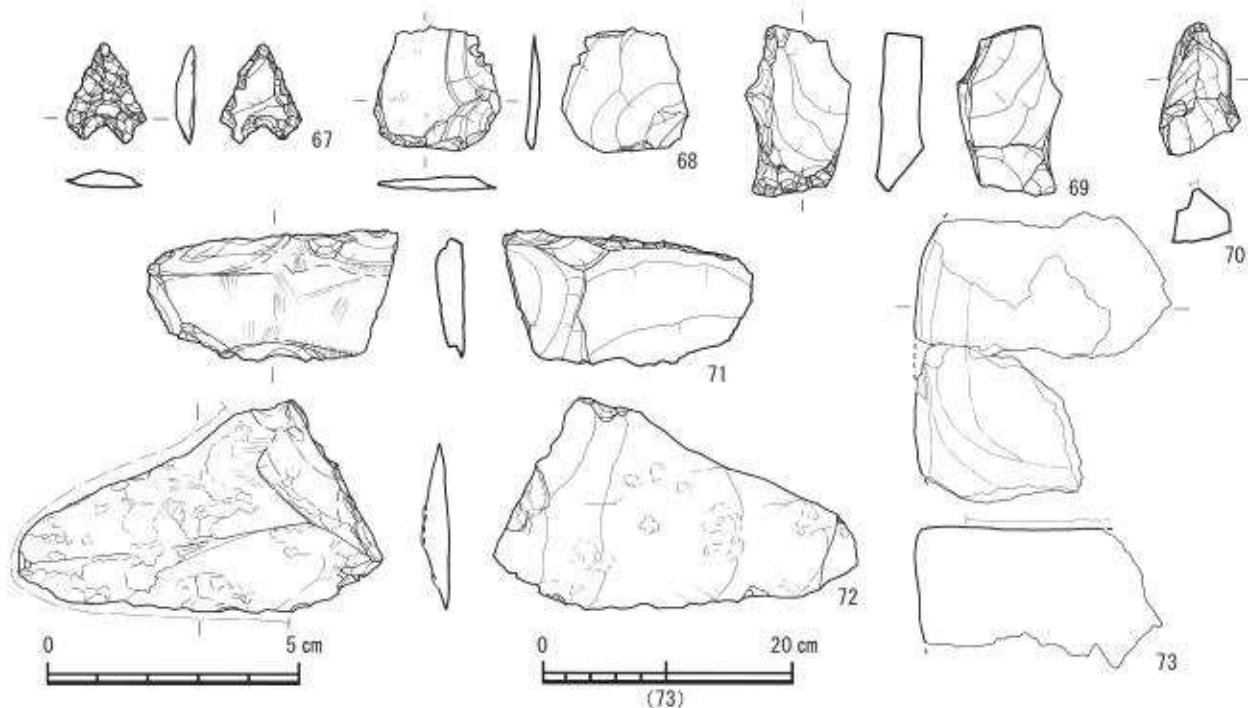
A2区、P16に隣接して検出しており、径0.4mの不整円形を呈する。検出面からの深さは30cmを測る。埋土にはV層が堆積する。

P18 (第18図)

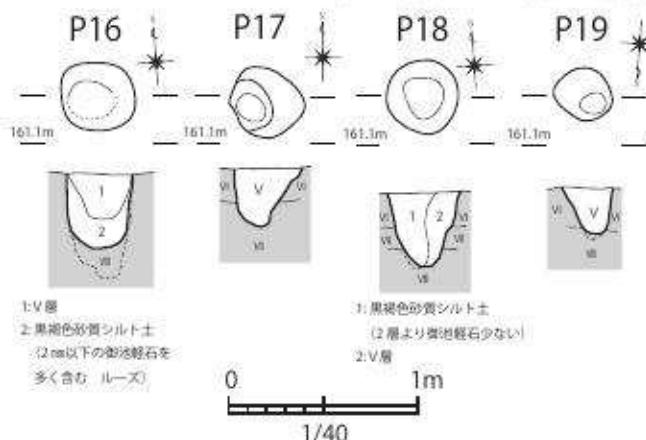
B2区で検出しており、径0.38mの円形を呈する。検出面からの深さは40cmを測る。埋土の約半分にはV層が堆積する。

P19 (第18図)

C2区で検出しており、長軸0.32m、短軸0.28mの楕円形を呈する。検出面からの深さは22cmを測る。埋土にはV層が堆積する。



第17図 SC5出土遺物実測図⑨ (S=2/3・1/6)



第18図 縄文時代のピット (P)
実測図 (S=1/40)

3 包含層出土遺物

縄文時代の遺物は基本土層IV層およびV層から出土している。量的にはV層上部からの出土が多い。時期的には少量の後期土器があるが、大部分は晩期中葉期の資料

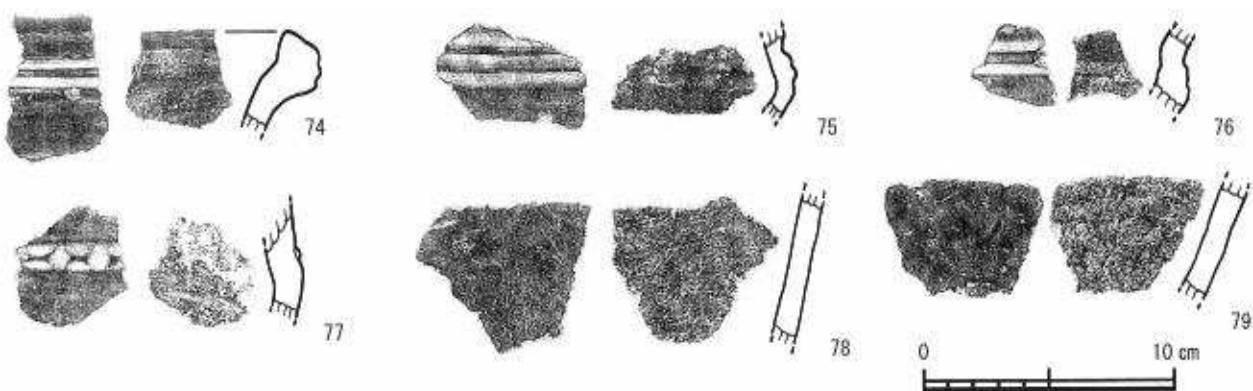
といえる。石器の出土量は土器に比してかなり少ない。以下、種別ごとに報告する。

土器

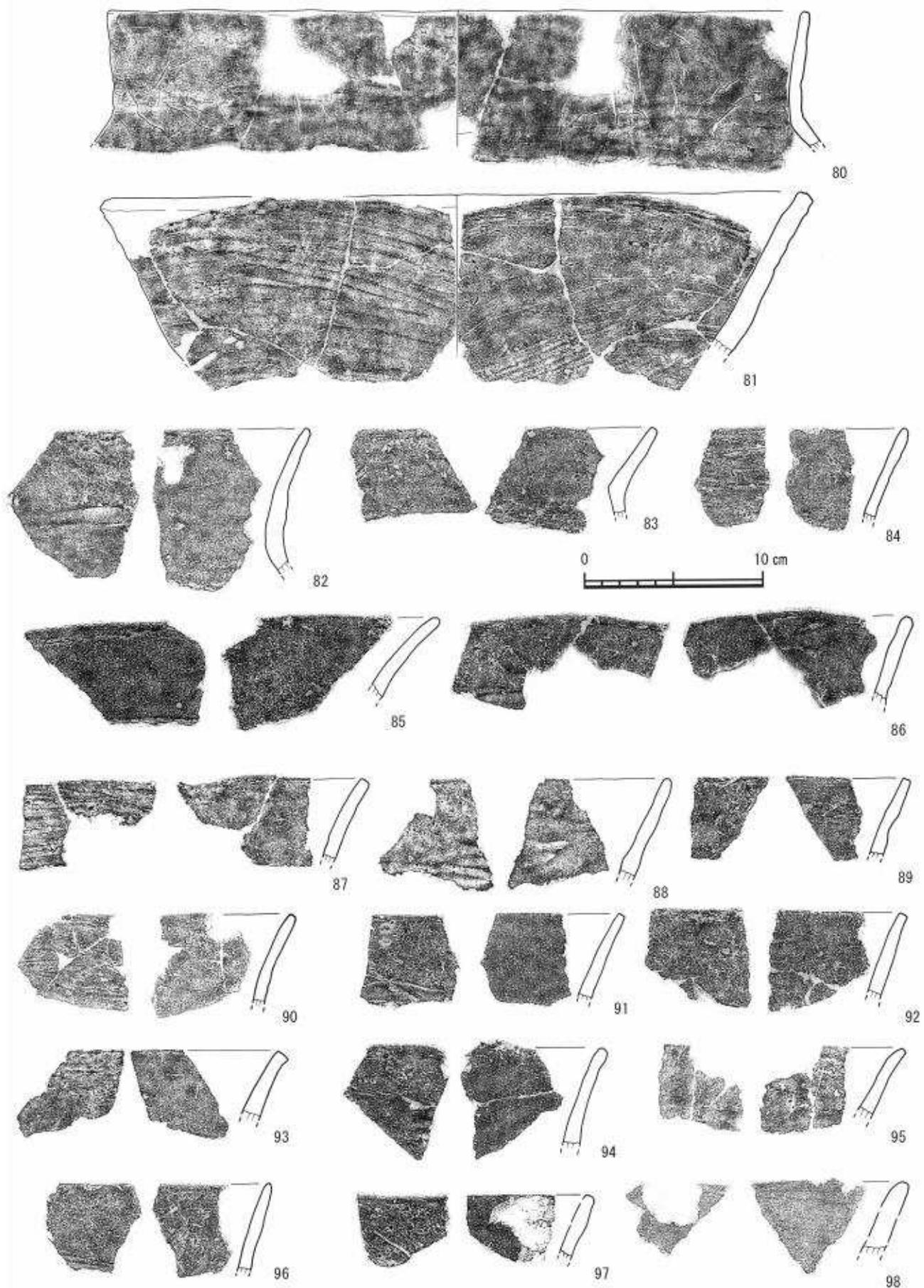
①深鉢形土器 (第19～29図 74～195)

I類 (第19図 74～79) 胴部がやや張り出し、口縁部に向かい緩やかに外反するもの。口縁端部は肥厚し、断面が三角形を呈する。口縁端部外面および胴部の屈曲点に凹線が施される。胎土は褐色系を呈す。後期後葉中岳II式に相当する。全体的な出土量は極めて少ない。

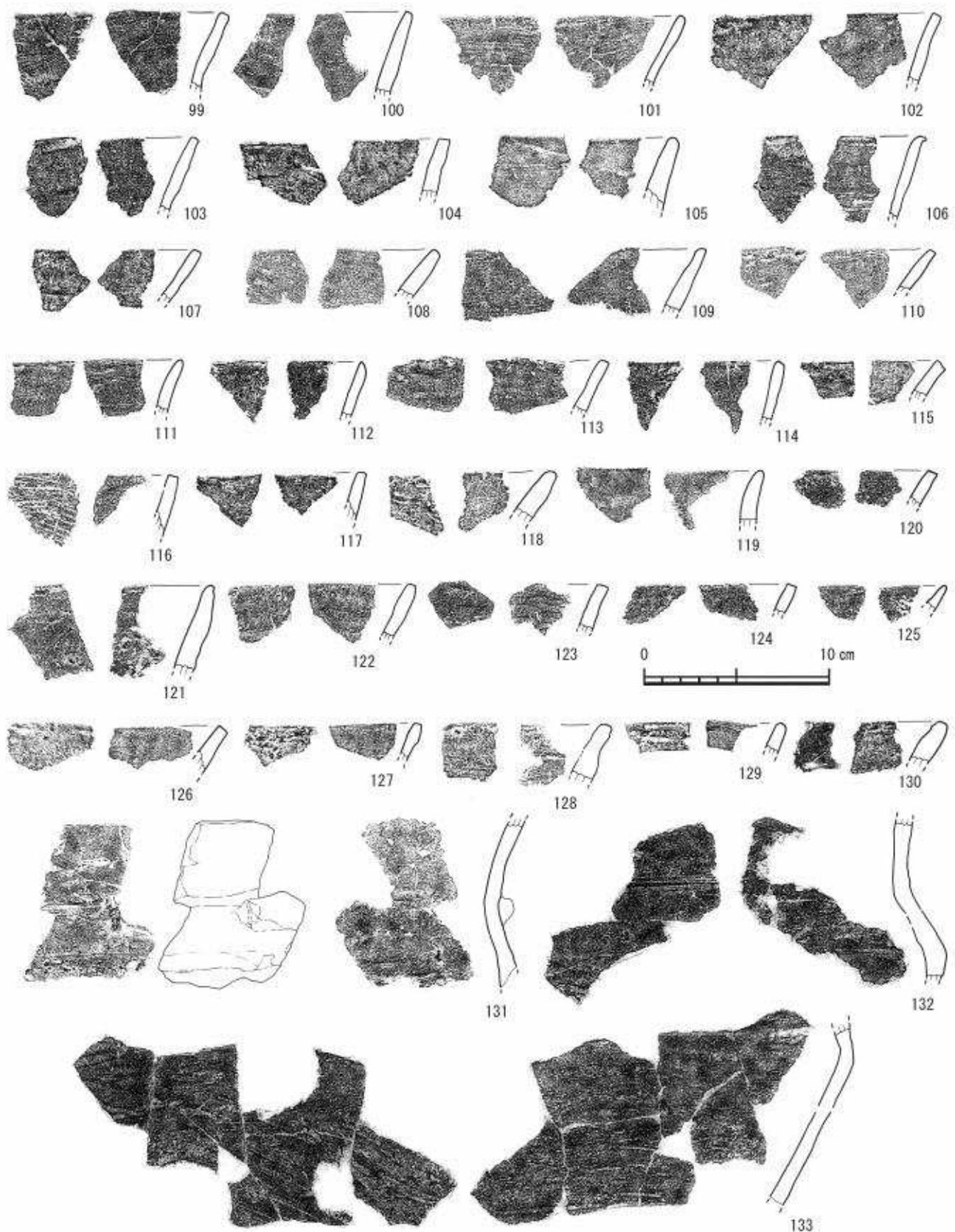
II類(第20・21図 80～130) 肩部が逆「く」の字に屈曲し、頸部から口縁部にかけては開きながら立ち上がるもの。外面はナデないしは条痕調整が加えられ、内面にはナデが施される。内面の胴部屈曲点以下は粗いケズリ状のナデが加えられるものが多い。口縁部はほぼ垂直に立ち上がるもの (80) や大きく開くもの (81) がある。口縁端部の整形も平坦面を作るもの (89～93など) や丸く取めるもの (85・86・94・98など)、舌状に先細るもの (96・



第19図 包含層出土縄文土器実測図① (S=1/3)



第20図 包含層出土縄文土器実測図② (S=1/3)

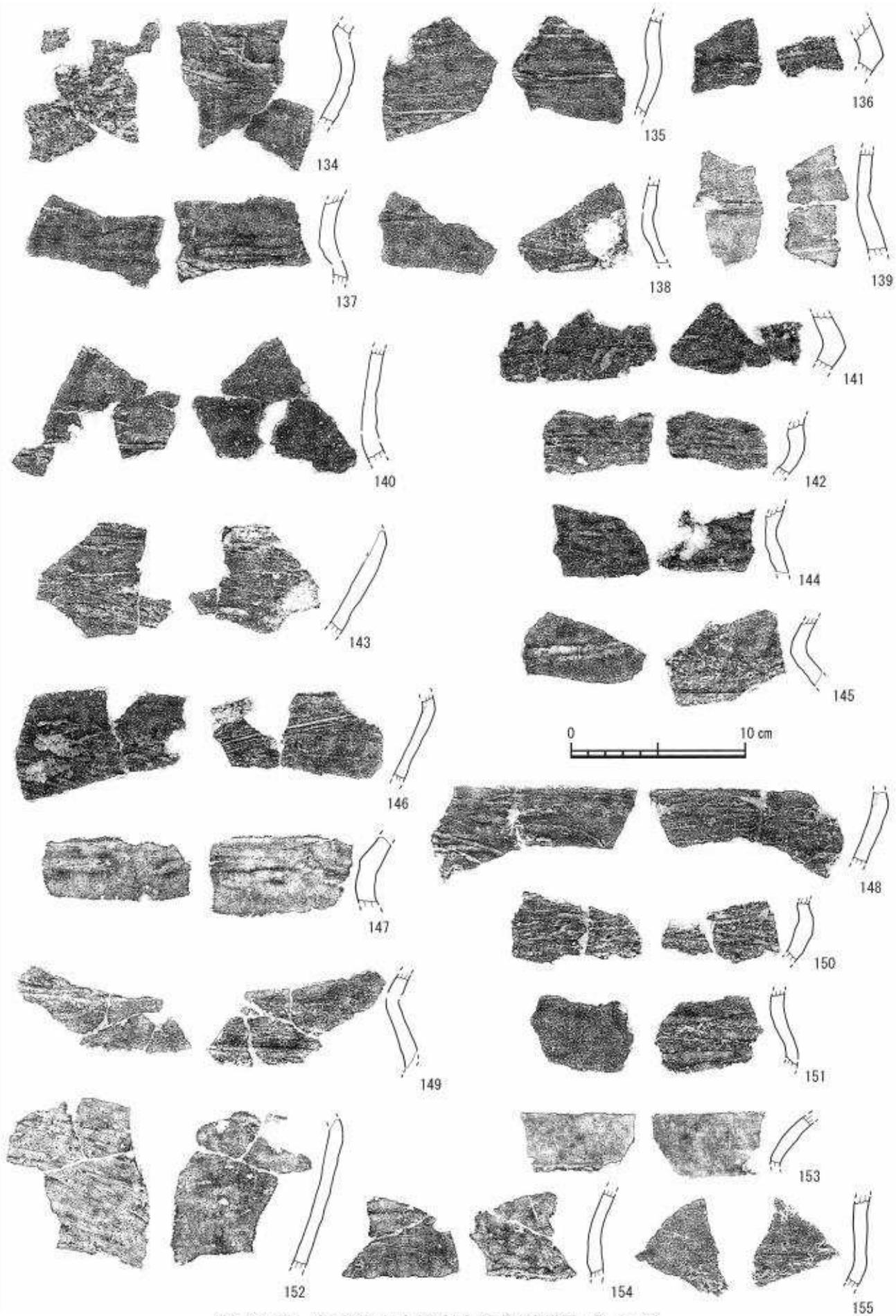


第21図 包含層出土縄文土器実測図③ (S=1/3)

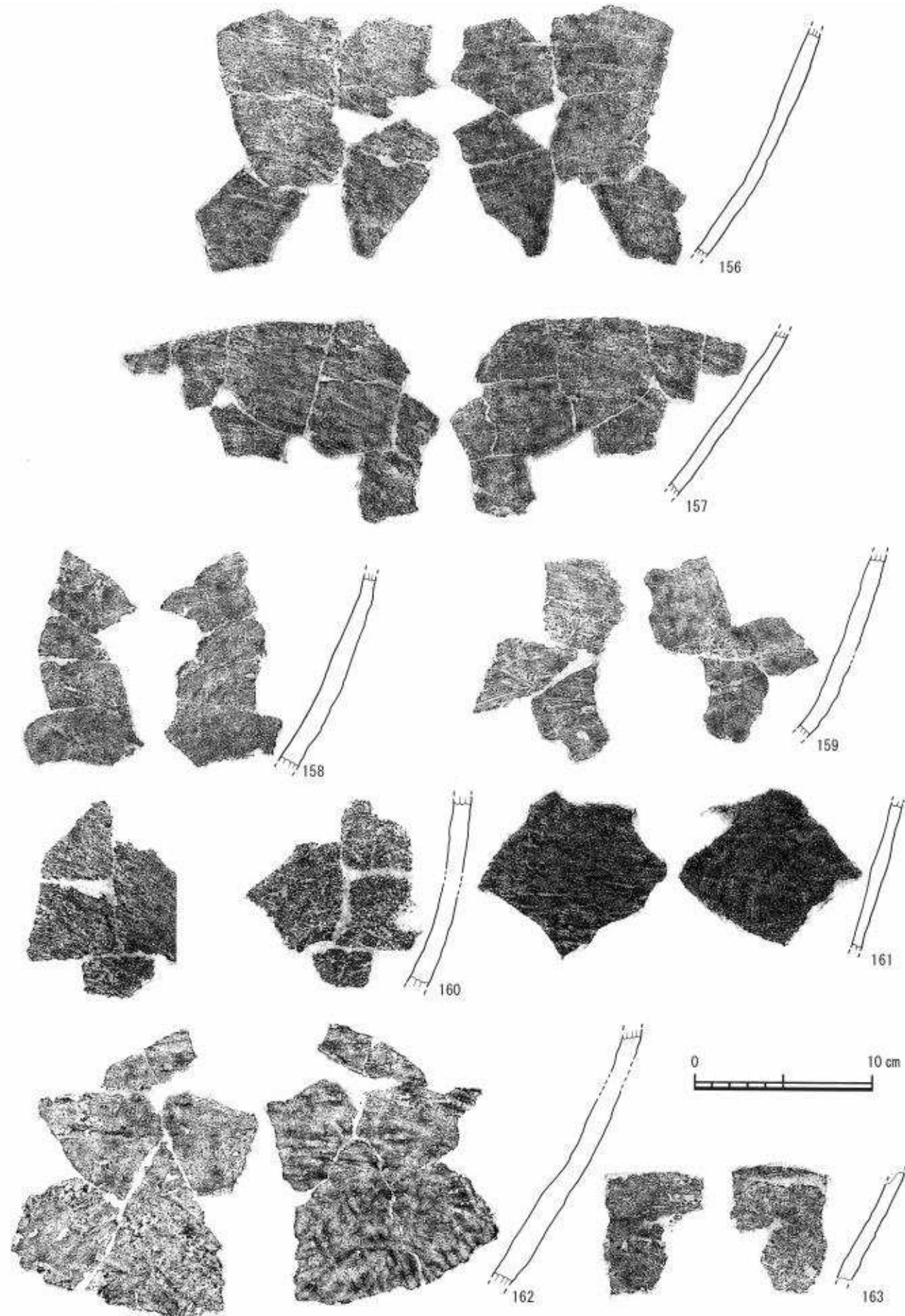
111・125など)などヴァリエーションがある。胎土には3mm程度の砂粒や黄色軽石を含むものが多い。晩期黒川式土器に相当する。

II類胴部(第21～25図131～182・191) 内外面とも

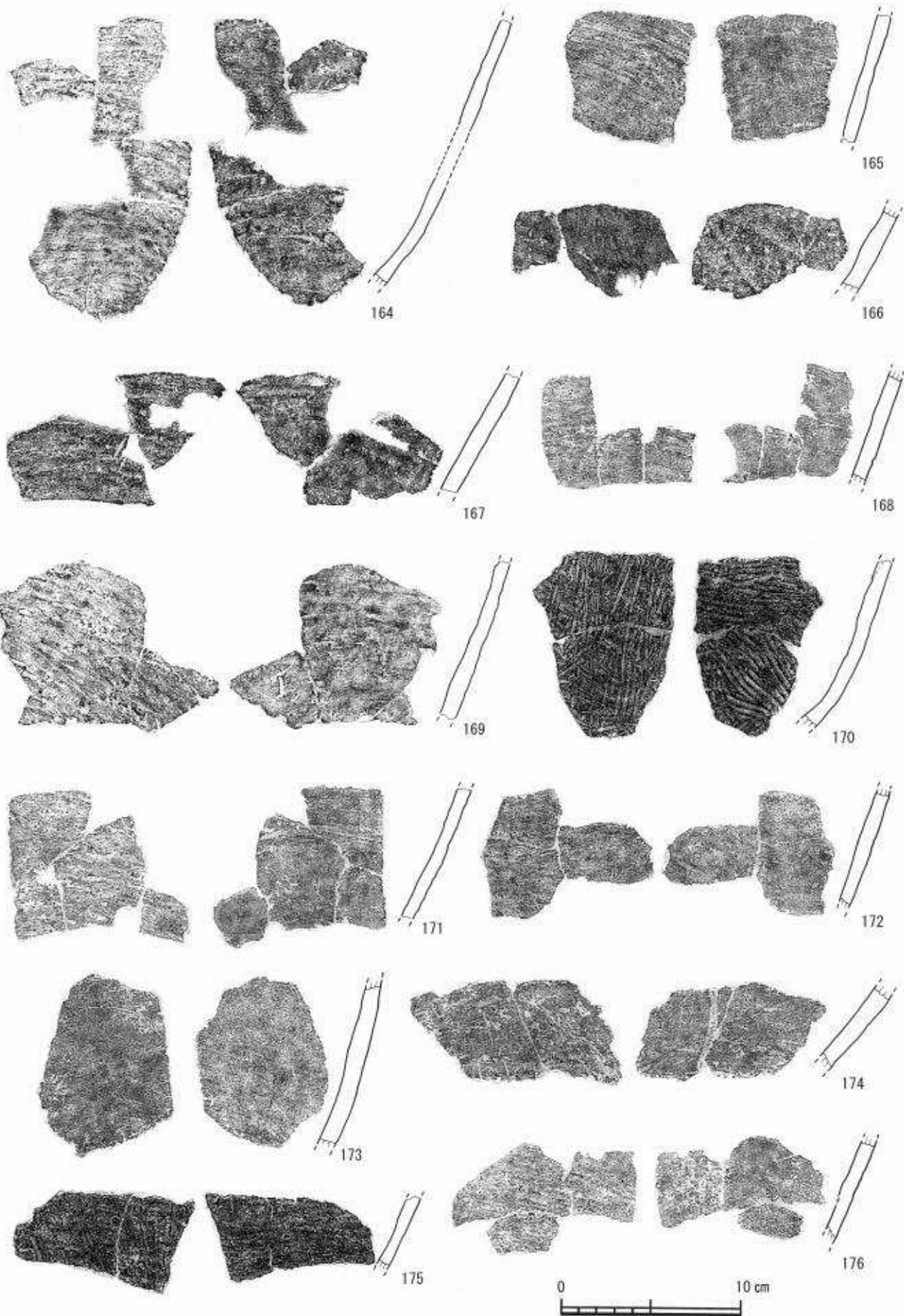
にナデ調整が基本となるが、170や178のように内外面ともに条痕調整が加えられるものもある。頸部の屈曲点外面に沈線あるいはナデ状の段がみられるもの(131・132・138・139・140)が認められる。また、リボン状貼



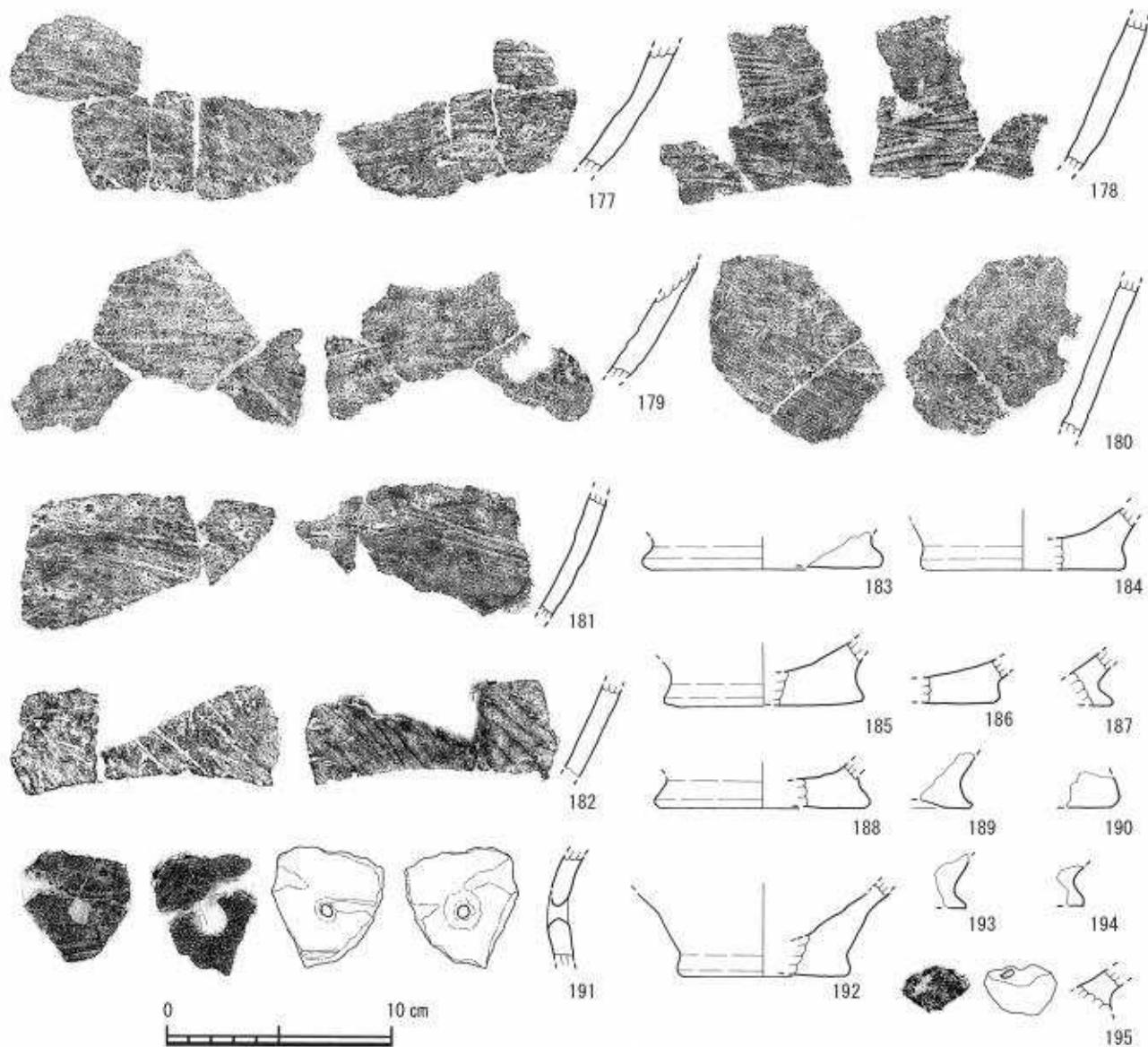
第22図 包含層出土縄文土器実測図④ (S=1/3)



第23図 包含層出土縄文土器実測図⑤ (S=1/3)



第24図 包含層出土縄文土器実測図⑥ (S=1/3)



第25図 包含層出土縄文土器実測図⑦ (S=1/3)

付文がみられるもの（131）もある。191の屈曲部には補修孔がみられる。

II類底部（第25図183～190・192～195）底部はいずれも外に張り出す形態を呈する。188と195には圧痕が認められる（第4章第4節参照）。

以上のように、深鉢については器形全体を窺い知ることのできる資料が皆無であるため、器形による細分は困難である。ただし、口縁端部外面が肥厚するものや無刻目突帯を有す資料がみられないことから、少なくとも黒川式の範疇でも新段階に属する資料は存在しないといえる。黒川式土器の中でも前半段階に属する資料群と認識できよう。

②鉢形土器（第26・27図196～220）

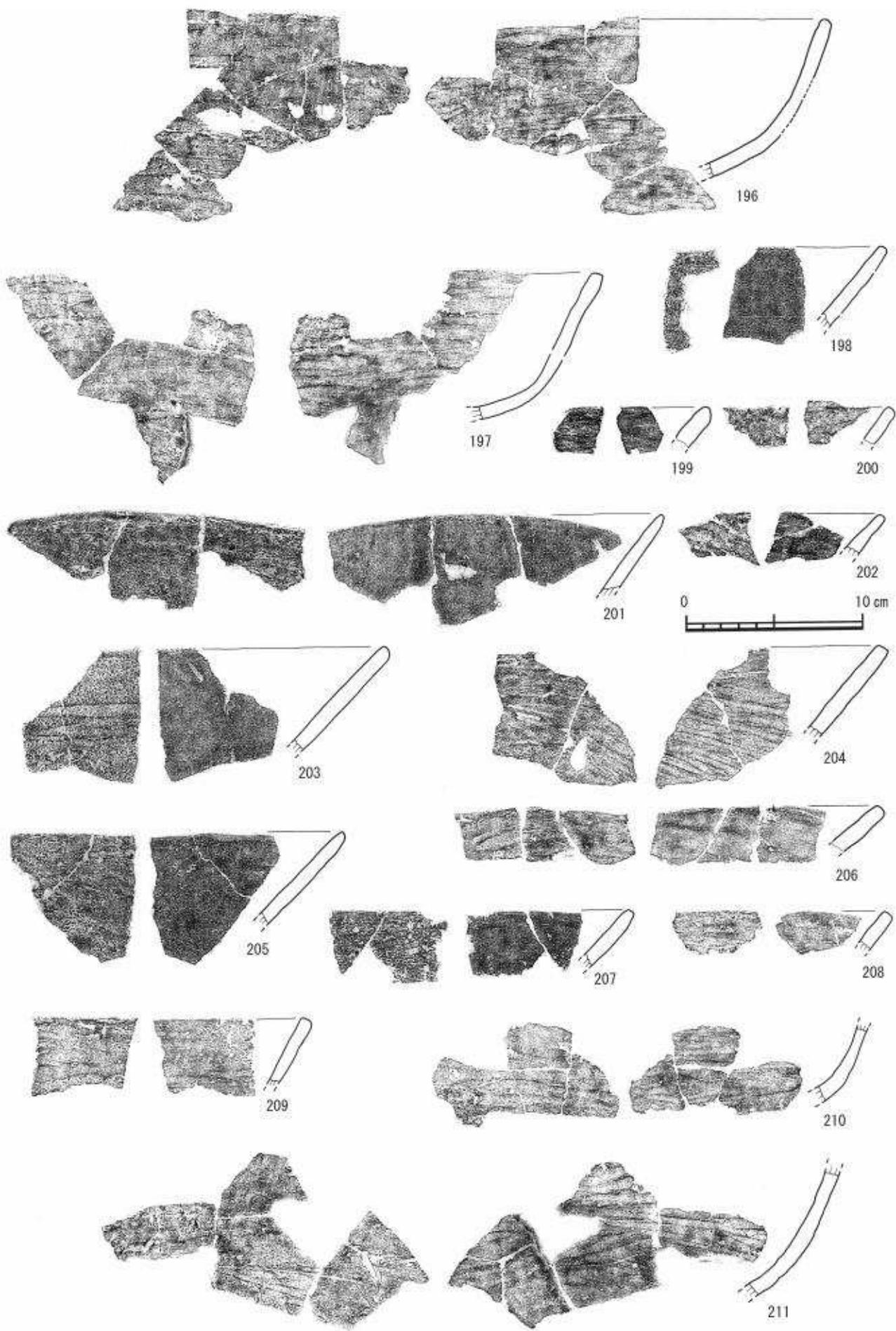
I類（第26・27図196・197・209・210・211・215）外面は粗雑なナデ調整、内面にはミガキ調整が加えられる

半粗半精製土器である。その中でも胴部がやや張り、そこでやや逆「く」の字に屈曲して口縁部に至る資料である。胴部下半・底部付近に組織痕を有す資料はない。全体的な出土量はII類に比べ少ない。

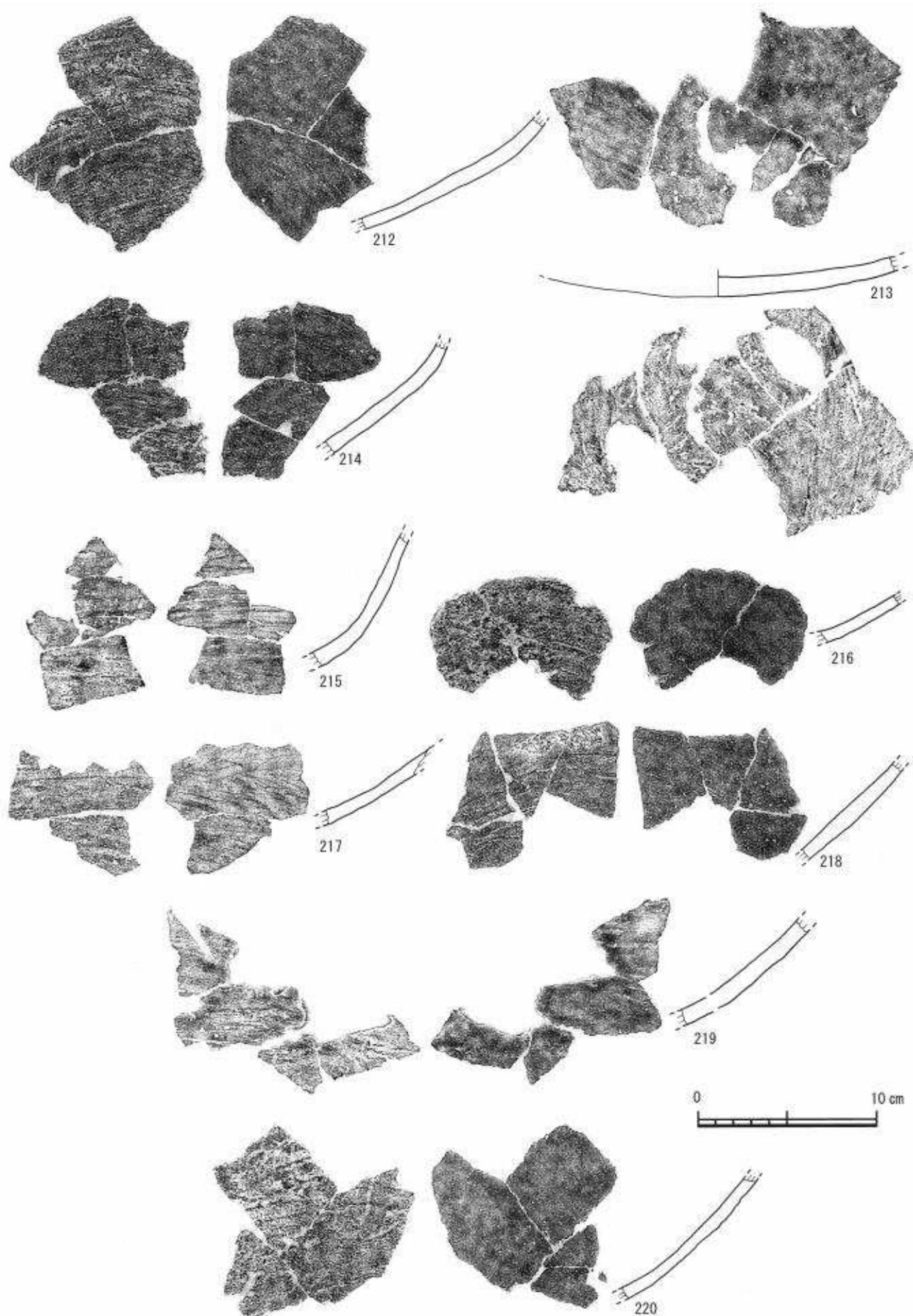
II類（第26・27図198～208・212～214・216～220）

器面の調整はI類と同様だが、胴部の屈曲がなく、ほぼ水平な底部からわずかに丸みをおびながら、口縁部まで一気に立ち上がるボウル状ないしは皿状の器形を呈するものである。底部付近に組織痕をもつ資料は皆無である。

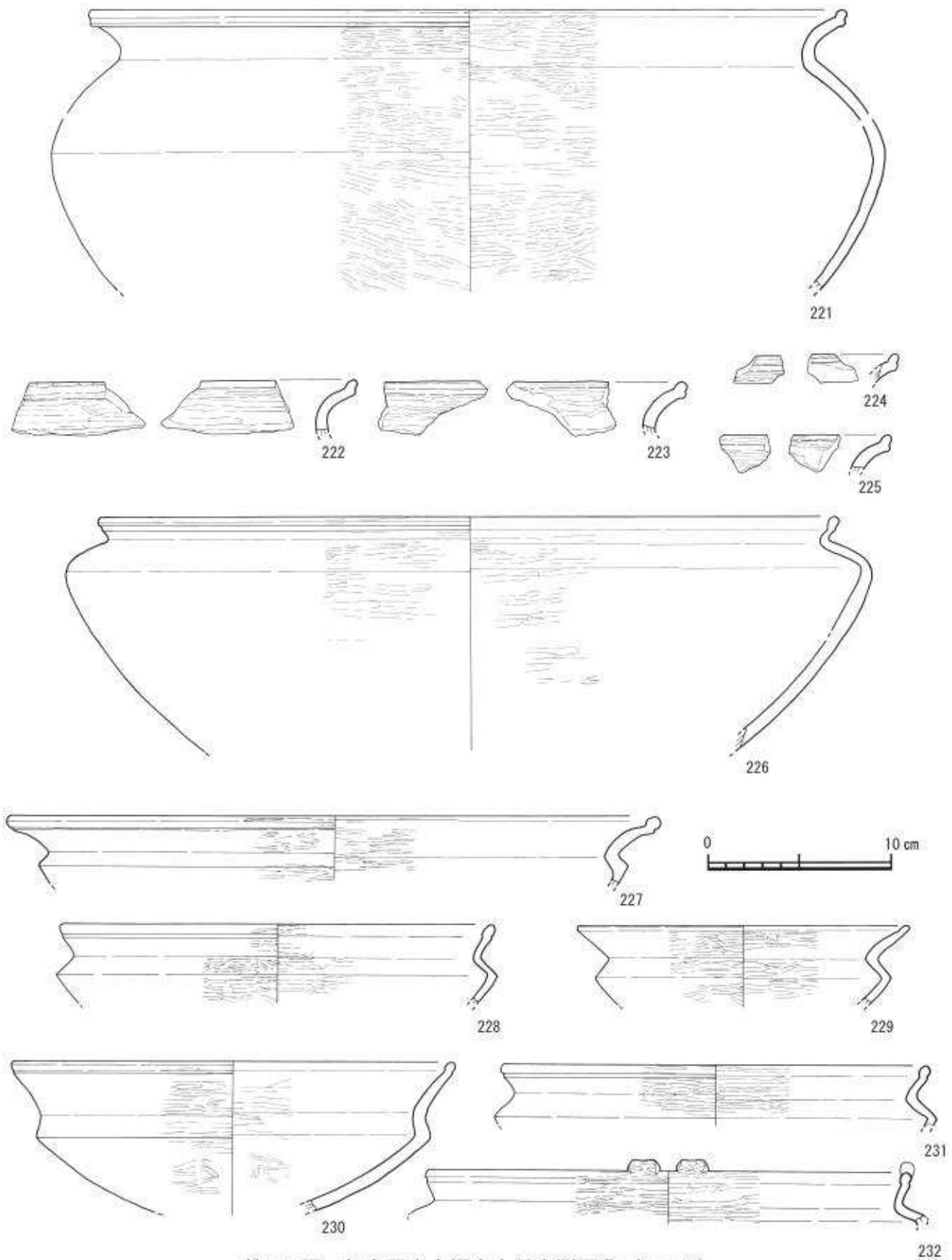
半粗半精製の鉢形土器についても、深鉢と同様に器形全体が分かる資料はない。しかし、少なくとも胴部に屈曲を有すものと有しないものの2種が認められる。上述のように、組織痕を有す資料が確認されていないことから、黒川式土器の中でもやはり前半段階に属する資料群



第26図 包含層出土縄文土器実測図⑧ (S=1/3)



第27図 包含層出土縄文土器実測図⑨ (S=1/3)



第28図 包含層出土縄文土器実測図⑩ (S=1/3)

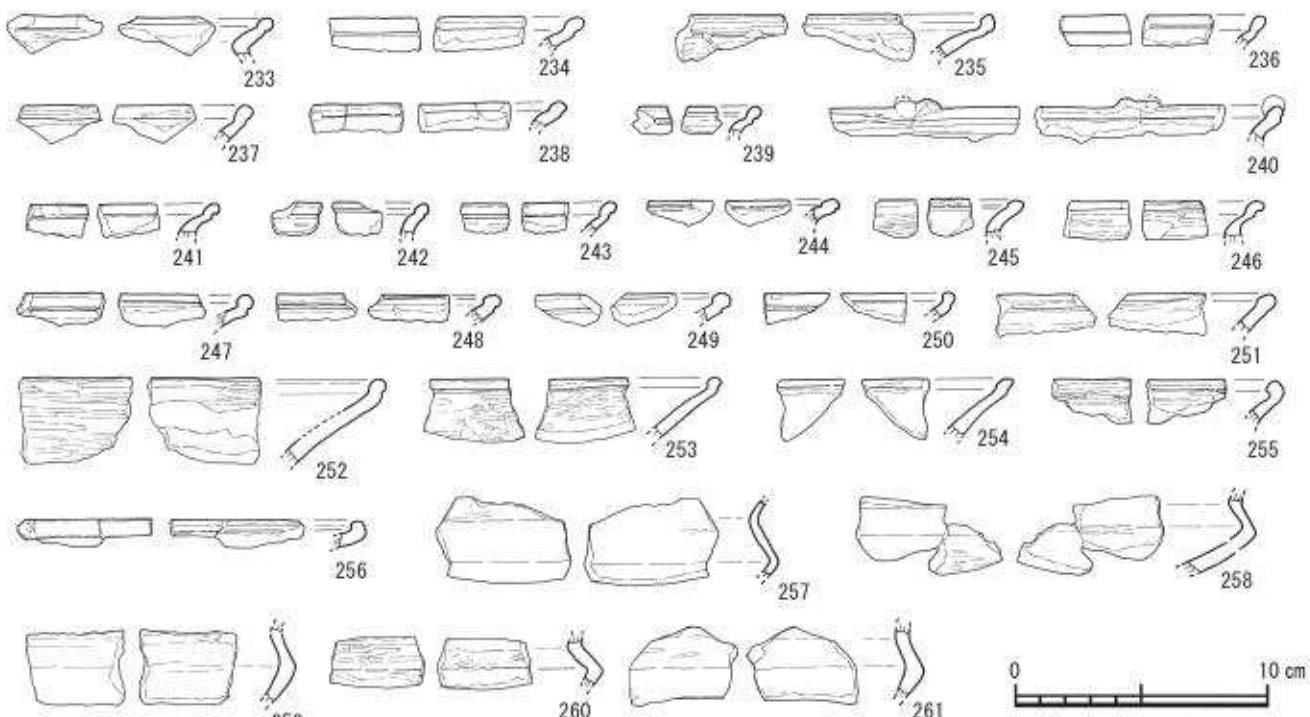
といえる。

③浅鉢形土器（第28・29図 221～261）

I a類（第28図 221～225） 胸部が丸みをおびて張り

出し、頸部から口縁部までやや外湾する。口縁端部は短く立ち上がるるもの。内外面ともにミガキが加えられ、口

縁端部の立ち上がり外面には沈線が一条めぐる。



第29図 包含層出土縄文土器実測図⑪ (S=1/3)

I b類 (第28図 226・232) 脊部がやや丸みおびて外へ張り出し、頸部から口縁部にかけては短く立ち上がる。口縁端部の外面に沈線がめぐるもの。

II a類 (第28図 227) 脊部が「く」の字に屈曲し、頸部から口縁端部にかけて外湾気味に立ち上がるものである。口縁端部が短く立ち上がり、外面には浅い沈線がめぐる。

II b類 (第28図 228～231) 脊部が「く」の字に屈曲し、頸部から口縁部にかけては長くなり、端部の立ち上がりはみられない。口縁端部外面には沈線が一条みられる。

浅鉢口縁部 (第29図 233～255) 252～254はII類の口縁部と考えられるが、大部分はI類の口縁部と推測される。255、256のような口縁端部が内側に向かい立ち上がり、外面に明瞭な沈線のない資料もみられる。

浅鉢脣部 (第29図 257～261) いずれも脣部が「く」の字に屈曲するII類の脣部である。

以上、包含層から出土した縄文土器についてみてきた。僅かに後期後葉の資料も出土しているが、大部分は晩期中葉の黒川式期のものと判断できる。しかも、組織痕を有す鉢や無刻目突帯文の深鉢が出土していない点、浅鉢の形態などから、黒川式を古段階・新段階に分けた際の古段階の資料に限定できるといえる (水ノ江 2009)。

④石器

包含層出土の石器については、出土層位からも厳密にはその帰属時期を特定できないため、次節の弥生時代の項でまとめて報告することとする。

第4節 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査で弥生時代の遺構としては、合計5基の竪穴住居跡を検出している。この内4基は古代・中世の遺構検出面と同じIV層上面で検出している。これは本来の遺構掘り込み面を検出したものではなく、遺構内にある程度土が流入し、播鉢状を呈していたところに基本土層III層(黒色土)が流れ込むように堆積したものを面的に検出したものである。そのため、このIII層が落ち込んだ範囲を手がかりに土層観察トレンチを設定し、断面から本来の掘り込み面を推定した後調査を実施した。残りの1基は縄文時代の遺構検出面と同じVI層上面で検出しているものである。以下、検出遺構と出土遺物について報告する。

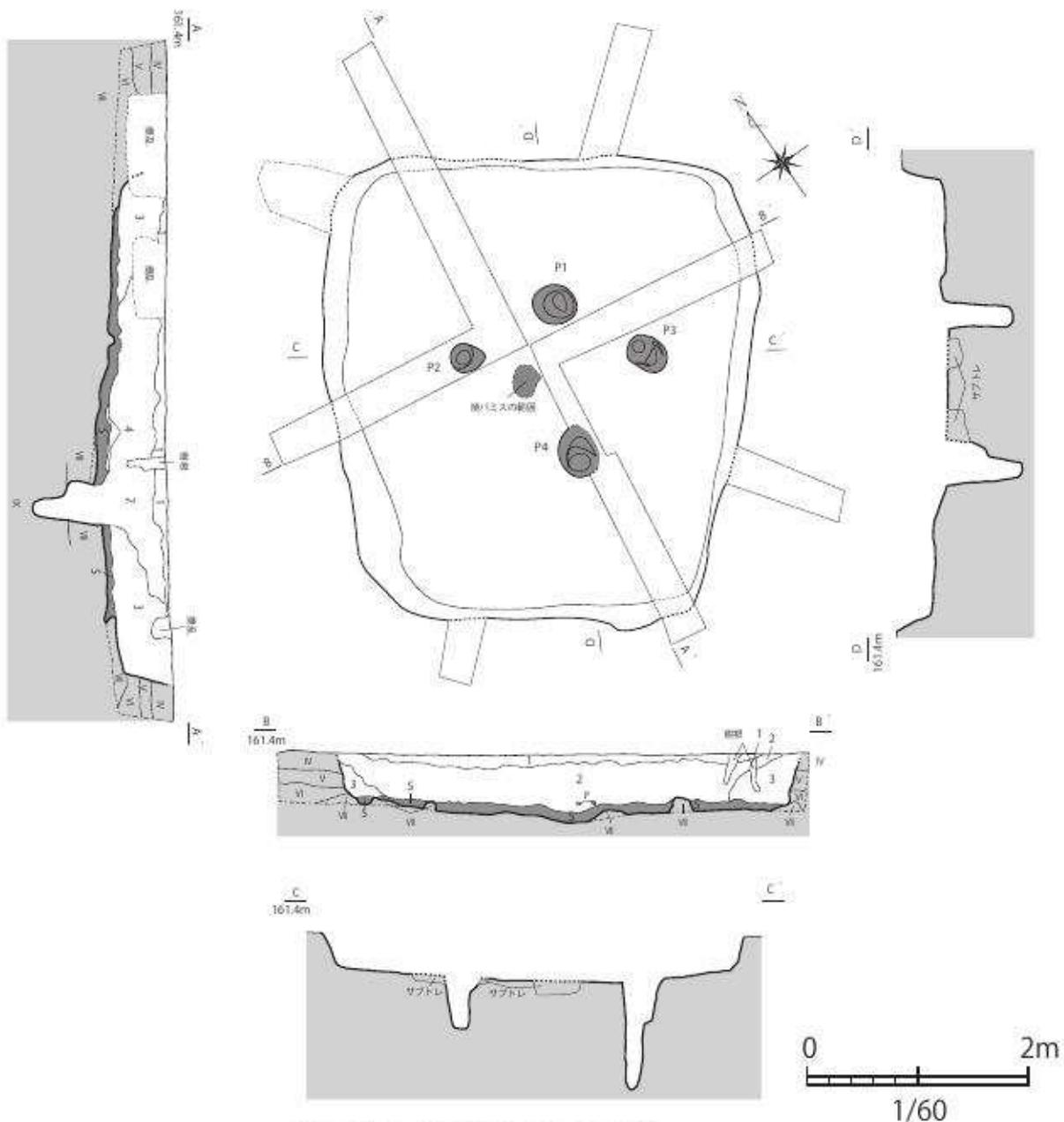
1 竪穴住居跡 (SA)

上述のように竪穴住居跡は合計5基検出している。これ以外の遺構は検出できていない。このことは、竪穴住居跡について古代・中世の遺構検出面と同一面 (IV層上面) でその存在を確認できたため、全体的にそれより下位の層まで掘り下げていないことも一つの要因といえる。しかし、SA5のようにVI層上面で検出された遺構があるため、本来は今回検出された遺構以外のものが存在していた可能性は否定できない。

SA1 (第30～32図)

D2区で検出しており、長軸4.14m、短軸3.85mの長

SA1



- 1: 黒色粘質シルト土 (2m以下の中池軽石をまばらに含む)=II層下部
 - 2: 黒褐色砂質シルト土 (5m以下の中池軽石を多く含む 上部はサラサラで下部は硬くしまる)
 - 3: 黑褐色砂質シルト土 (5m以下の中池軽石を極めて多く含む)
 - 4: 明黄色軽石=被削した軽石のブロック
 - 5: 黑褐色砂質シルト土+5cmの中池軽石の混層 (硬くしまる)=貼床
- ※断面図中のPは土蔵を表す

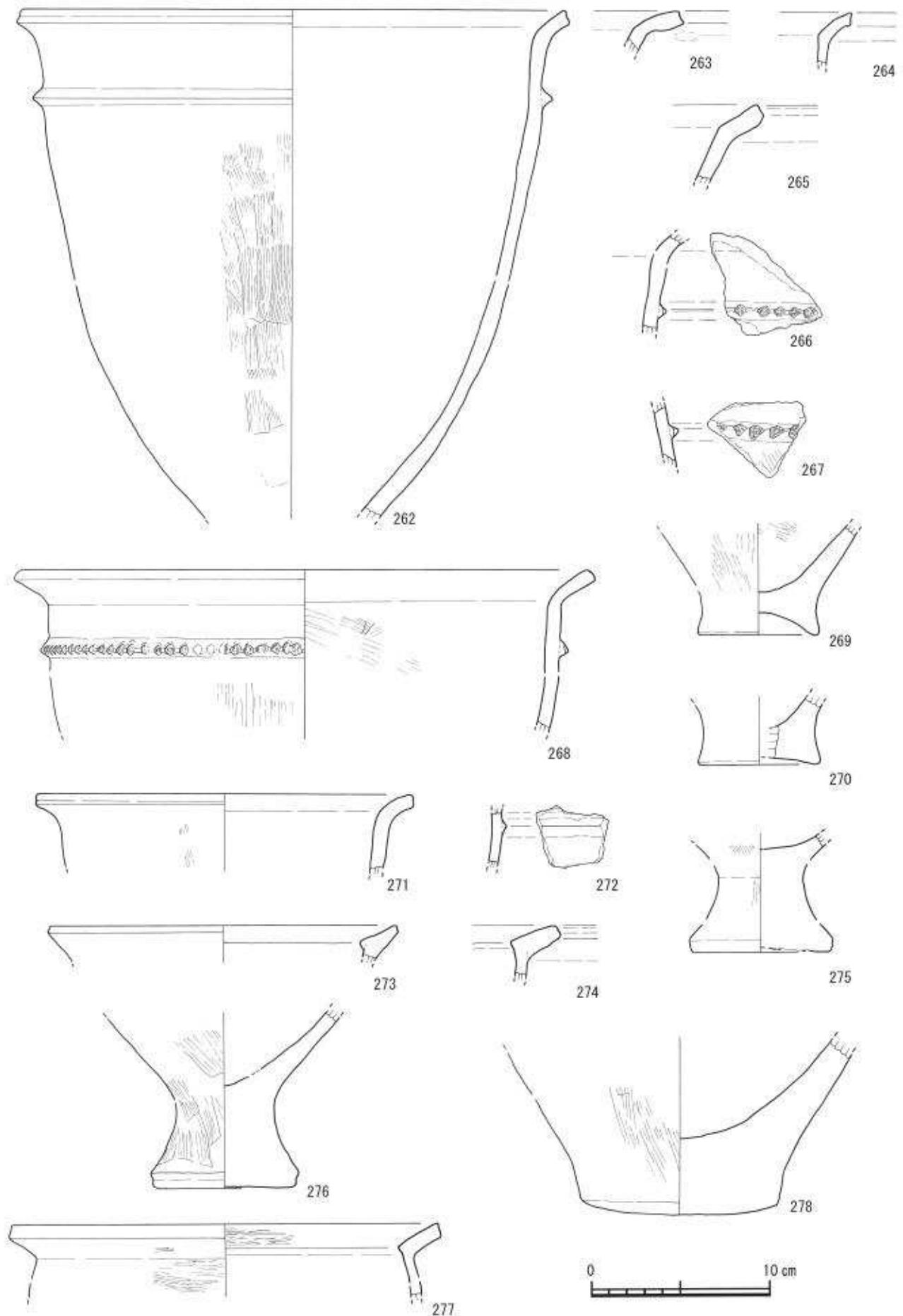
第30図 SA1 実測図 (S=1/60)

方形を呈する。主軸は北東—南西方向にとる。黒色土が落ち込んでいる範囲を検出した面からの深さは最大で63cm程であるが、実際の掘り込み面はそれよりも下位のIV層中に入り、本来の深さは50cm程であったものと考えられる。

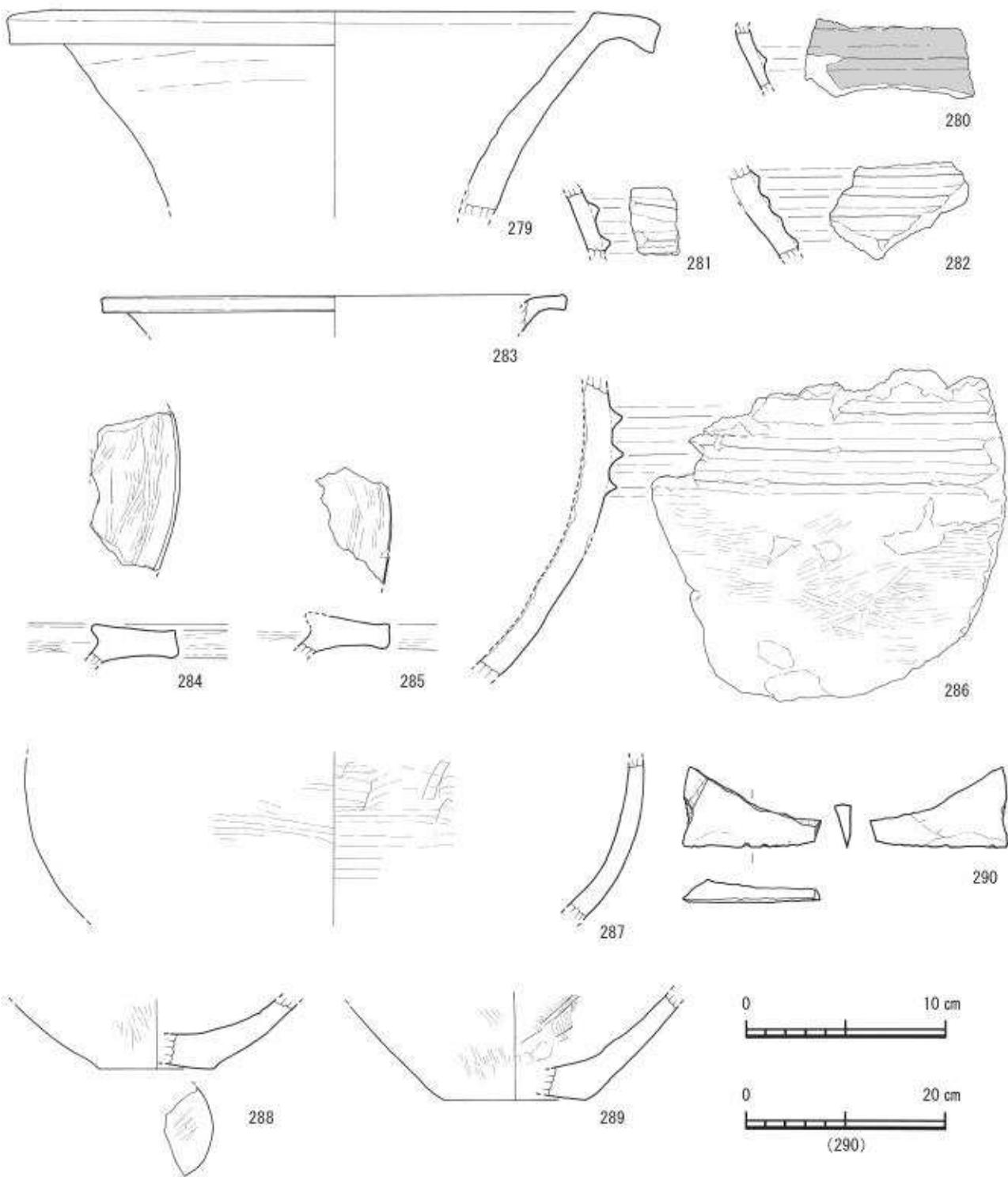
断面で埋土の堆積状況をみてみると、貼床を含め合計五つの層に分層が可能であった。掘り形底面には10cm弱の厚さで貼床がなされ、埋土の最上位にはIII層（下部）

が堆積する。埋土の大部分には御池軽石を多く含む黒褐色土がみられる。これも壁際に堆積するものと造構中央部に堆積するものとに分けているが、非常に似通った土であった。床面直上から検出面まで基本土層のIV層に似た同じ土が堆積することから、周堤の土が壁際に流れ込んだ後、徐々に埋まっていった可能性が高い。

柱穴と考えられるピットは合計4基検出している。長軸と短軸それぞれに2本づつのピットが確認できる。ピッ



第31図 SA1出土遺物実測図① (S=1/3)



第32図 SA1出土遺物実測図② (S=1/3・1/6)

トの深さは床面より 50 cm～1 m を測る。最も深い 1 m の深さをもつピットの底面はアカホヤ火山灰層まで到達する。ピットの埋土には 2 層が堆積しており、柱痕跡は認められなかった。

また、遺構床面の中央付近には被熱してオレンジ色に変色した軽石ブロックが確認できた。遺構の中央にあることから炉跡の可能性が高い。

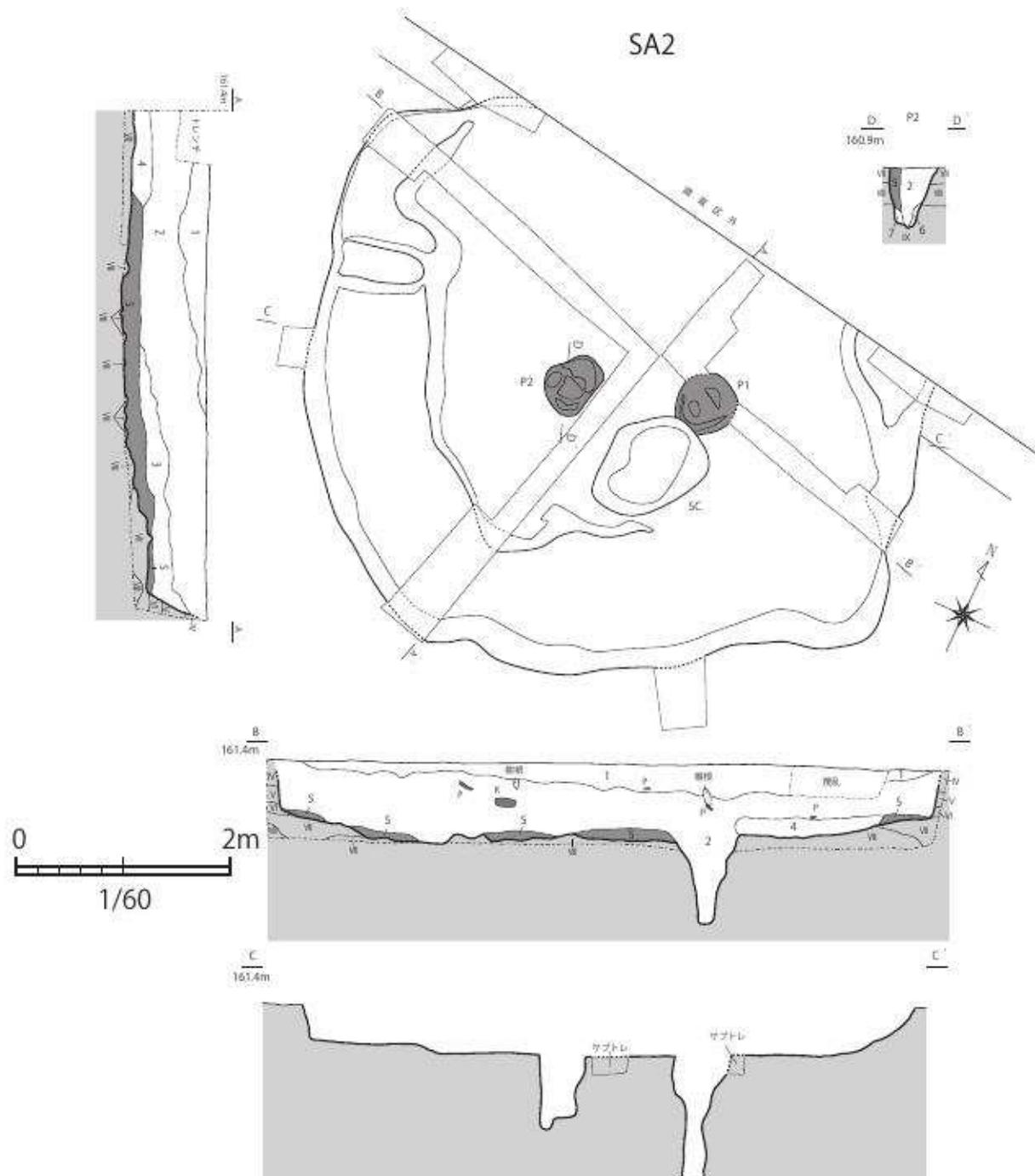
262～290 が SA1 より出土した遺物である。262～

268・271 は口縁部が「く」の字に折れる甕で、262 は刻目のない突帯が、266～268 は刻目突帯が貼付される。272 にも断面三角形の低い突帯が付く。突帯が付く資料は中溝式である。269・270 は底部で、上げ底を呈する。273・274 は山ノ口式の口縁部、275・276 は中実脚台の甕底部である。277 は無頸甕で内外面にミガキが施される。278 は大型甕の底部であろうか。279・283 は壺の口縁部。283 は SA2 出土資料と接合する。280 は須玖式甕で、

突帯が付く。外面は剥落するが一部赤彩の痕跡が残る。281・282は突帯が貼付される壺である。284・285は鋤先口縁の壺。286は壺の胴部で突帯が付き、SA5出土資料と接合する。287も壺胴部で、外面にはミガキ、内面にはハケメが残る。SA2・SA3より出土した破片と接合している。288・289は壺底部である。290は輝石安山岩製

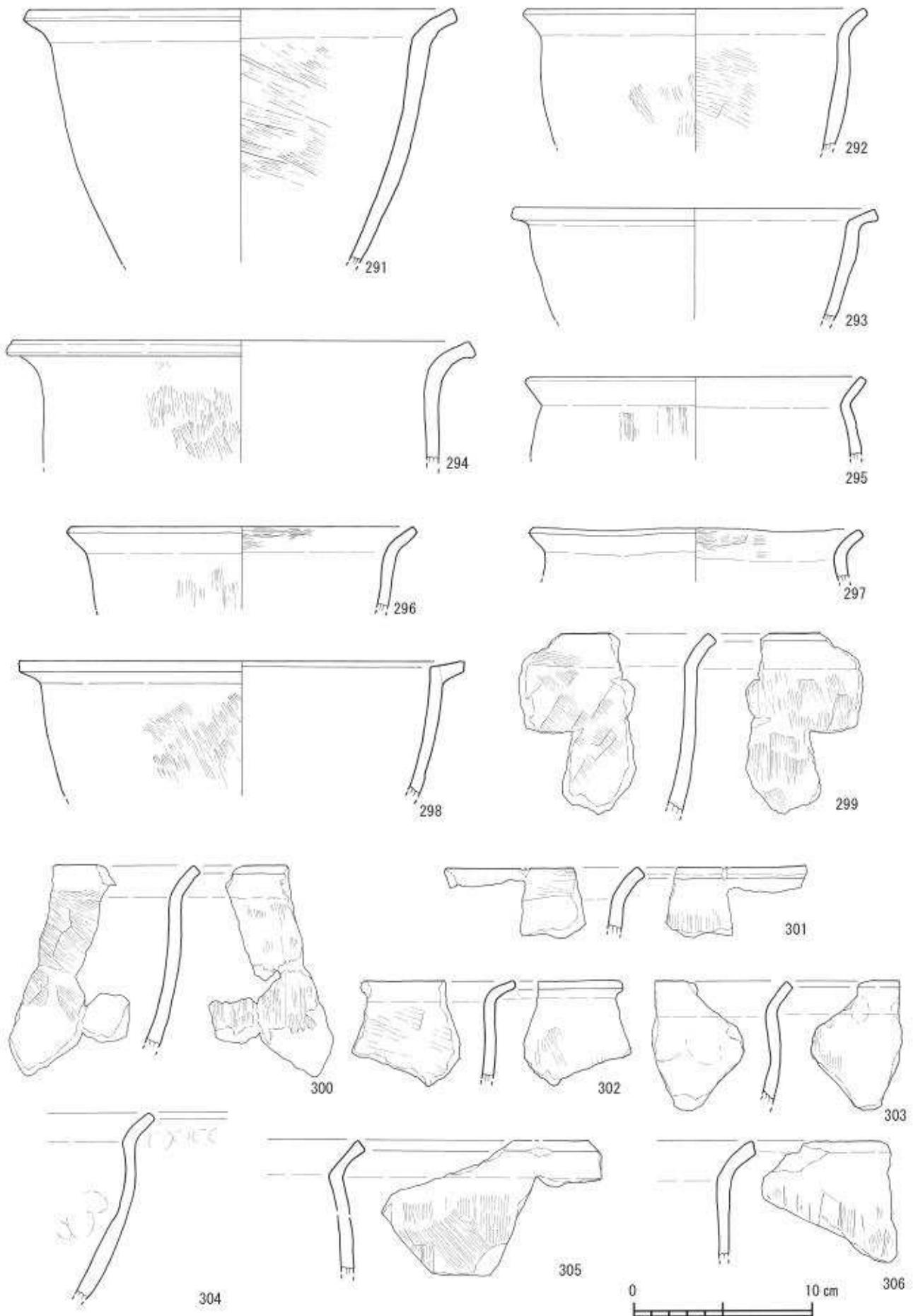
の粗製剥片石器。

これらの遺物の中で、床面より出土した資料は無いが、276・278・279などが床面より若干浮いた状態で出土している。甕は中溝式と山ノ口式に加え、須玖式も出土しており、壺類も無頸壺や鋤先状口縁の壺など多系統なものが出土している。

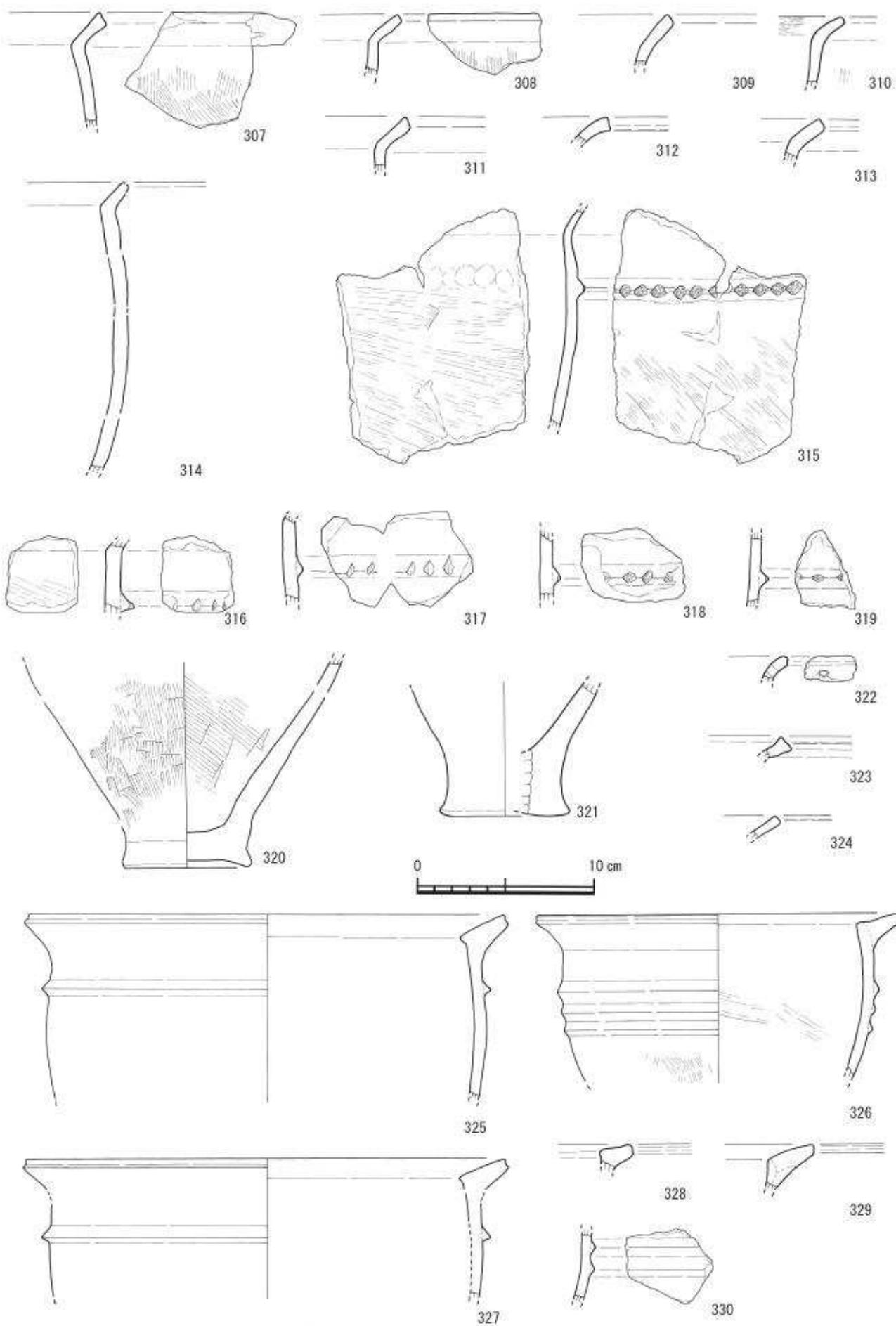


- 1: 黒色粘質シルト土 (2m以下の御池軽石をまばらに含む)=II層下部
 - 2: 黒褐色砂質シルト土 (5m以下の御池軽石を多く含む) 下部は硬くしまる
 - 3: 黒褐色砂質シルト土 (2m以下の御池軽石を多く含む)
 - 4: 黒と色濃・質感が似ており最上部が硬化するもの
 - 5: 黑褐色砂質シルト土 (5m以下の御池軽石・アカホヤ火山灰ブロックを多く含み硬くしまる)=貼床
 - 6: 黑褐色砂質シルト土 (5m以下の御池軽石を含む)
 - 7: 黒色粘質シルト土+アカホヤ火山灰ブロック+御池軽石の混層
- *断面図中のPは土器を、Kは軽石を表す

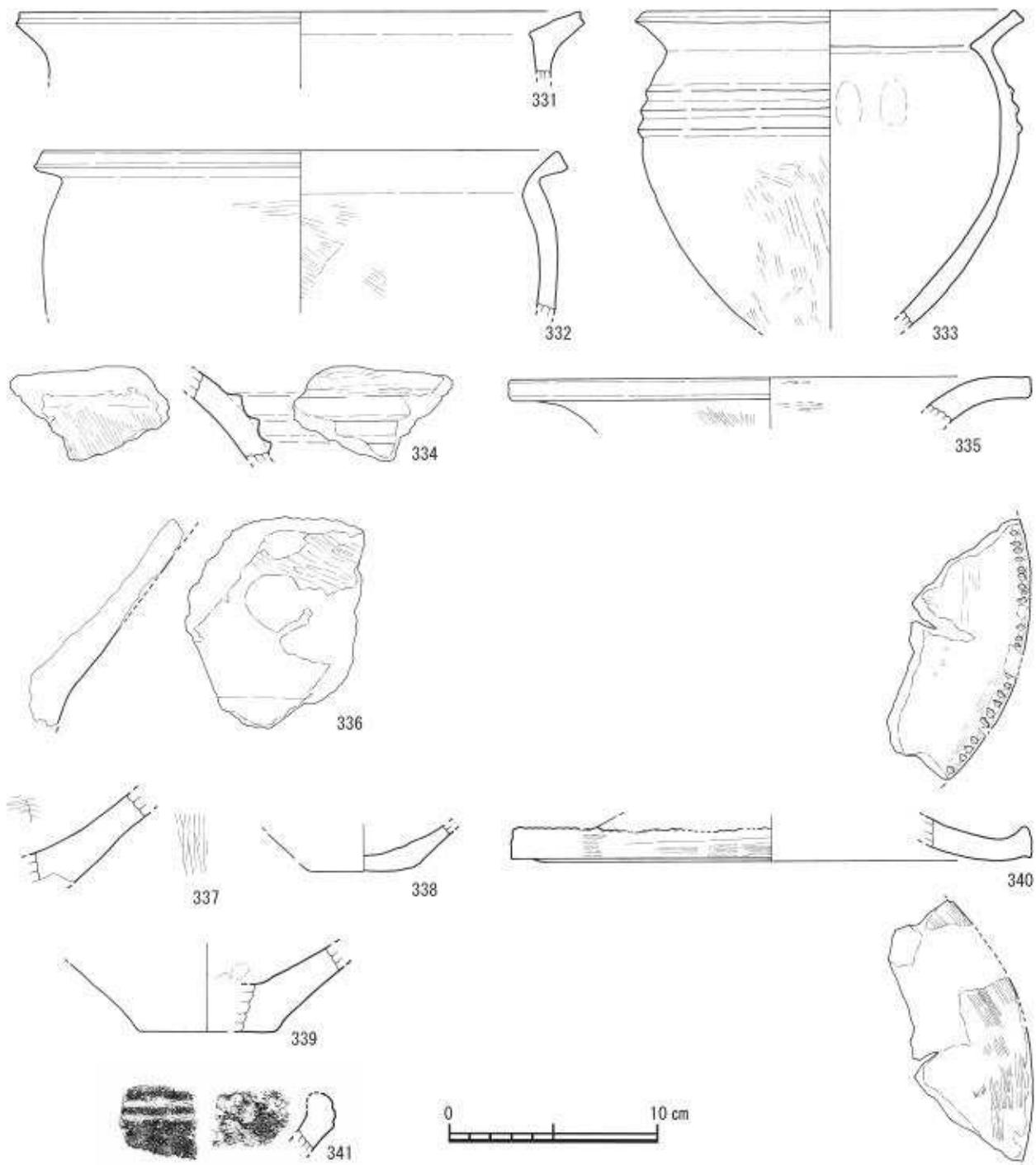
第33図 SA2 実測図 (S=1/60)



第34図 SA2出土遺物実測図① (S=1/3)



第35図 SA2出土遺物実測図② (S=1/3)



第36図 SA2出土遺物実測図③ (S=1/3)

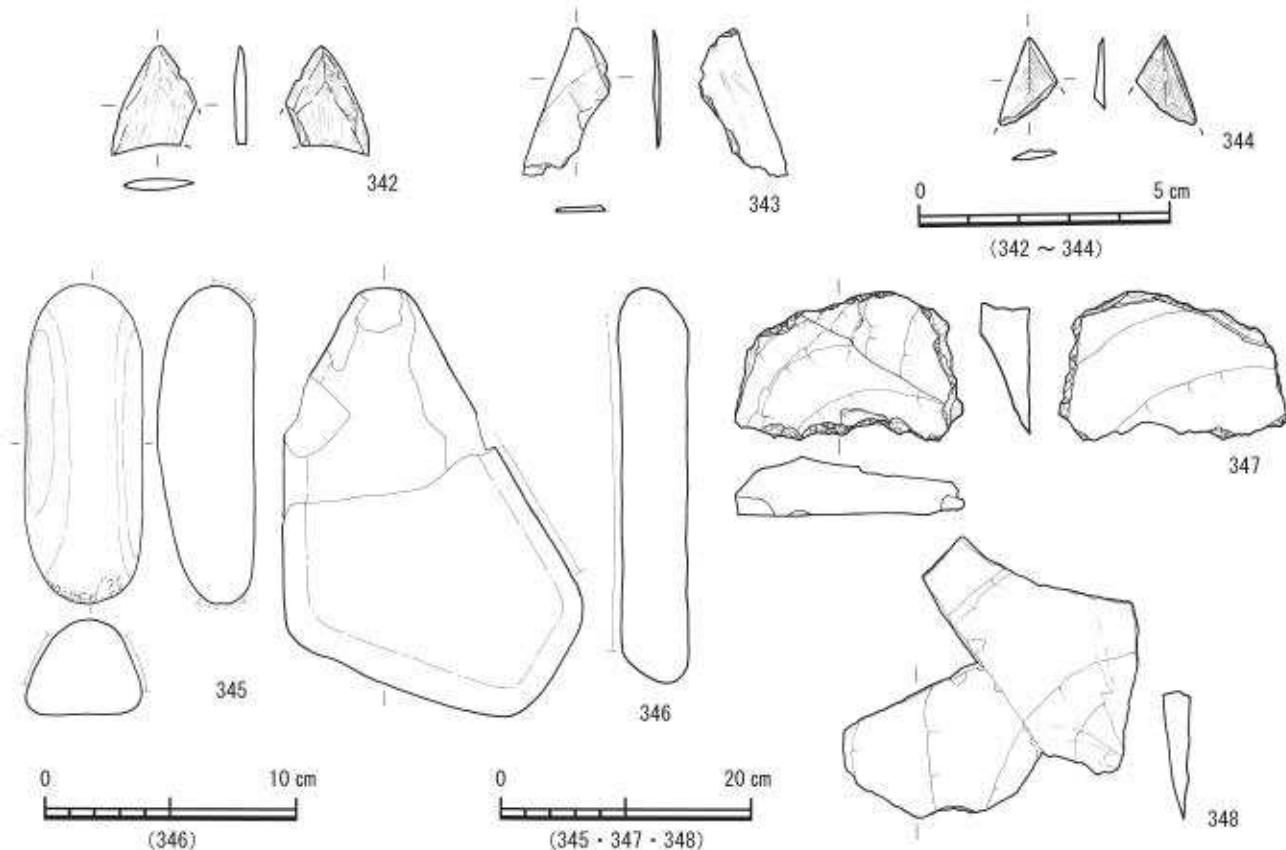
SA2 (第33～37図)

A2・3、B2・3区にまたがって検出されており、全体の1/4程は調査区外に延びる。長軸5.9m、短軸5.4mの長方形を呈するものと思われる。主軸は北東一南西にとる。III層の落ち込みを確認した面からの深さは最大で80cm程であるが、実際の掘り込み面はIV層中で、その面からの深さは55cm前後であったものと考えられる。遺構の西側から南側にかけてベッド状遺構と呼ばれる低いテラス状の段差が認められる。この段差は北東側にも一部確認できる。また、西側にはベッド状遺構に加え、間仕

切り状の突出壁が認められる。

土層の堆積状況を観察してみると、基本的にはSA1と同様の堆積が確認できる。掘り形底面には最大で15cm程の貼床がみられるが、一部では確認できない範囲もある。また、4層の上面は貼床のように硬化する層がみられることから、床を貼り換えた可能性が指摘できる。埋土の大部分は基本土層のIV層に似た土が堆積しており、ブロック状の堆積もみられないことから、徐々に時間をかけて埋まっていったものと考えられる。

ピットは遺構の中央付近に2本穿たれる。床面からの



第37図 SA2出土遺物実測図④ (S=1/3・2/3・1/6)

深さはP1が1.15m程、P2が70cm程である。これらのピットの断面を観察すると、壁際に貼床と同様の硬化する土が存在することが分かる。おそらく、柱穴を掘削した後、柱を据えつける作業と床を貼る作業が同時に行われたものと考えられる。そのため床を貼った後に掘削された土坑(SC)はP1の掘り形を切っているものと推測される。土坑中には炭化物や焼土は認められなかった。

291～348がSA2より出土した遺物である。屈折口縁を有す無文甕(291～314)が多く、刻目突帯をもつ中溝式の甕(315～319)は少ない。無文甕のうち298は口縁部が貼付けによるもので、山ノ口式の口縁部形態に似る。これらの無文甕はハケメ調整を基調とするが、304のようにナデやオサエにより調整されるものもある。320・321は甕の底部。322は壺の口縁部であろうか。口縁部付近に穿孔が認められる。323は回線文系と考えられる壺で、口縁部外面に2条の浅い回線が認められる。324は小型鉢の口縁部であろうか。325～331は山ノ口式と考えられる資料で、胎土には金雲母を含むものが多い。332・333は無頸甕で333には胴部上半に3条の突帯が付く。334～339も甕で、337には圧痕が認められる(第4章第4節参照)。340は器台の脚裙と考えられ、内外面ともにハケメにより調整される。裾端部外面には刻目が

めぐる。341は縄文時代後期の中岳II式の口縁部。流れ込みであろう。

342～344は頁岩製の磨製石鎌。345は砂岩製の磨敲石、346は石皿である。347・348は大型の粗製剥片石器で、348は包含層出土資料と接合する。

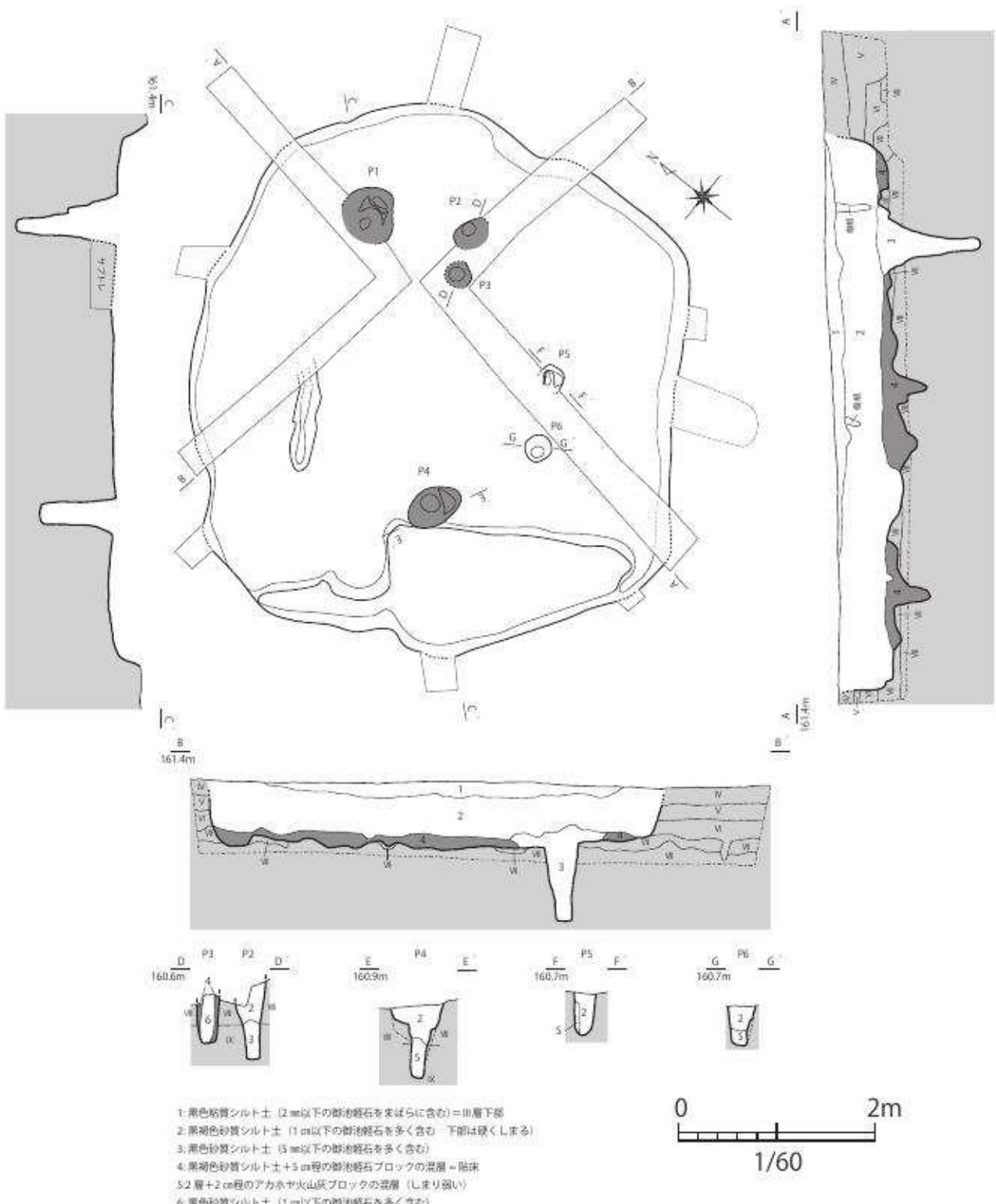
SA2出土遺物をみてみると、土器は屈折口縁の無文甕の出土が目立つ。また回線文系の壺や器台など特殊な遺物も出土している。325や327が床面で出土しているが、いずれも上層や包含層出土資料と接合している。また、317がSA5出土破片と、337がSA4出土破片とそれぞれ接合関係にある。

SA3(第38・39図)

B・C3区で検出しており、長軸5.6m、短軸4.95mのいびつな長方形を呈する。III層が落ち込んだ範囲を検出した面からの深さは、70cm程を測る。本来の掘り込み面はIV層中にあり、そこからの深さは最大で50cm程と思われる。遺構の南西側には10cm程のベッド状遺構が認められる。また、北西側には浅い溝状の窪みがみられる。

土層の堆積状況をみると、掘り形底面には15cm程の厚さの貼床がみられるが、一部ピット状に掘り窪めた部分にも貼床が認められる。埋土のほとんどは同一といえる似通った土が堆積することから、やはり時間をかけて

SA3



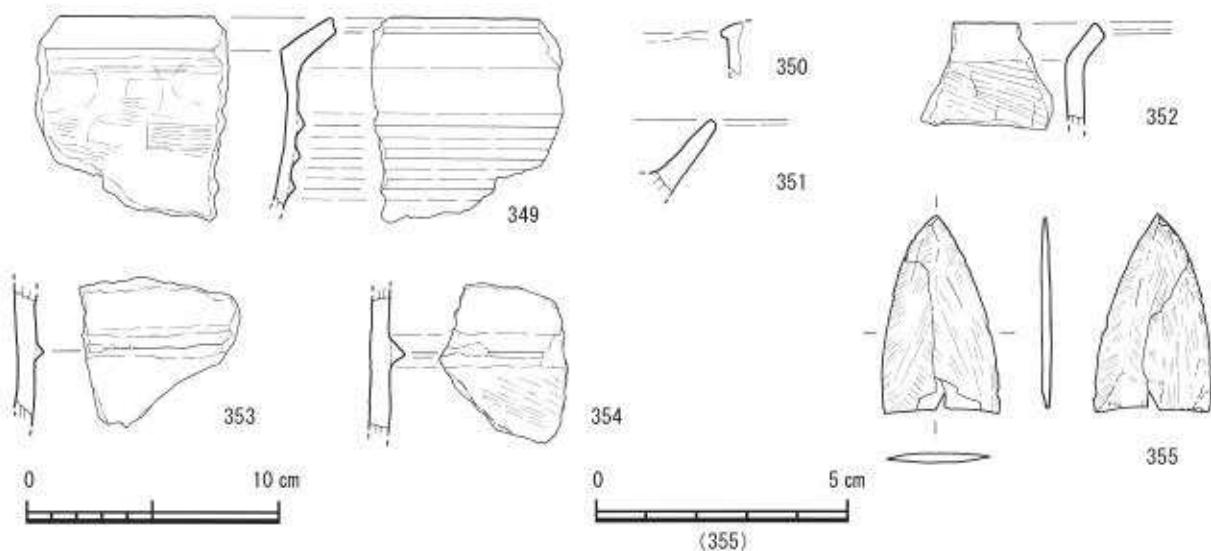
第38図 SA3 実測図 (S=1/60)

徐々に埋没していくものと推測される。

ピットは合計6基検出された。配置からは規則性が読み取れないが、床面からの深さを基準にすればP1～4が主柱穴であろうか。P3については、柱痕跡と考えられる土層が確認でき、それを取り巻くように貼床と同じ

硬化する土が堆積している。おそらくSA2と同様に、柱の設置と貼床作業が同時に行われたものと考えられる。

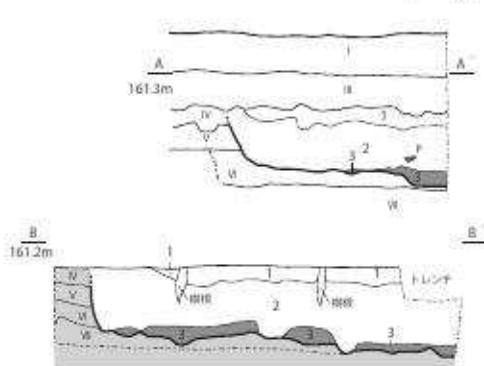
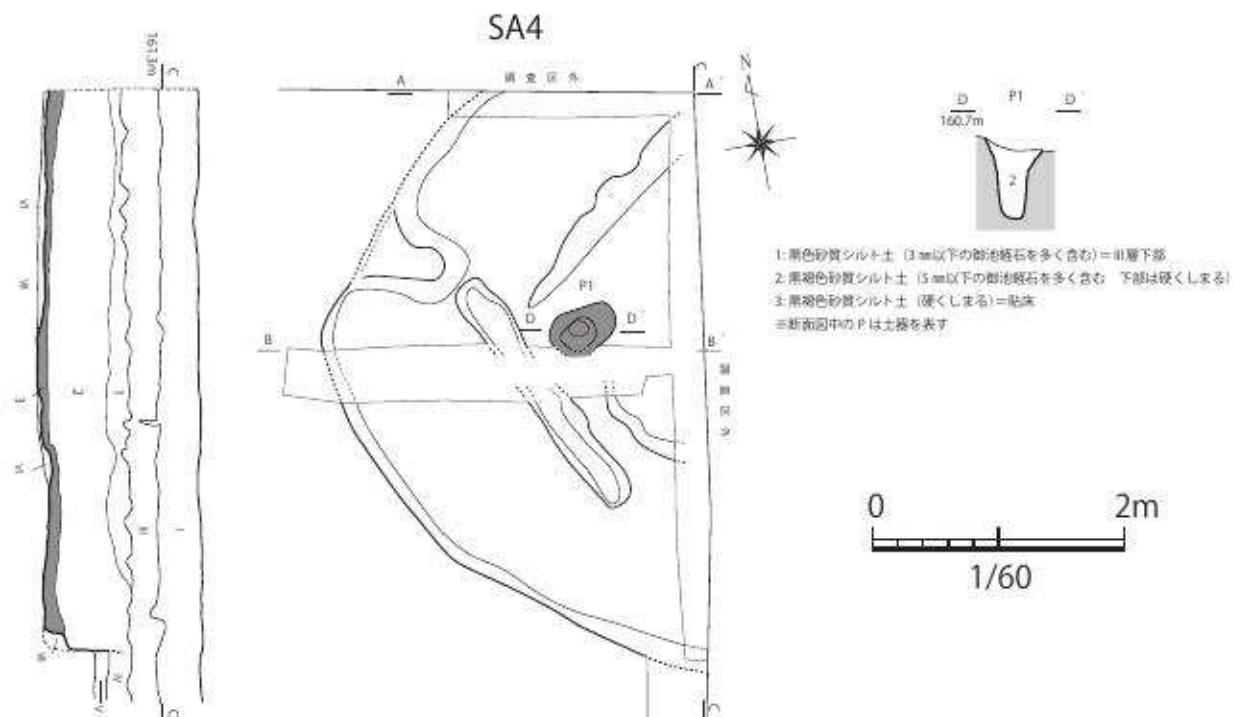
ピットは浅いもので40cm程度で、深いものは1mを測る。349～355がSA3から出土した遺物である。遺構の残存状況は良好であったにもかかわらず、出土遺物は極め



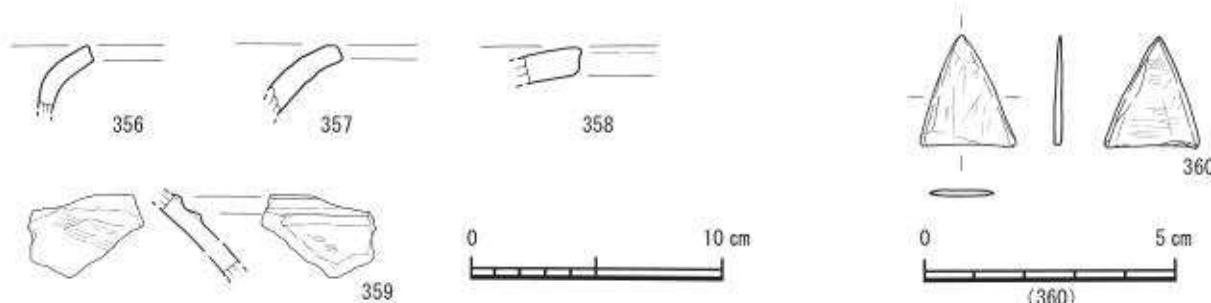
第39図 SA3出土遺物実測図 (S=1/3・2/3)

て少ない。349および350は山ノ口式の甕である。351はミニチュア土器、352は無文甕であろうか。353・354は胸部に貼付突帯を有す甕である。355はほぼ完形の磨

製石鏸である。いずれの資料も埋土内からの出土であり、床面出土の資料は皆無である。



第40図 SA4実測図 (S=1/60)



第41図 SA4出土遺物実測図 (S=1/3・2/3)

SA4 (第40・41図)

調査区の東端、B5区で検出しており、遺構の大部分は調査区外に延びる。そのため全体的な規模・平面形態は不明であるが、検出した範囲から推測するとSA2やSA3と同規模・形態を呈するものと考えられる。III層落ち込み面からの深さは70cm程を測る。本来の掘り込み面は明確ではないが、IV層中にあるものと考えられる。その面からの深さは50cm程であると思われる。遺構の西側には間仕切り状の突出壁がみられるが、この範囲は若干掘り過ぎてしまっているため、花弁状住居のように掘り形事態が突出するのか、SA2のように壁の一部が突出するのかは断定できない。しかし、検出時には直線的なプランを呈していたため、後者である可能性が高い。さらに、壁に沿って10cm弱の高さのベッド状遺構がみられ、中央に向かい一段低くなる。

土層の堆積状況は、これまで報告した他の竪穴住居跡と軌を一にする。掘り形底面には10cm弱の厚さで貼床がなされる。やはり埋土の大部分にはIV層によく似た土が堆積することから、遺構は時間をかけて埋まっていったものと推測される。

柱穴と考えられるピットは1基しか検出できていない。床面からの深さは65cm程を測る。遺構の南西側には浅い溝状の窪みが認められる。炉跡と考えられる痕跡は検出されていない。

SA4もSA3同様に出土遺物は極めて少ない。356～360が出土遺物である。356・357は甕、358は壺の口縁部であろう。359は壺で、胎土には金雲母が含まれる。360は床面より出土した磨製石鏃である。

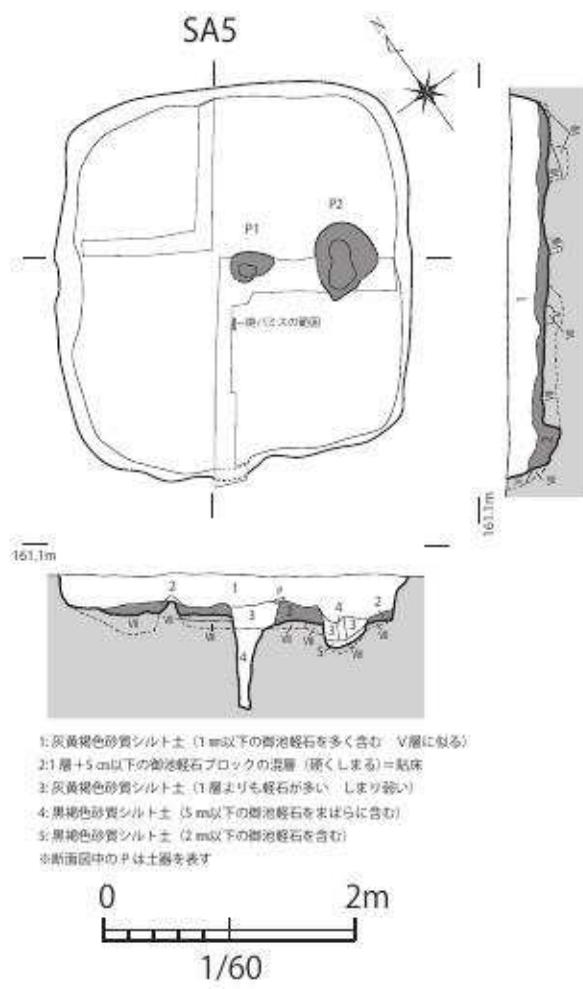
SA5 (第42・43図)

C2区で検出しており、長軸3.1m、短軸2.85mの長方形を呈する。主軸は北東-南西にとる。今回検出した弥生時代の住居跡の中で、唯一VI層上面で検出している。検出面からの深さは最大で40cm程を測る。

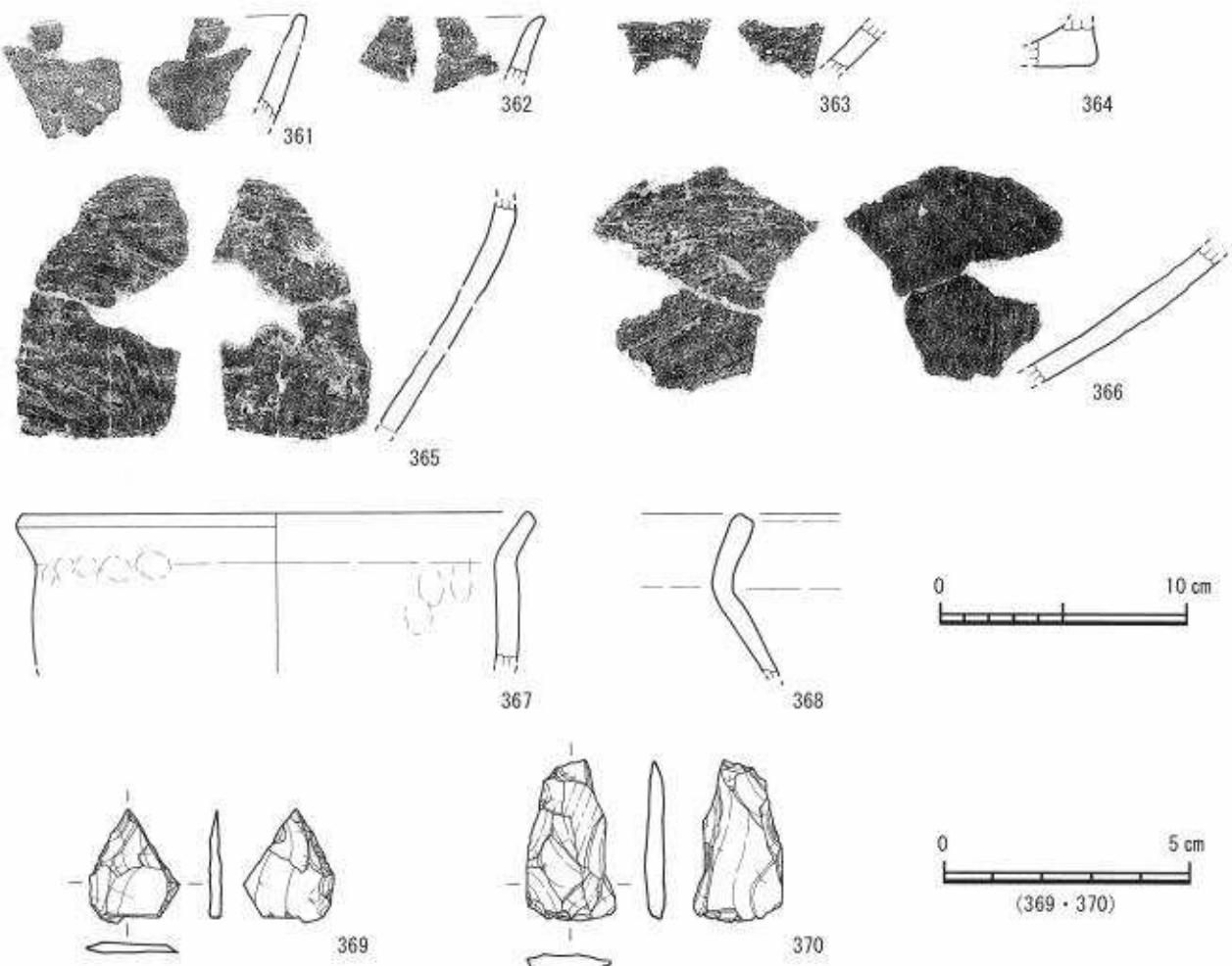
土層の堆積状況を確認してみると、掘り形底面には厚さ10～20cm程の貼床がみられる。それ以外の埋土は一層のみで、基本土層のV層によく似た土が堆積する。

ピットは2基検出している。遺構の中央付近で検出したP1は床面からの深さが80cm程あり、主柱穴であるものと考えられる。P2は土坑状を呈し、深さも25cm程度浅い。しかし、断面を観察すると柱痕状の垂直方向の立ち上がりが確認できることから、これも主柱穴であった可能性が高い。遺構の中央付近ではわずかではあるが被熱してオレンジ色に変色した軽石ブロックがみられる。炉跡であったものと考えられる。

361～370がSA5出土遺物である。361～366は縄文時代晚期の土器である。361や363のように床面直上で出土している資料もあるが、弥生土器(367・368)も出



第42図 SA5実測図 (S=1/60)



第43図 SA5出土遺物実測図 (S=1/3 · 2/3)

土しており、中にはSA1やSA2出土資料と接合関係にある遺物も出土していることなどから、やはり弥生時代中期の所産である可能性が高いものと判断した。369・370はいずれも磨製石鑿の未製品と考えられる。

上述のように弥生時代中期の所産と考えられるものの、他の4基の住居跡とは検出面が異なることや、遺構内に堆積する埋土の差異、さらに規模の差から5基の竪穴住居跡の中ではSA5が最も古い時期の住居跡である可能性が指摘できる。

2 包含層出土遺物

包含層より出土している弥生時代の遺物としては、土器および石器がある。この時代の遺物は主にIV層より出土する傾向にあるが、一部上位のIII層からの出土も確認できる。出土量的には土器が大部分を占める。以下、種別ごとに報告する。

土器 (第44・45)

①壺形土器 (第44図371~405・412)

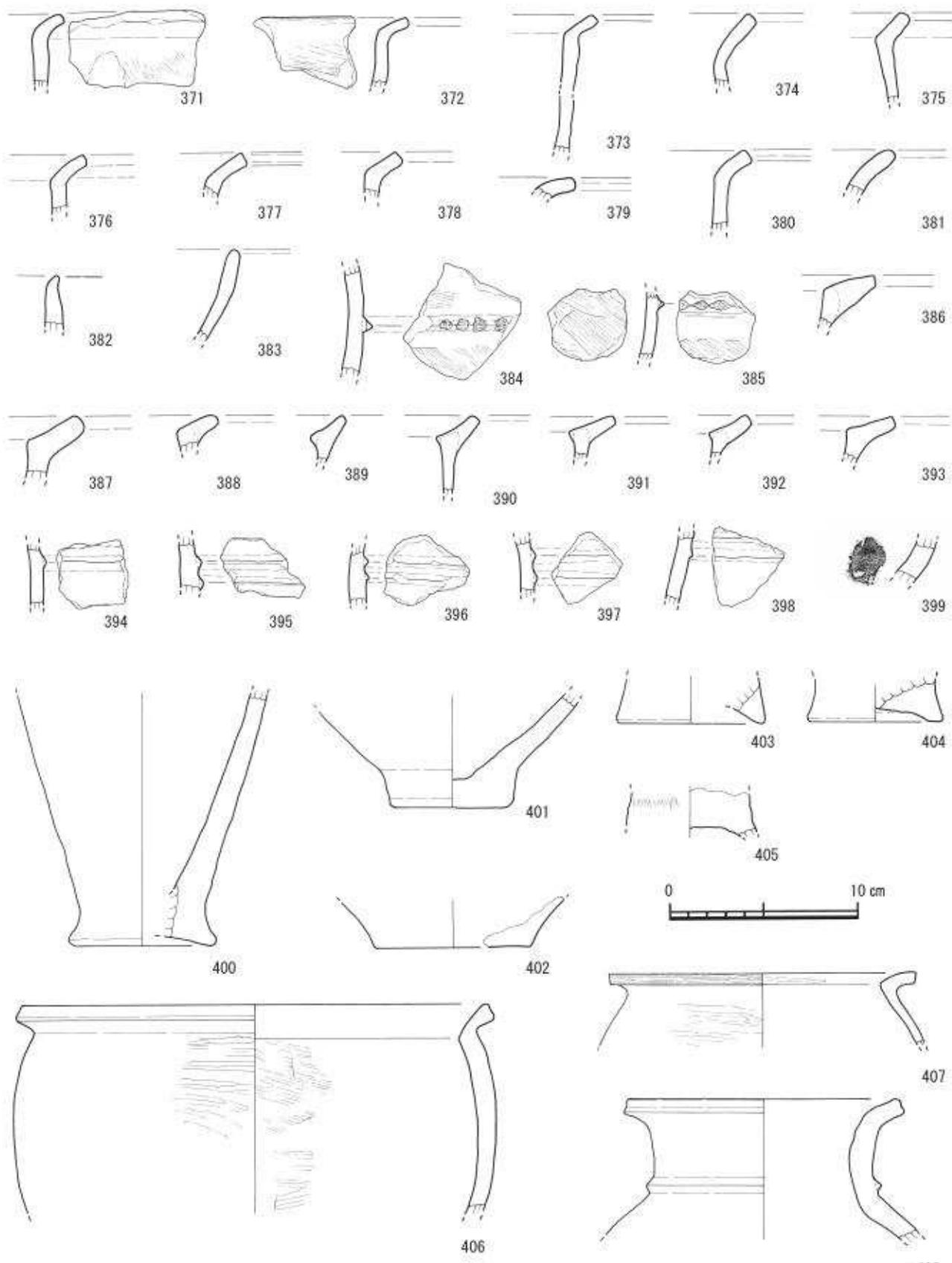
371~381は中溝式ないしは屈折口縁の無文壺の口縁

部である。382は小型甕、383は鉢であろうか。384~385は胴部に刻目突帯を付ける中溝式甕である。386~393は山ノ口式系甕の口縁部である。胎土に金雲母を含むものが目立つ。394~398も胎土に金雲母を含むものが多く、山ノ口式系甕であると考えられる。399も甕であろうか。内面に圧痕が認められる(第4章第4節参照)。400~405は甕の底部。400・403~405のような上げ底状のもの、401のような低い脚台状を呈すもの、402のような平底がある。412は須玖式甕の口縁部である。長い口縁部が「く」の字状に外反する。内外面ともに器面の剥落が著しいが、外面および内面の屈曲部以上に赤彩の痕跡が認められる。SA1出土の280とは同一個体か。

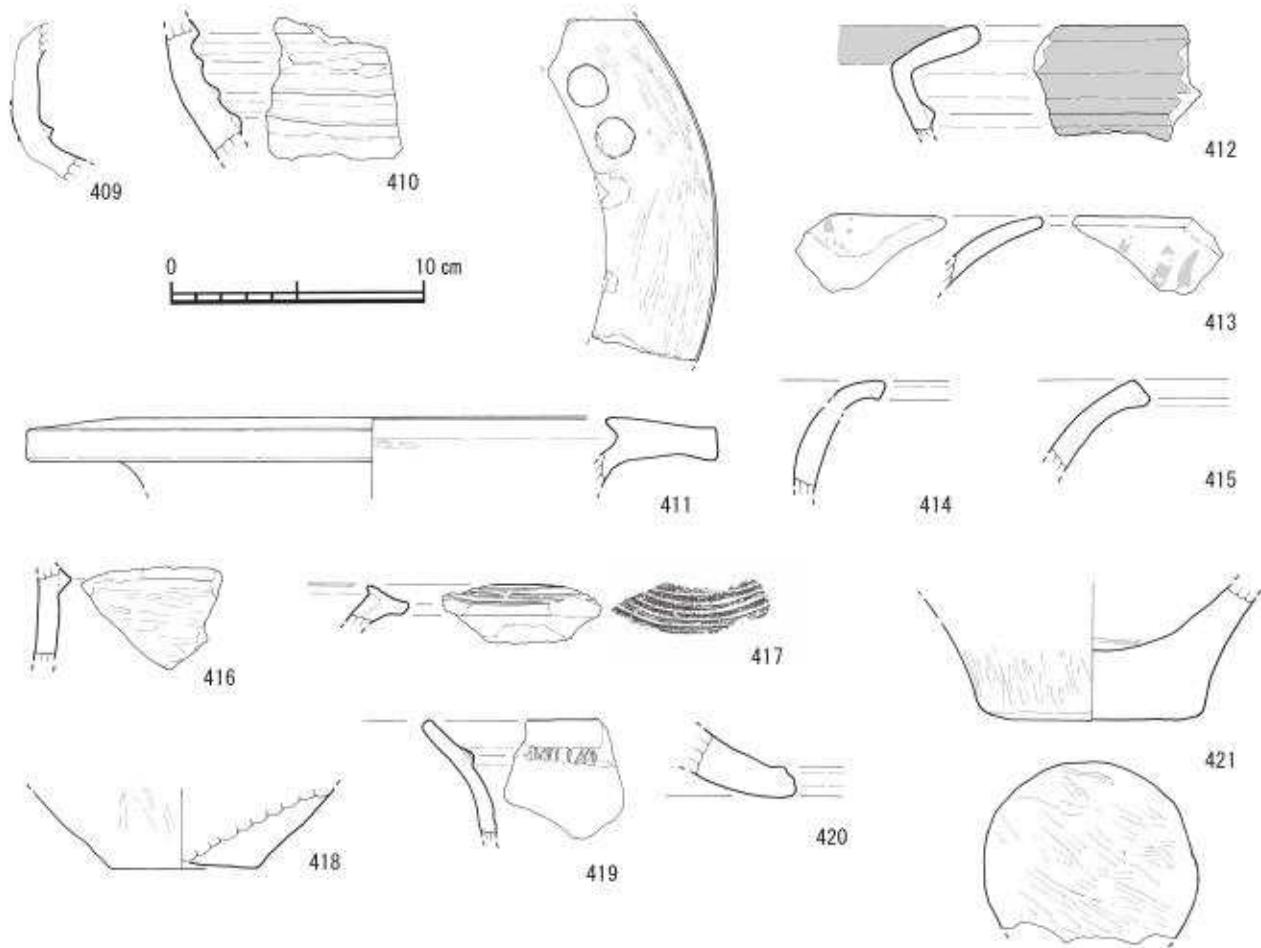
②壺形土器 (第44・45図406~411・413~419・421)
406・407は無頭壺である。大きく張る胴部に短く「く」の字に外半する口縁部が接続する。407は内外面ともにミガキ調整が加えられ、口縁端部にハケメが残る。408~409も肩部から口縁部にかけて外湾しながら立ち上がる壺である。肩部には1条の突帯が付く。410も突帯を付す壺の頸部付近である。411は鋤先状口縁の壺である。

口縁上面には円形浮文が付く。413は壺の口縁部で、内外面ともに赤彩の痕跡が帶状に残る。414・415も壺の口縁部。416はミガキが加えられた壺の胴部で、突帯が付く。417は凹線文系の壺と考えられる資料で、口縁部外面

には凹線というより細かな沈線が複数条施される。419は口縁部が強く内湾し、外面には刻目突帯を貼付する。418・421はミガキが加えられた壺の底部である。420は台付鉢の脚裾であろうか。



第44図 包含層出土弥生土器実測図① (S=1/3)



第45図 包含層出土弥生土器実測図② (S=1/3)

石器 (第46～48図)

①打製石鎌 (第46図422)

頁岩製でⅢ層から出土しているが、形態からは縄文時代の所産であると考えられる。

②磨製石鎌 (第46図423～437)

423～427は磨製石鎌である。いずれも基部を弧状に整形する。424・426・427は先端が欠損する。428や429などは、一部剥離面を残すものの広く研磨が認められるため、整形途中であると考えられる。431～434・436にも一部研磨が認められる。430や435、437は剥離面のみを残すが、形態からは磨製石鎌の未製品の可能性が高い。

③剥片石器 (第46・47図438・439・441～445)

438と442には二次的な加工の痕跡がみられ、439・441・443～445は微細剥離を付ける。石材は438が安山岩、443・444が黒曜石の他はいずれもチャート製である。

④石匙 (第46図440)

石匙は1点のみの出土である。440はチャート製で、周縁に細かな剥離を加え、刃部を作る。

⑤石核 (第47図446・447)

446は黒曜石の石核で、幅広の剥片を剥離する。

⑥剥片 (第47図448・449)

449は剥片として報告するが、磨製石鎌の未製品あるいは横刃型石器の可能性も残る。V層からの出土。

⑦磨製石斧 (第47図450)

ホルンフェルス製の磨製石斧で、1点のみ出土している。両側縁には敲打による刃潰しが認められる。

⑧打製石斧 (第47図451)

ホルンフェルス製で刃部は折損する。片側側縁のみが抉れており、歪な形態を呈する。

⑨横刃型石器 (第47図452～457)

452・453は横長剥片を素材とする横刃型石器である。いずれも頁岩製で、453は表面に鉄分が噴出する。454～457も横刃型石器の可能性がある剥片石器である。

⑩スクレイパー (第47図458～460)

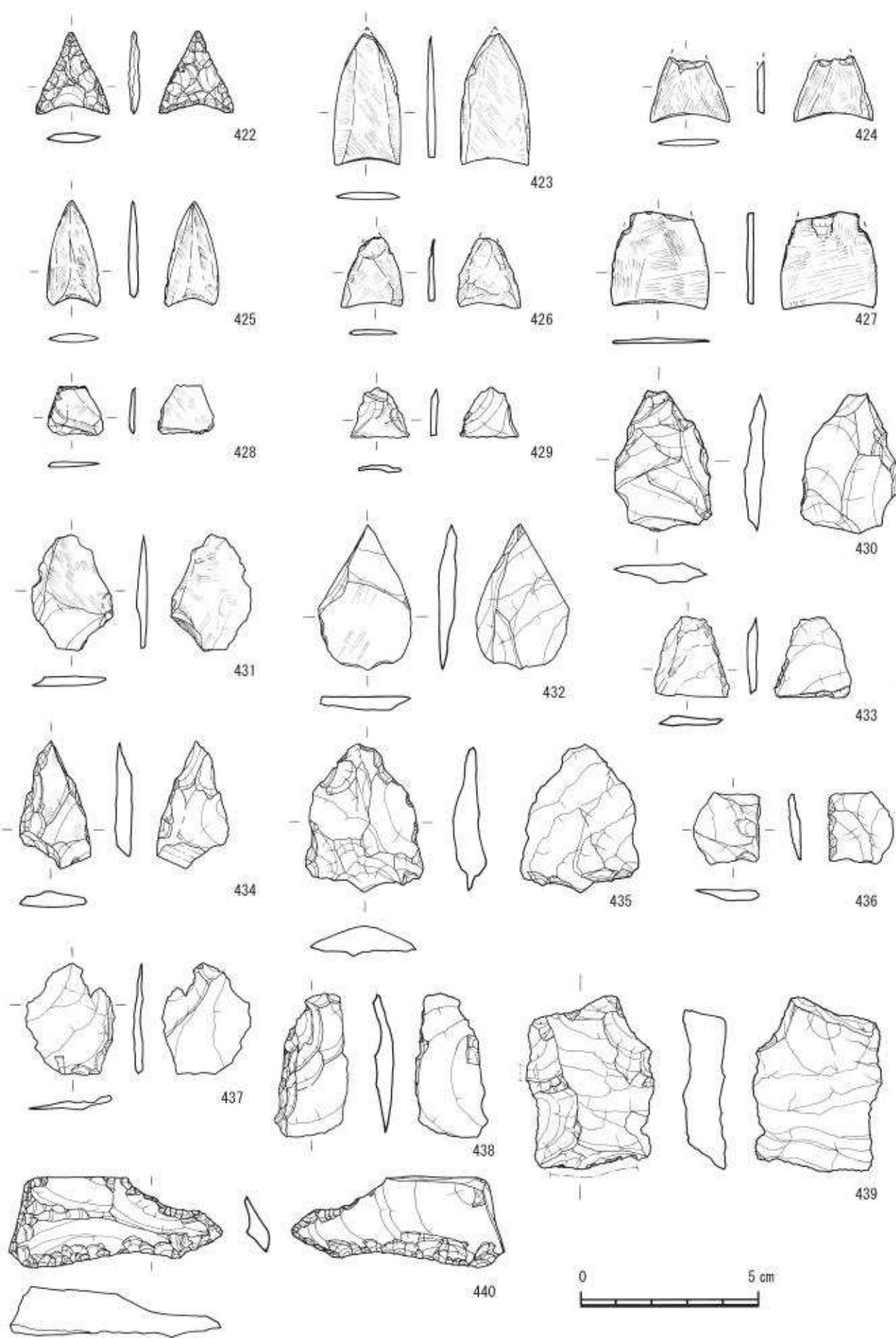
458は砂岩製で一部磨耗が認められる。459はホルンフェルス製で、小型のスクレイパーと考えられる。460はチャート製で小型である。

⑪粗製剥片石器 (第47図461・462)

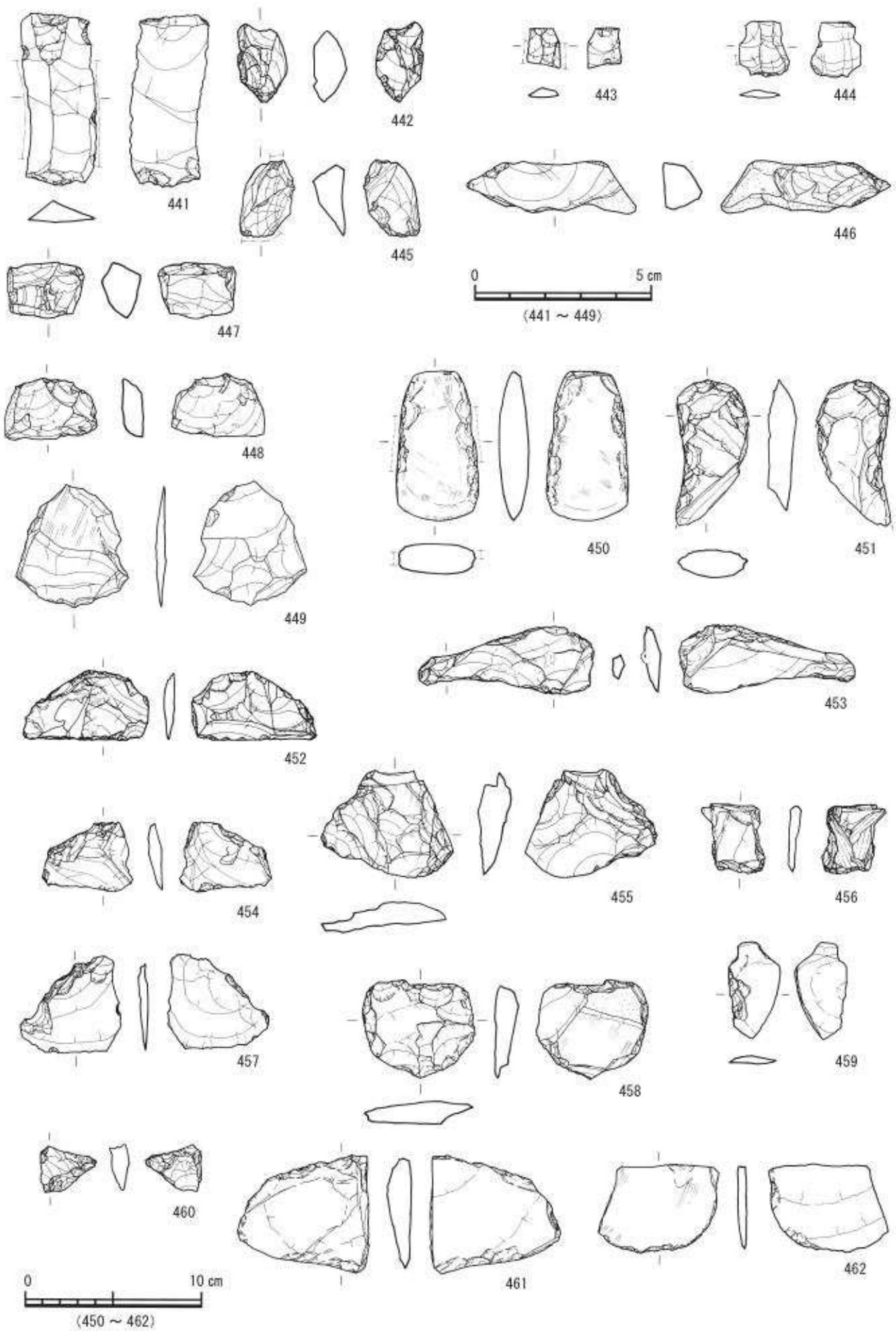
いずれもホルンフェルス製で、462には磨耗がみられる。

⑫磨石・敲石・砥石 (第48図463～470)

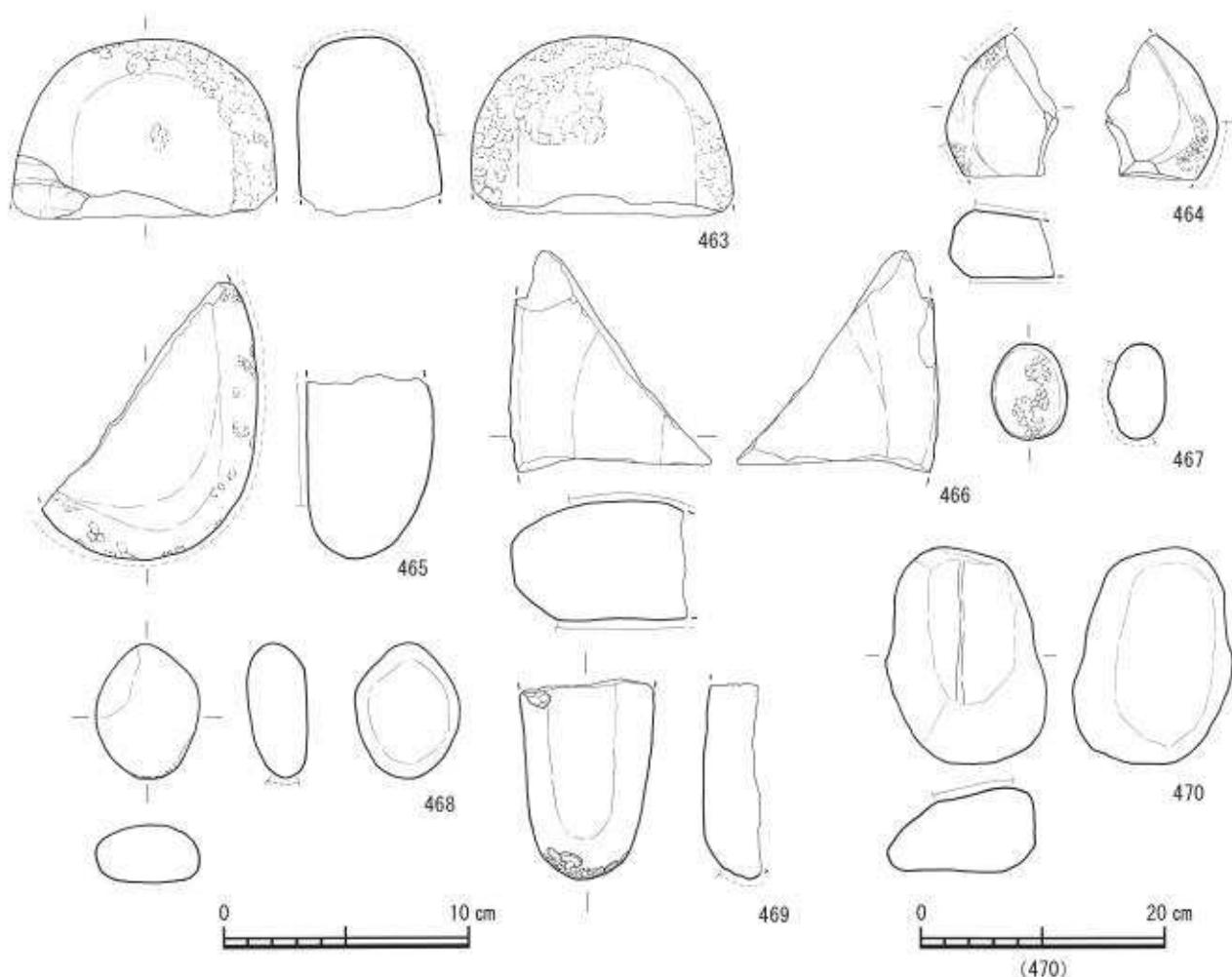
463～469は磨石・敲石類である。470は砂岩製の砥石。



第46図 包含層出土石器実測図① (S=2/3)



第47図 包含層出土石器実測図② (S=1/3・2/3)



第48図 包含層出土石器実測図③ (S=1/3・1/6)

第5節 平安時代～中世の遺構と遺物

平安時代～中世に属すると考えられる遺構については、掘立柱建物跡が1棟、土坑4基、溝状遺構1条、ピット16基を検出した。遺構内から遺物が出土しておらず、帰属時期の判断が難しい遺構も多いが、それらも検出面ならびに遺構内に堆積する埋土からこの時期の所産である可能性が高いと判断した。

1 掘立柱建物跡 (SB)

SB1 (第49・50図)

D1・2区で検出しておおり、一部は調査区外に延びるため、全体像は判然としない。おそらく主軸はN-84°-Wにとるものと思われる。検出した範囲では東辺に庇をもつ 2×2 間の建物跡であるが、全体的な規模は不明である。検出できた範囲では桁行2間(4.12m)、梁行2間(3.8m)である。柱間距離は桁行平均2.06m、梁行平均1.9mとなる。身舎の柱穴は検出面からの深さが52～56cmを測り、底部分は20～36cmを測る。身舎の柱穴掘り形

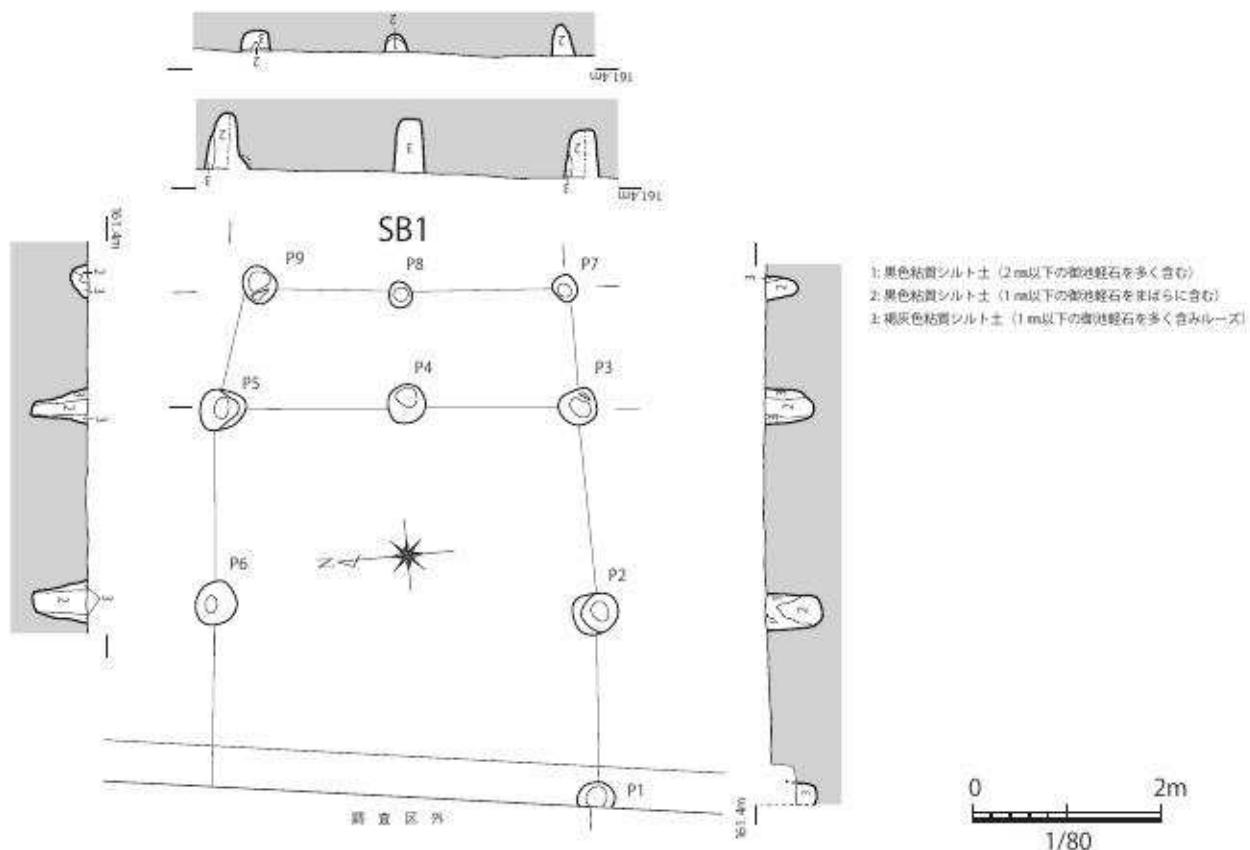
はいずれも径40cm程の円形を呈する。庇部分は一回り小さく径25～36cm程である。柱穴の断面で確認すると、P3・5・6には柱痕跡と考えられる垂直方向の立ち上がりが認められる。柱穴配置は若干歪む。

471～474がSB1のピット内から出土した遺物である。471～473はP2からの出土。471と473は胎土から同一個体の可能性もあるが、図上で復元した法量が異なるため別個体とした。いずれも土師器坏で、471は口径14.1cm、473は底径9.8cmを測る。472も土師器坏の口縁部である。474は弥生土器の大型甌の突帯であろうか。

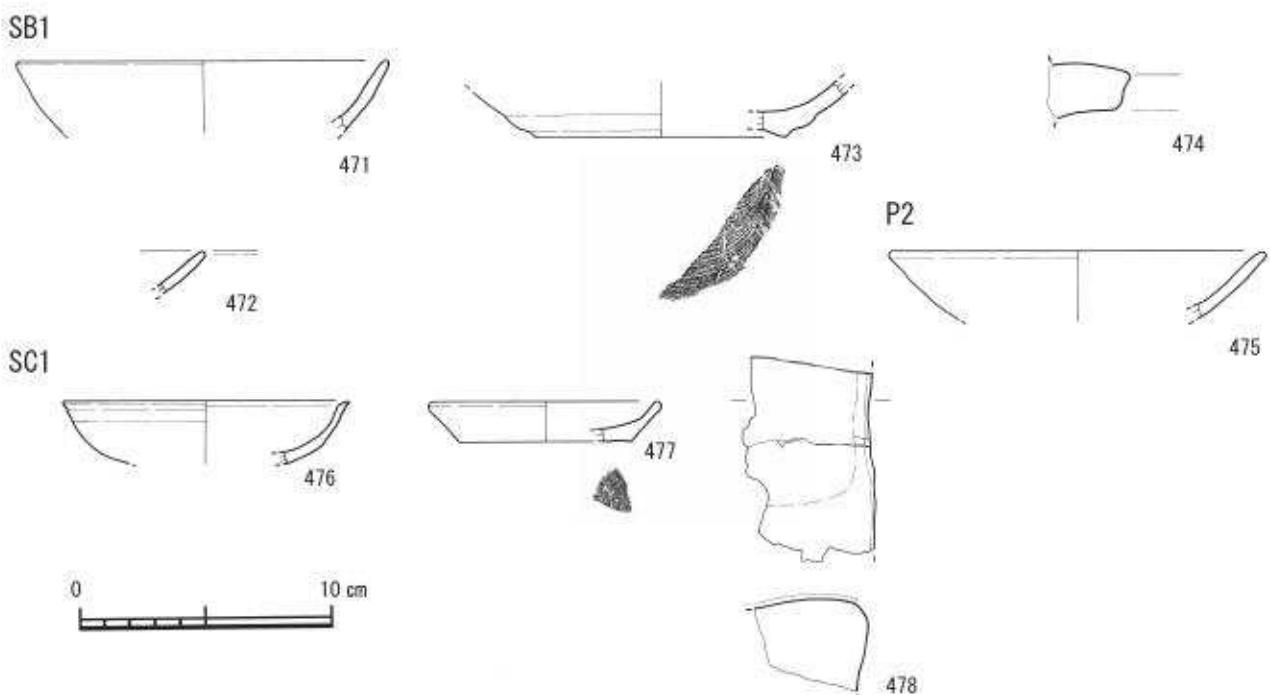
本遺構からは、時期が特定できる遺物が出土しておらず、遺構の帰属時期の判断が難しい。土師器坏の口径と底部切り離しが糸切りであること、包含層から出土している白磁が碗II類やIV類などであることを評価すれば、SB1もこの時期の所産である可能性が高い。土師器坏の形態・法量を考えると、12世紀後半頃の所産であろうか。

2 土坑 (SC)

平安時代～中世に帰属すると考えられる土坑は4基検



第49図 SB1 実測図 ($S=1/80$)



第50図 SB1・SC1・P2 出土遺物実測図 ($S=1/3$)

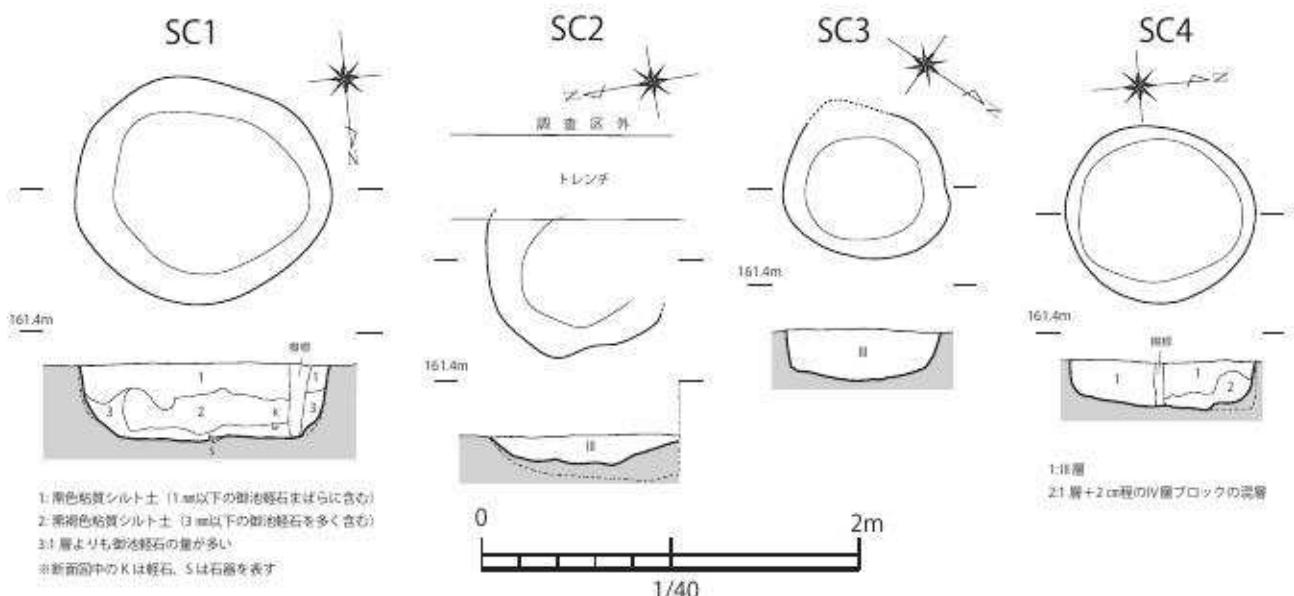
出している。しかし、上述のように遺物が出土していないものがほとんどで、検出面と遺構内埋土によって時期を判断しているものが多い。

SC1 (第50・51図)

D1区で検出しておおり、長軸1.36m、短軸1.2mの楕

円形を呈する。検出面からの深さは40cm程度である。SB1の建物内部に位置するが、柱穴との切り合い関係がないため前後関係は判然としない。

476～478が出土遺物である。476は大宰府分類の白磁皿V類である。C期(11世紀後半～12世紀前半)の



第51図 SC1～4実測図 (S=1/40)

資料とされる。477は土師器皿である。口径8.8cm、底径6.8cm、器高1.6cmを測る。底部の切り離しはヘラ切りである。法量および底部ヘラ切りであることを評価すると、11世紀代の新しい段階から12世紀初頭頃の所産であると考えられる。478は砂岩製の砥石である。

SC2(第51図)

C2・3区で検出しており、一部土層確認トレンチによって破壊される。そのため全体像は判然としない。検出面からの深さは16cm程と浅い。埋土には基本土層のⅢ層が堆積する。

遺物は出土していない。

SC3(第51図)

B3区で検出しており、一部分は芋穴に破壊される。長軸0.86m、短軸0.78mの不整円形を呈する。検出面からの深さは28cmを測る。埋土にはⅢ層が堆積する。

遺物は出土していない。

SC4(第51図)

B1・2区で検出しており、径約1mの円形を呈する。検出面からの深さは最大で24cmを測る。埋土の大部分にはⅢ層が堆積する。

遺物は出土していない。

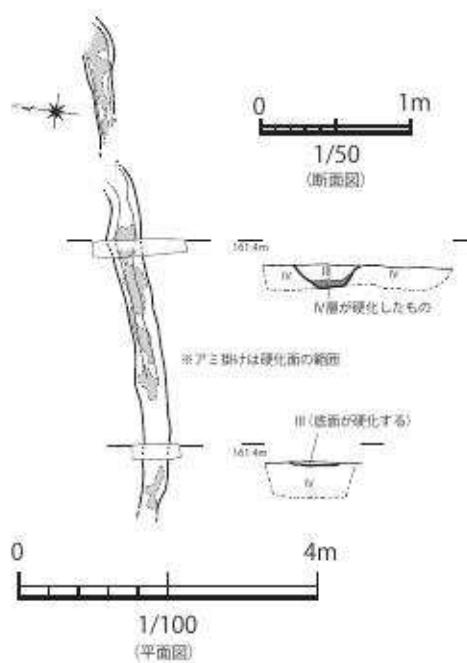
3 溝状遺構 (SD)

今回の調査では溝状遺構は1条のみ検出している。これは底面に硬化面を有す道跡と考えられるものだが、この他にも包含層の掘り下げ中に一部硬化面を確認した範囲があり、遺構としては認識できなかったものの、同様の道跡と考えられる遺構が存在した可能性が高い。

SD1(第52図)

B2・3区、弥生時代の竪穴住居跡であるSA2の上位で検出しており、検出した範囲では全長6.5m程を測るのみである。しかし、遺構のさらに西側でブロック状の硬化面の範囲を確認していることや、東側の調査区壁断面でも溝状の落ち込みがみられることから本来は調査区を横断するように延びていたものと推測される。浅い溝状の掘り込みをもち、その底面が硬化する。遺構の西端は掘り込みは検出できず、硬化面を確認したのみである。底面が硬化することから道跡であったものと考えられる。遺物は出土していない。

SD1



第52図 SD1実測図 (S=1/50・1/100)

4 ピット (P)

本遺跡では、掘立柱建物跡のような建物跡の一部を構成するような柱穴以外の小穴は、単独のピットとして調査・記録している。調査区全体では16基検出した。P1・2・4・5・8・9については、掘立柱建物跡を構成する柱穴である可能性を考えて精査したが、一部検出できなかつた柱穴があるため、積極的に建物跡として認識するには至っていない。また、遺物が出土しているものは少ないが、検出面および堆積する埋土からこの時期の所産と判断した。以下、個別のピットについて報告する。

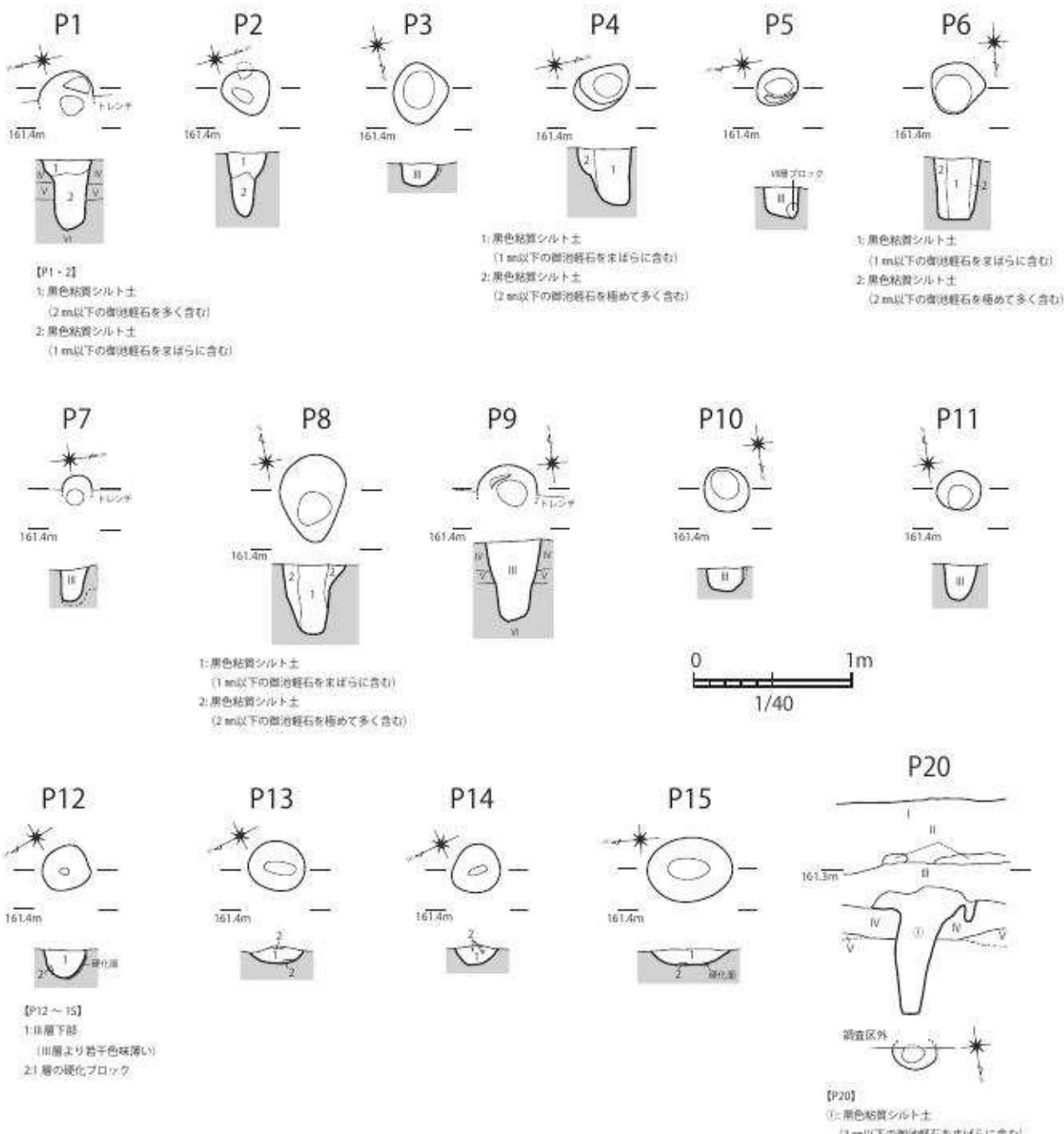
P1 (第53図)

D1区で検出しており、約半分は土層観察トレーニチによって破壊される。そのため全体像は判然としないが、おそらく径0.34m程の円形を呈するものと推測される。検出面からの深さは44cmを測る。

P2 (第50・53図)

D1区で検出しており、径0.3mの不整円形を呈する。検出面からの深さは40cmを測る。

475はP2から出土した土器器坏である。口径は14.4cmを測る。



第53図 平安時代～中世のピット (P) 実測図 (S=1/40)

P3 (第 53 図)

C2 区で検出しており、径 0.38 m の不整円形を呈する。検出面からの深さは 14 cm を測るのみである。

P4 (第 53 図)

D2 区で検出しており、長軸 0.38 m、短軸 0.28 m の楕円形を呈する。遺構の南側にはテラス状の段差がつく。検出面からの深さは 36 cm を測る。

P5 (第 53 図)

D1 区の土層確認トレンチ内で検出しており、長軸 0.3 m、短軸 0.24 m の楕円形を呈する。遺構の西側にはテラスを有す。検出面からの深さは 20 cm を測るのみであるが、本来はこれよりかなり深いものと推測される。埋土にはⅢ層が堆積する。

P6 (第 53 図)

C1 区で検出しており、径約 0.3 m の不整円形を呈する。検出面からの深さは 40 cm を測る。断面観察からは垂直方向の立ち上がりが確認でき、これが柱痕跡であった可能性が高い。

P7 (第 53 図)

D2 区で検出しており、約半分は土層観察トレンチに破壊される。そのため、全体像は判然としないが、おそらく径 0.2 m 程の円形を呈するものと推測される。検出面からの深さは 20 cm で、埋土にはⅢ層が堆積する。

P8 (第 53 図)

D2 区で検出しており、長軸 0.57 m、短軸 0.44 m の不整楕円形を呈する。検出面からの深さは 44 cm を測る。断面観察では柱痕跡と考えられる垂直方向の立ち上がりを確認している。

P9 (第 53 図)

D1 区の土層観察トレンチで検出しており、約半分が破壊される。遺構の北側にテラスがつく。検出面からの深さは 50 cm を測り、埋土にはⅢ層が堆積する。

P10 (第 53 図)

C2 区で検出しており、径 0.3 m の円形を呈するビットである。検出面からの深さは 16 cm を測る。埋土にはⅢ層が堆積する。

P11 (第 53 図)

D2 区で検出しており、長軸 0.18 m、短軸 0.14 m の楕円形を呈する。検出面からの深さは 22 cm を測り、埋土にはⅢ層が堆積する。

P12 (第 53 図)

B2 区で検出しており、径 0.3 m の円形を呈する。検出面からの深さは 18 cm を測る。埋土にはⅢ層が堆積し遺構の壁面の一部は硬化する。埋土にもこの硬化ブロックが含まれる。

P13 (第 53 図)

B2・3 区、P12 に隣接して検出しており、長軸 0.36 m、短軸 0.3 m の楕円形を呈する。P12 と同様に埋土にはⅢ層の硬化ブロックが含まれる。

P14 (第 53 図)

B3 区で検出しており、径 0.3 m の円形を呈する。検出面からの深さは 12 cm を測り、埋土には P12・13 と同様の硬化ブロックが含まれる。

P15 (第 53 図)

B3 区で検出しており、長軸 0.54 m、短軸 0.4 m の楕円形を呈する。検出面からの深さは 10 cm を測るのみである。埋土にはやはり硬化ブロックが含まれ、壁面は硬化する。P12～15 については、同様の埋土が堆積するビットが隣接して検出されたため、波板状ビットの可能性も考えたが 4 基しか検出できなかったことと、ビット間の距離にも規則性が認められないため、個別のビットとして報告する。

P20 (第 53 図)

C4 区の南端、土層確認トレンチ内で検出しており、平面プランは約半分のみを検出している。長軸 0.28 m 程の円形を呈するものと考えられる。調査区壁の断面で確認すると、本来の深さは 0.68 cm を測るようである。

5 包含層出土遺物

平安時代～中世の遺物は、先にみた縄文時代や弥生時代の遺物に比べれば少量である。Ⅲ層からの出土が大部分であるが、わずかに表土層（I 層）からの出土もみられる。以下、包含層出土遺物を種別ごとに報告する。

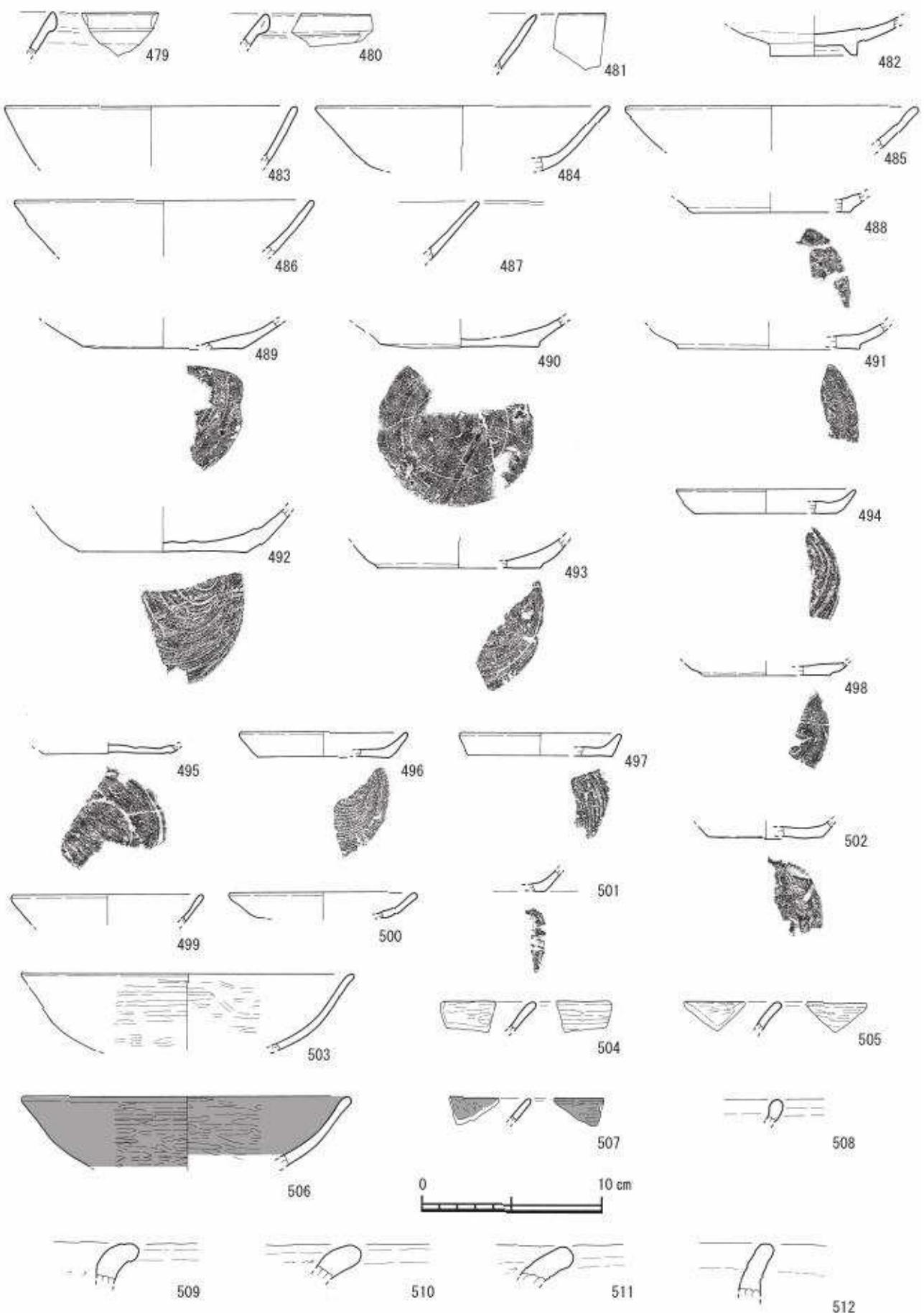
①貿易陶磁器 (第 54 図 479～482)

479・480 は大宰府分類白磁碗IV類の口縁部である。大きな玉縁口縁を特徴とする。C 期（11 世紀後半～12 世紀前半）の所産である。481 は口縁部に向けて直線的に開く器形の白磁碗VIII類であろうか。D 期（12 世紀中頃～後半）の所産とされる。482 は底部資料である。釉はやや黄色味をおび、化粧土を有す。高台部外面は直に、内面は斜めに削る。白磁碗II類と考えられる。やはり C 期の所産といえる。

②土師器坏 (第 54 図 483～493)

483～487 は土師器坏の口縁部資料である。いずれも破片資料であり、口径は復元したものである。復元した口径は 15.8～16.4 cm を測る。器面は平滑なものが多い。

488～493 は土師器坏の底部である。これも遺存状態は良くなく、反転復元しているものが多い。底径は 8.7～10 cm を測る。底部の切り離し技法は、488～491 はへラ切り、492・493 が糸切りである。



第54図 包含層出土平安時代～中世の遺物実測図①(S=1/3)

③土師器小皿（第54図494～502）

土師器の小皿も全体的な出土量が少なく、破片資料が多い。そのため、口径・底径は反転復元したものである。

494・496・497は全形が分かる資料である。口径は8.6～9.8cm、底径7.2～8.0、器高1.2～1.4cmを測る。底部の切り離しは全て糸切りである。495・498・502は底部資料で底径6.4～7.0cmを測る。切り離しは495・498がヘラ切り、502が糸切りである。小皿も壺同様に、底部の切り離し技法はヘラ切りと糸切りの両者が混在する。499・500は口縁部資料。両者ともに10cm強を測る。これらの資料は完形のものではなく、復元した法量についてもバラつきがみられ、帰属時期を推定するのは難しい。

④ミガキ椀・黒色土器（第54図503～508）

内外面ともにミガキ調整が加えられた高台付碗と考えられる資料を一括して報告する。503～505は炭素の吸着がみられないミガキ碗である。503は胴部がやや張り、口縁部が短く外反する。内外面ともにミガキ調整が加えられる。504・505も同様の資料である。

506・507は内外面を黒色処理された黑色土器B類である。器形はミガキ碗と共通しており、胴部がわずかに張り、口縁部が短く外反する。

508は口縁端部がやや肥厚する資料で、磨耗しているが本来はミガキが加えられていたものと考えられる。

⑤土師器甕（第54図509～512）

509～512は土師器甕の口縁部資料である。いずれも

口縁部がわずかに外反する資料で、内面の屈曲部以下にはケズリ調整が加えられる。その他の器面はナデ調整となる。

⑥滑石製品（第55図513～515）

滑石製石鍋ないし本来は石鍋であったと考えられる資料で、穿孔されたり再加工されたりと他の用途に転用されたものと考えられる資料である。513は石鍋の口縁部の形態をそのまま残すもので、3箇所の穿孔がみられる。514も本来は石鍋の口縁部だったと推測されるが、破断面が研磨されるなど再加工がなされている。515も同様に研磨など再加工がなされ、1箇所穿孔も認められる。

⑦鉄製品・鍛冶関連遺物（第55図516～526）

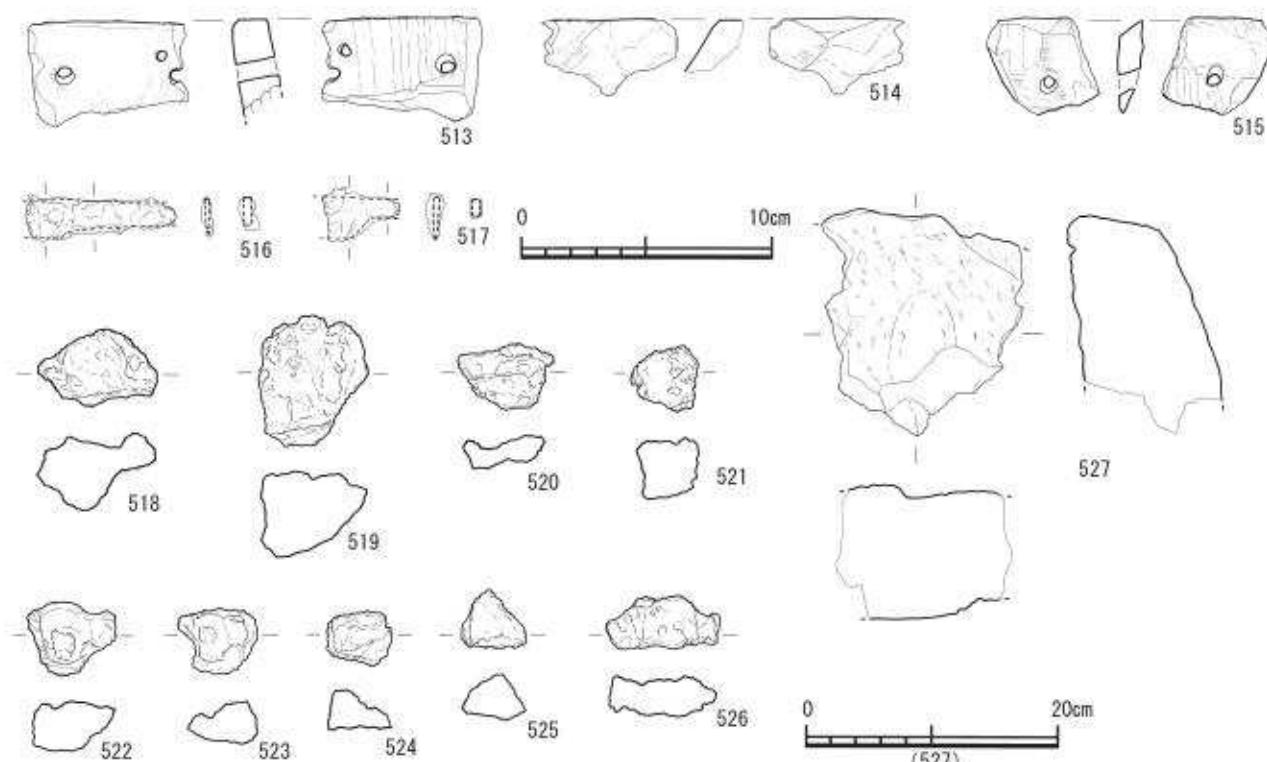
516・517はいずれも刀子と考えられる資料で、両者ともに刃部側に緩やかに湾曲する形態の関部を有する。

518～526は鉄滓である。大きさは大小さまざま、519のような椀形滓と考えられる資料もあるが、今回はこれらの出土資料について金属学的の分析は実施しておらず、一括して鉄滓として報告する。

⑧軽石製品（第55図527）

527は軽石製品で上面にわずかな窪みが認められる。表面が橙色や赤色に変色していることから、被熱したものと推測される。用途は不明。

以上の包含層出土資料は、貿易陶磁器の様相や、土師器壺、ミガキ・黒色土器碗の形態・法量などから概ね11世紀の新しい段階から12世紀代の資料が多いといえる。



第55図 包含層出土平安時代～中世の遺物実測図② (S=1/3・1/6)

遺物観察表①

遺物番号	種別	器種	出土遺模・地点・層位	法量(cm)			文様・調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面		
1	縄文土器	深鉢	SCS 上層/B2 5層	43.2	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	に赤い黄褐	石英・長石・灰色砂粒	反転復元
2	縄文土器	深鉢	SCS 上層・中層・一括/C2 4+5層	39.2	—	—	ナテ	ケズリ状ナテ	に赤い褐	灰褐色	白色・灰色砂粒	反転復元 47之四一がスス付着
3	縄文土器	深鉢	SCS 一括/B2 4+5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	灰褐色	石英・長石・灰色砂粒	
4	縄文土器	深鉢	SCS 上層・一括	—	—	—	条痕	ナテ	灰褐色	灰褐色	石英・長石	スス付着
5	縄文土器	深鉢	SCS 上層/B2 5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	明褐色	石英・長石・黄色砂粒	圧痕あり
6	縄文土器	深鉢	SCS 中層・一括	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	石英・長石	
7	縄文土器	深鉢	SCS 上・中層	—	—	—	ナテ	ナテ・ラズリ状ナテ	灰褐色	灰褐色	石英・長石・灰色砂粒	
8	縄文土器	深鉢	SCS 下層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	褐色	石英・長石	
9	縄文土器	深鉢	SCS 上層・一括	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐色	に赤い褐	石英・長石	
10	縄文土器	深鉢	SCS 上層/B2 5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	黒褐色	石英・長石・黄色輕石	スス付着
11	縄文土器	深鉢	SCS 上層	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐色	灰褐色	白色砂粒・黄色輕石	
12	縄文土器	深鉢	SCS 一括	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い黄褐	に赤い褐	石英・長石・灰色砂粒	
13	縄文土器	深鉢	SCS 一括/B2 4+5層+一括	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	灰褐色	石英・長石・黄色輕石	
14	縄文土器	深鉢	SCS 一括	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	灰褐色	長石	
15	縄文土器	深鉢	SCS 上層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	褐色	長石・黄色輕石	スス付着
16	縄文土器	深鉢	SCS 上層	—	—	—	ナテ	ナテ	褐色	褐色	石英・長石	
17	縄文土器	深鉢	SCS 一括	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	褐色	石英・長石	
18	縄文土器	深鉢	SCS 一括	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐色	灰褐色	石英・長石	
19	縄文土器	深鉢	SCS 上層/B1 5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	に赤い褐	石英・長石・茶色砂粒	スス付着
20	縄文土器	深鉢	SCS 下層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	灰褐色	石英・長石	
21	縄文土器	深鉢	SCS 一括	—	—	—	ナテ	ケズリ状ナテ	に赤い褐	に赤い黄褐	石英・長石・灰色砂粒	
22	縄文土器	深鉢	SCS 上層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	に赤い黄褐	石英・長石・灰色砂粒	
23	縄文土器	深鉢	SCS 上層/B2 5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	石英・長石	
24	縄文土器	深鉢	SCS 一括	—	—	—	ナテ	ナテ・ラズリ状ナテ	灰褐色	灰褐色	石英・長石・灰色砂粒	スス付着
25	縄文土器	深鉢	SCS 一括	—	—	—	ナテ	ナテ	明褐色	明褐色	石英・長石	
26	縄文土器	深鉢	SCS 中層・一括/B2+C1 5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	石英・長石	
27	縄文土器	深鉢	SCS 下層	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐色	灰褐色	石英・長石・黄色輕石	スス付着
28	縄文土器	深鉢	SCS 上層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い黄褐	褐色	石英・長石	
29	縄文土器	深鉢	SCS 上層・一括/B2 5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い黄褐	褐色	石英・長石	スス付着
30	縄文土器	深鉢	SCS 上・下層/C2 5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	石英・長石	
31	縄文土器	深鉢	SCS 上層	—	—	—	ナテ	ナテ	ケズリ状ナテ	灰褐色	石英・長石・灰色砂粒	スス付着
32	縄文土器	深鉢	SCS 上・中層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	に赤い黄褐	石英・長石・灰色砂粒	スス付着
33	縄文土器	深鉢	SCS 上・中層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	灰褐色	石英・長石・灰色砂粒	スス付着
34	縄文土器	深鉢	SCS 上・中層	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐色	灰褐色	石英・長石・黄色輕石	スス付着
35	縄文土器	深鉢	SCS 上層・B1 5層/B2 4層/C1 5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	に赤い黄褐	長石・微細白色粒	
36	縄文土器	深鉢	SCS 上層/B2 4+5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	に赤い褐	石英・長石	未貫通の補修孔あり
37	縄文土器	深鉢	SCS 上層・一括/B2 4層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い黄褐	灰褐色	石英・長石・黄色輕石	
38	縄文土器	深鉢	SCS 一括/B1+2 5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	に赤い黄褐	石英・長石・黄色輕石	
39	縄文土器	深鉢	SCS 中層・一括	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	灰褐色	白色・灰色砂粒	
40	縄文土器	深鉢	SCS 一括/C1 5層+一括/C2 4層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い黄褐	灰褐色	石英・長石	
41	縄文土器	深鉢	SCS 中層	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐色	に赤い褐	石英・長石	
42	縄文土器	深鉢	SCS 中層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い黄褐	に赤い褐	石英・長石	
43	縄文土器	深鉢	SCS 一括/B2 5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	に赤い褐	石英・長石	
44	縄文土器	深鉢	SCS 上層・一括	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	灰褐色	石英・長石	
45	縄文土器	深鉢	SCS 上層・一括	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	に赤い黄褐	石英・長石	
46	縄文土器	深鉢	SCS 上層・一括/B1+2 5層	—	—	—	ナテ	ナテ	裡	に赤い黄褐	石英・長石	
47	縄文土器	深鉢	SCS 上層・中層・一括/B1 5層/B2 4層/C2 4層	—	10.4	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	に赤い褐	白色・灰色砂粒	反転復元 2と同一のスス付着
48	縄文土器	深鉢	SCS 上層/B2 5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	に赤い黄褐	長石・角閃石・黄色輕石	
49	縄文土器	深鉢	SCS 中層・一括	—	8.4	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	裡	白色・灰色砂粒	
50	縄文土器	深鉢	SCS 上層/B2 5層/C2 4層	—	9.5	—	ナテ	ナテ	条痕	に赤い褐	白色・灰色砂粒・黄色輕石	反転復元

遺物観察表(2)

遺物 番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量 (cm)		文様・調整		色調		胎土	備考	
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
51	縄文土器	深鉢	SC5 上層・一括	—	10.0	—	ナテ	ナテ	灰黄褐	に赤い褐	白色・灰色砂粒	
52	縄文土器	深鉢	SC5 上層	—	—	—	ナテ	磨耗・剥落	灰褐	灰褐	長石・金雲母	
53	縄文土器	鉢	SC5 上・下層 / B1-4・5層 / B2 上層	47.6	—	—	ナテ	条痕→三万キ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	石英・長石・微細白色粒	
54	縄文土器	鉢	SC5 上・中層 / 一括 / B1-1・4層 / B2-3層	—	—	—	ナテ	三万キ	に赤い褐	に赤い黄褐	長石・黄色蛭石	スヌ付着
55	縄文土器	鉢	SC5 上層 / B1-5層 / B2-4・5層 / C2-4・5層 第一括 / D2-4層	47.6	—	—	ナテ	条痕→三万キ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	石英・長石・微細白色粒	反転復元
56	縄文土器	鉢	SC5 上層 / B1-4層・4層・1括	—	—	—	ナテ	三万キ	褐灰	黒褐	長石	
57	縄文土器	鉢	SC5 上層 / B1-5層・1括 / B2-4・5層・4・5層 第二括 / C2-4層	—	—	—	ナテ	三万キ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	石英・長石	
58	縄文土器	鉢	SC5 上層 / C2-3・4層・1括	—	—	—	ナテ	三万キ	に赤い褐	灰褐	微細白色粒	
59	縄文土器	鉢	SC5 上層 / C2-4・5層・1括 / B2-3・4層・1括	—	—	—	ナテ	三万キ	褐	に赤い褐	微細白色粒	
60	縄文土器	鉢	SC5 上層	—	—	—	ナテ	三万キ	褐	に赤い褐	長石・黄色蛭石	
61	縄文土器	浅鉢	SC5 上層 / C3-4層	39.4	—	—	三万キ	三万キ	灰黄褐	褐灰	微細白色粒	反転復元
62	縄文土器	浅鉢	SC5 上層・1括 / B1-4・5層・1括 B2-3層・1括	18.0	—	—	三万キ	三万キ	褐褐	黒褐	精鐵	反転復元
63	縄文土器	浅鉢	SC5 上層・一括	17.8	—	—	三万キ・磨耗	三万キ	褐褐	褐灰	石英	反転復元 229七期一括
64	縄文土器	浅鉢	SC5 -1括	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い黄褐	に赤い褐	精鐵	
65	縄文土器	浅鉢	SC5 -1括	—	—	—	三万キ	三万キ	鵝灰黃	黃灰	精鐵	
66	縄文土器	浅鉢	SC5 中層 / B2-4層 / B1-5層 B2-4・5層・C2-5層	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い黄褐	灰	微細白色粒	反転復元 スヌ付着 神經毛ノ箇所あり
74	縄文土器	深鉢	B2-5層	—	—	—	凹線・三万キ	ナテ	褐	に赤い褐	石英・長石	中岳II式
75	縄文土器	深鉢	C2-4層	—	—	—	凹線・三万キ	ナテ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	石英・長石	中岳II式
76	縄文土器	深鉢	B2-5層	—	—	—	凹線・三万キ	ナテ	褐	に赤い褐	石英・長石	中岳II式
77	縄文土器	深鉢	B2-5層	—	—	—	凹線・凹向・ 三万キ	ナテ	褐	に赤い褐	石英・長石	中岳II式
78	縄文土器	深鉢	C2-4層	—	—	—	三万キ	ナテ	褐	に赤い褐	石英・長石	中岳II式
79	縄文土器	深鉢	B2-5層	—	—	—	三万キ	ナテ	褐	に赤い褐	石英・長石	中岳II式
80	縄文土器	深鉢	B2-5層・C2-4層	39.0	—	—	ナテ	ナテ・オサエ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	石英・長石	反転復元
81	縄文土器	深鉢	B2-5層	38.2	—	—	ナテ	ナテ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	白色・灰色砂粒・黃色蛭石	反転復元
82	縄文土器	深鉢	B2-5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い赤褐	褐灰	石英・長石	
83	縄文土器	深鉢	B2-5層	—	—	—	ナテ	ナテ・ナスリ状 ナフ	に赤い褐	に赤い赤褐	石英・長石・黃色蛭石	
84	縄文土器	深鉢	C2-4層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い赤褐	褐灰	微細白色粒	
85	縄文土器	深鉢	B2-5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い赤褐	に赤い褐	石英・長石	スヌ付着
86	縄文土器	深鉢	C2-4・5層	—	—	—	ナテ	ナテ・オサエ	褐褐	褐灰	石英・長石・黃色蛭石	
87	縄文土器	深鉢	C1-4層	—	—	—	ナテ	オサエ→ナテ	褐	に赤い褐	石英・長石	
88	縄文土器	深鉢	C2-4層	—	—	—	ナテ・オサエ	ナテ・オサエ	に赤い赤褐	灰褐	長石・角閃石・黃色蛭石	
89	縄文土器	深鉢	C2-4層	—	—	—	ナテ・オサエ	ナテ	灰黄褐	灰黄褐	石英・長石・黃色蛭石	
90	縄文土器	深鉢	B2-5層	—	—	—	ナテ	ナテ	褐褐	褐灰	石英・長石	
91	縄文土器	深鉢	B2-5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い赤褐	に赤い褐	微細白色粒・黃色蛭石	
92	縄文土器	深鉢	B2-5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	に赤い褐	石英・長石	スヌ付着
93	縄文土器	深鉢	B1-4層	—	—	—	ナテ	丁寧なナテ	褐褐	褐褐	石英・長石	
94	縄文土器	深鉢	B2-5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い黄褐	灰黄褐	微細白色粒	
95	縄文土器	深鉢	C1-4層	—	—	—	ナテ	ナテ	褐褐	褐	石英・長石	
96	縄文土器	深鉢	B2-5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い赤褐	胡赤褐	石英・長石	
97	縄文土器	深鉢	C2-5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	に赤い褐	石英・長石	
98	縄文土器	深鉢	C2-4層	—	—	—	ナテ	ナテ	褐灰	に赤い褐	石英・長石	
99	縄文土器	深鉢	C2-5層	—	—	—	ナテ	ナテ	褐褐	褐灰	石英・長石・黃色蛭石	
100	縄文土器	深鉢	B2-5層	—	—	—	ナテ	ナテ	褐褐	褐灰	石英・長石	
101	縄文土器	深鉢	B2-5層	—	—	—	ナテ	ナテ	褐灰	灰褐	石英・長石	スヌ付着
102	縄文土器	深鉢	C2-4層	—	—	—	ナテ	丁寧なナテ	褐褐	に赤い赤褐	長石・角閃石・黃色蛭石	
103	縄文土器	深鉢	B2-5層	—	—	—	ナテ	ナテ	褐褐	褐灰	石英・長石	
104	縄文土器	深鉢	C2-4層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	黒褐	石英・長石・茶色砂粒	
105	縄文土器	深鉢	C2-4層	—	—	—	ナテ	ナテ	褐	に赤い褐	石英・長石・黃色蛭石	
106	縄文土器	深鉢	B2-5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い赤褐	灰褐	石英・長石・灰色砂粒	
107	縄文土器	深鉢	B2-5層・1括	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い褐	に赤い黄褐	石英・長石	

遺物観察表③

遺物 番号	種別	器種	出土遺模・地点・層位	法量 (cm)			文様・調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
108	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い裡	に赤い裡	石英・長石	
109	縄文土器	深鉢	C2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	灰黄褐	褐灰	石英・長石・黄色軽石	
110	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い裡	褐灰	石英・長石	
111	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐	灰褐	石英・長石	
112	縄文土器	深鉢	B2・4層	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐	灰褐	石英・長石・黄色軽石	
113	縄文土器	深鉢	C2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い裡	黄灰	石英・長石・黄色軽石	
114	縄文土器	深鉢	B2・3層一括	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐	灰褐	石英・長石・黄色軽石	スヌ付着
115	縄文土器	深鉢	A2・4・5層一括	—	—	—	ナテ	ナテ	明赤褐	に赤い赤褐	石英・長石	
116	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	桑痕	ナテ	に赤い裡	に赤い裡	石英・長石	
117	縄文土器	深鉢	C2・4層	—	—	—	ナテ	ナテ	黒褐	灰褐	石英・長石・黄色軽石	
118	縄文土器	深鉢	C1・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	明赤褐	赤褐	石英・長石	
119	縄文土器	深鉢	B2・4層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い赤褐	灰褐	石英・長石	
120	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い裡	黒褐	石英・長石・灰色砂粒	
121	縄文土器	深鉢	C2・3・4層一括	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐	灰褐	長石・黄色軽石	
122	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い裡	に赤い裡	石英・長石・灰色砂粒	
123	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐	黒褐	石英・長石	
124	縄文土器	深鉢	B2・5層一括	—	—	—	ナテ	ナテ	褐灰	黒褐	石英・長石・灰色砂粒	
125	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い赤褐	褐灰	微細白色粒	
126	縄文土器	深鉢	B1・4層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い赤褐	黄灰	石英・長石	
127	縄文土器	深鉢	B1・5層一括	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い裡	灰褐	石英・長石	
128	縄文土器	深鉢	C2・4層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い裡	灰褐	石英・長石・黄色軽石	
129	縄文土器	深鉢	B2・4層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い裡	灰褐	石英・長石・黄色軽石	
130	縄文土器	深鉢	B3・5層一括	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い裡	褐	角閃石・灰色砂粒	
131	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐	灰褐	白色・茶色砂粒	
132	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	黒褐	黒褐	石英・長石	
133	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ケズリ状ナテ	褐	灰黄褐	石英・長石・黄色軽石	スヌ付着
134	縄文土器	深鉢	B1・5層/B2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い裡	黒褐	石英・長石	久次付着
135	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い裡	灰黄褐	石英・長石	
136	縄文土器	深鉢	B2・4層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い裡	に赤い裡	石英・長石	
137	縄文土器	深鉢	B2・4層	—	—	—	ナテ	ケズリ状ナテ	に赤い黄褐	灰黄褐	石英・長石	
138	縄文土器	深鉢	C2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い赤褐	灰褐	石英・長石・黄色軽石	スヌ付着
139	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い裡	に赤い裡	石英・長石	
140	縄文土器	深鉢	B2・4・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	黒褐	に赤い赤褐	石英・長石	
141	縄文土器	深鉢	C2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐	に赤い裡	石英・長石	
142	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い赤褐	に赤い赤褐	石英・長石	
143	縄文土器	深鉢	C2・4層・4・5層一括	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	石英・長石	スヌ付着
144	縄文土器	深鉢	C2・4層	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐	灰褐	石英・長石・黄色軽石	スヌ付着
145	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	明赤褐	灰黄褐	石英・長石	
146	縄文土器	深鉢	C2・4・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐	灰褐	石英・長石	スヌ付着
147	縄文土器	深鉢	B2・4層	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐	に赤い赤褐	石英・長石	
148	縄文土器	深鉢	C2・4・5層	—	—	—	ナテ	ケズリ状ナテ	に赤い褐	灰褐	石英・長石	スヌ付着
149	縄文土器	深鉢	B2・5層/C2・4・5層一括 X3・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い裡	に赤い黄褐	石英・長石	
150	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い裡	に赤い裡	石英・長石	
151	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ケズリ状ナテ	褐灰	黒褐	石英・長石・黄色軽石	スヌ付着
152	縄文土器	深鉢	B2・5・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い裡	に赤い裡	石英・長石・灰色砂粒	
153	縄文土器	深鉢	C2・4層	—	—	—	ナテ	丁寧なナテ	に赤い裡	に赤い裡	石英・長石	
154	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い赤褐	に赤い赤褐	石英・長石・黄色軽石	
155	縄文土器	深鉢	B2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い裡	灰褐	石英・長石	
156	縄文土器	深鉢	B2・5層/C2・4・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	浅黄褐	に赤い黄褐	石英・長石・灰色砂粒	
157	縄文土器	深鉢	B2・4・5層/C2・4層	—	—	—	ナテ	ナテ	浅黄褐	に赤い黄褐	長石・微細白色粒	

遺物観察表④

遺物 番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量 (cm)			文様・調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面		
158	縄文土器	深鉢	B1 5層	—	—	—	ナテ	ナテ	褐反	に赤い黄柾	石英・長石	
159	縄文土器	深鉢	B1 5層 / B2 5層	—	—	—	ナテ	ナテ・オサエ	浅黄柾	に赤い黄柾	石英・長石・灰色砂粒	
160	縄文土器	深鉢	B2 5層	—	—	—	ナテ	ナテ・磨耗	に赤い柾	に赤い柾	石英・長石	
161	縄文土器	深鉢	B2 5層	—	—	—	ナテ	ナテ・オサエ	黒柾	灰柾	石英・長石・灰色砂粒	スス付着
162	縄文土器	深鉢	B1・2・5層	—	—	—	ナテ	オサエ→ナテ	灰柾	柾	石英・長石	
163	縄文土器	深鉢	B2 5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い黄柾	灰柾	石英・長石・灰色砂粒	
164	縄文土器	深鉢	B1 4・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	明赤柾	に赤い柾	石英・長石・灰色砂粒	
165	縄文土器	深鉢	B1 4層	—	—	—	ナテ	ナテ	浅黄柾	浅黄柾	石英・長石・灰色砂粒	
166	縄文土器	深鉢	C2 4層	—	—	—	丁寧なナテ	ナテ	灰柾	黒柾	石英・長石	
167	縄文土器	深鉢	B2 1層・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い柾	に赤い柾	石英・長石	
168	縄文土器	深鉢	C2 4・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い柾	に赤い黄柾	石英・長石・灰色砂粒	
169	縄文土器	深鉢	B1 4層/B2 1層/C1 5層一括	—	—	—	ナテ	オサエ→ナテ	に赤い黄柾	に赤い柾	長石・灰色砂粒	
170	縄文土器	深鉢	B2 5層/C2 4層	—	—	—	条痕	条痕	に赤い柾	に赤い柾	角閃石	
171	縄文土器	深鉢	C2 4層/C2 4・5層一括	—	—	—	ナテ	ナテ	浅黄柾	浅黄柾	石英・長石・灰色砂粒	
172	縄文土器	深鉢	B2 5層/C2 4層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い柾	に赤い柾	石英・長石	スス付着
173	縄文土器	深鉢	C2 4層	—	—	—	ナテ	ナテ	灰黄柾	に赤い黄柾	長石・黄色軽石	
174	縄文土器	深鉢	C1 4・5層	—	—	—	ナテ	ケズリ状ナテ	に赤い柾	浅黄柾	石英・長石・灰色砂粒	
175	縄文土器	深鉢	C2 5層	—	—	—	条痕	ナテ	に赤い柾	灰黄柾	石英・長石・黄色軽石	
176	縄文土器	深鉢	B2 4層/C2 4・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い柾	に赤い柾	石英・長石・灰色砂粒	スス付着
177	縄文土器	深鉢	B2 4・5層	—	—	—	ナテ	ケズリ状ナテ	に赤い黄柾	に赤い黄柾	石英・長石	
178	縄文土器	深鉢	B2 5層/B4 4層	—	—	—	条痕→ナテ	条痕→ナテ	に赤い黄柾	灰柾	石英・長石	
179	縄文土器	深鉢	B2 5層/C2 4・5層	—	—	—	ナテ	ケズリ状ナテ	に赤い柾	に赤い黄柾	石英・長石・黄色軽石	
180	縄文土器	深鉢	B2 5層	—	—	—	ナテ	ナテ	灰黄柾	に赤い柾	石英・長石・黄色軽石	
181	縄文土器	深鉢	B2 5層/C2 5層	—	—	—	ナテ	条痕→ナテ	に赤い柾	浅黄柾	石英・長石・灰色砂粒	
182	縄文土器	深鉢	B2 5層	—	—	—	ナテ	粗いミカキ	理	明柾	石英・長石	
183	縄文土器	深鉢	C1 5層	—	10.3	—	ナテ	—	に赤い柾	—	長石・石英・灰色砂粒	反転復元
184	縄文土器	深鉢	C1 4層	—	8.5	—	ナテ	ナテ	に赤い柾	灰柾	石英・長石	反転復元
185	縄文土器	深鉢	C2 4層	—	8.8	—	ナテ	ナテ	に赤い黄柾	褐灰	石英・長石・灰色砂粒	反転復元
186	縄文土器	深鉢	試掘 3T	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い柾	灰黄柾	石英・長石	
187	縄文土器	深鉢	B2 5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い柾	に赤い黄柾	長石・石英・灰色砂粒	
188	縄文土器	深鉢	B1 4層/B2 4層+5層一括 C1 4層一括	—	9.4	—	ナテ	ナテ	に赤い黄柾	に赤い黄柾	長石・灰色・黄色砂粒	反転復元・圧痕あり
189	縄文土器	深鉢	B2 5層	—	—	—	ナテ	—	—	—	長石・石英	
190	縄文土器	深鉢	B2 5層一括	—	—	—	ナテ	—	—	—	長石・石英・灰色砂粒	
191	縄文土器	深鉢	B2 5層一括	—	—	—	ナテ	ナテ	灰柾	に赤い赤柾	石英・長石	補修孔あり
192	縄文土器	深鉢	B2 5層	—	7.4	—	ナテ	ナテ	に赤い柾	浅黄	石英・長石・黄色軽石	反転復元
193	縄文土器	深鉢	B2 5層	—	—	—	ナテ	—	理	—	長石・石英	
194	縄文土器	深鉢	C2 5層	—	—	—	ナテ	—	理	—	灰色砂粒	
195	縄文土器	深鉢	C2 5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い黄柾	に赤い黄柾	長石・石英	圧痕あり
196	縄文土器	鉢	C2 4・5層/C2 4・5層一括	—	—	—	ナテ	ミ万キ	理	明赤柾	微細白色粒	スス付着
197	縄文土器	鉢	C2 4・5層	—	—	—	ナテ	ミ万キ	に赤い赤柾	暗赤柾	石英・長石	
198	縄文土器	鉢	B2 5層	—	—	—	ナテ	ミ万キ	暗柾	灰柾	長石・黄色軽石	スス付着
199	縄文土器	鉢	C1 5層	—	—	—	ナテ	ミ万キ	暗柾	灰柾	精緻	
200	縄文土器	鉢	B1 4層	—	—	—	ナテ	ミ万キ	理	明柾	石英・長石	
201	縄文土器	鉢	B2 5層/C2 5層	—	—	—	ナテ	ミ万キ	に赤い柾	に赤い赤柾	石英・長石	スス付着
202	縄文土器	鉢	C2 3・4層一括	—	—	—	ナテ	ミ万キ	赤柾	黒柾	微細白色粒・黄色軽石	
203	縄文土器	鉢	B2 5層	—	—	—	ナテ	ミ万キ	灰柾	に赤い柾	長石・黄色軽石	スス付着
204	縄文土器	鉢	C2 4層	—	—	—	ナテ	ミ万キ	に赤い赤柾	柾	石英・長石	
205	縄文土器	鉢	D2 4層	—	—	—	ナテ	ミ万キ	に赤い赤柾	柾	石英・長石	スス付着
206	縄文土器	鉢	B2 5層	—	—	—	ナテ	ミ万キ	に赤い黄柾	柾	石英・長石	
207	縄文土器	鉢	B2 4・5層	—	—	—	ナテ	ミ万キ	に赤い赤柾	微細白色粒		

遺物觀察表(5)

遺物 番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量 [cm]			文様・調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
208	縄文土器	鉢	B1 4層一括	—	—	—	ナテ	三万キ	理	根	石英・長石	
209	縄文土器	鉢	C2 4層	—	—	—	ナテ	三万キ	に赤い赤褐	明赤褐	石英・角閃石	スス付着
210	縄文土器	鉢	B+C2 5層 / C2 4+5層一括	—	—	—	ナテ	三万キ	明赤褐	褐	石英・長石	スス付着
211	縄文土器	鉢	B2 3層 / C1+2 3層 / C2 4+5層一括	—	—	—	ナテ	三万キ	根	根	石英・長石	
212	縄文土器	鉢	C2 5層	—	—	—	ナテ	三万キ	に赤い褐色	に赤い褐色	微細白色粒	
213	縄文土器	鉢	C2 4+5層	—	—	—	ナテ	三万キ	根	に赤い黄褐	石英・長石・角閃石	
214	縄文土器	鉢	A2 4層 / C2 4層	—	—	—	ナテ	三万キ	根	に赤い赤褐	長石	スス付着
215	縄文土器	鉢	C2 4+5層 / C2 3+4層一括	—	—	—	ナテ	三万キ	に赤い根	に赤い褐色	石英・長石	
216	縄文土器	鉢	C2 4+5層	—	—	—	ナテ	三万キ	に赤い根	に赤い褐色	石英・長石	
217	縄文土器	鉢	B2 3層 / C2 4層	—	—	—	ナテ	三万キ	に赤い褐色	灰褐	微細白色粒・黄色蛭石	スス付着
218	縄文土器	鉢	B2 3層	—	—	—	ナテ	三万キ	灰褐	暗赤褐	長石・黄色蛭石	スス付着
219	縄文土器	鉢	C2 4+5層	—	—	—	ナテ	三万キ	根	褐色	石英・長石	
220	縄文土器	鉢	C2 4+5層	—	—	—	ナテ	三万キ	に赤い根	灰褐	石英・長石	
221	縄文土器	浅鉢	A2 4層 / B1+2 3層 / C2 4+5層	40.8	—	—	三万キ	三万キ	根	灰褐	微細白色粒	反転・同上復元
222	縄文土器	浅鉢	B1 5層	—	—	—	三万キ	三万キ	暗褐	灰褐	微細白色粒	
223	縄文土器	浅鉢	A2 5層	—	—	—	三万キ	三万キ	灰褐	灰褐	微細白色粒	
224	縄文土器	浅鉢	B1 4+5層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	灰褐	根灰	微細白色粒	
225	縄文土器	浅鉢	B4 4層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	灰褐	に赤い根	微細白色粒	
226	縄文土器	浅鉢	B1 5層 / C2 4+5層 / C2 4+5層一括	40.0	—	—	三万キ	三万キ	に赤い黄褐	褐灰	微細白色粒	反転復元・スス付着
227	縄文土器	浅鉢	C2 4+5層 / C2 4+5層一括	35.0	—	—	三万キ	三万キ	に赤い根	に赤い根	微細白色粒	スス付着
228	縄文土器	浅鉢	C2 4層・4+5層一括	23.2	—	—	三万キ	三万キ	に赤い褐色	に赤い褐色	精緻	反転復元
229	縄文土器	浅鉢	B2 4+5層	17.8	—	—	三万キ・塵埃	三万キ	灰褐	褐灰	石英	反転復元・63上同一
230	縄文土器	浅鉢	C1 5層	23.8	—	—	三万キ	三万キ	灰褐	灰黃褐	石英	
231	縄文土器	浅鉢	B2 3層 / C2 5層	23.0	—	—	三万キ	三万キ	根	黑褐	石英	反転復元
232	縄文土器	浅鉢	C2 4層	25.8	—	—	三万キ	三万キ	灰褐	灰褐	石英	反転復元
233	縄文土器	浅鉢	C2 3層	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	石英	
234	縄文土器	浅鉢	C2 3層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	根	に赤い根	石英	
235	縄文土器	浅鉢	B2 5層	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い根	に赤い褐色	微細白色粒	
236	縄文土器	浅鉢	C2 5層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	灰白	灰白	精緻	
237	縄文土器	浅鉢	B2 5層	—	—	—	三万キ	三万キ	胡蘿蔔灰	胡蘿蔔灰	精緻	
238	縄文土器	浅鉢	C2 3+4層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	石英	
239	縄文土器	浅鉢	B2 4+5層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	灰黃褐	灰黃褐	精緻	
240	縄文土器	浅鉢	B2 5層	—	—	—	三万キ	三万キ	灰黃褐	灰黃褐	微細白色粒	
241	縄文土器	浅鉢	C2 3層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	精緻	
242	縄文土器	浅鉢	C2 4+5層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い黄褐	褐灰	精緻	
243	縄文土器	浅鉢	C2 4+5層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い根	に赤い根	精緻	
244	縄文土器	浅鉢	C2 3+4層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	灰褐	に赤い根	精緻	
245	縄文土器	浅鉢	C2 4+5層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	灰黃褐	黑褐	精緻	
246	縄文土器	浅鉢	B2 4層	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い根	に赤い根	精緻	
247	縄文土器	浅鉢	B2 3+4層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い根	に赤い根	精緻	
248	縄文土器	浅鉢	C2 4+5層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	根	に赤い根	精緻	
249	縄文土器	浅鉢	墨一括	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い褐色	灰褐	精緻	
250	縄文土器	浅鉢	西 Tr 3+4層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い根	に赤い根	精緻	
251	縄文土器	浅鉢	C2 4+5層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	微細白色粒	
252	縄文土器	浅鉢	C2 4+5層	—	—	—	三万キ	三万キ	胡蘿蔔灰	胡蘿蔔灰	精緻	
253	縄文土器	浅鉢	B1 5層	—	—	—	三万キ	三万キ	胡蘿蔔灰	灰黃褐	精緻	
254	縄文土器	浅鉢	C2 4+5層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い黄褐	灰白	石英	
255	縄文土器	浅鉢	C2 4+5層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	胡蘿蔔灰	黃灰	微細白色粒	
256	縄文土器	浅鉢	C2 3+4層一括+4+5層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い根	根	石英	
257	縄文土器	浅鉢	C1 5層	—	—	—	三万キ・塵埃	三万キ・塵埃	胡蘿蔔灰	胡蘿蔔灰	精緻	

遺物観察表(6)

遺物 番号	種別	器種	出土場所・地点・層位	法量(cm)			文様・調査		色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
258	縄文土器	浅鉢	C2・4層	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い緑	に赤い緑	砂質白色粒	
259	縄文土器	浅鉢	B2・4層	—	—	—	三万キ	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	微細白色粒	
260	縄文土器	浅鉢	C2・4・5層一括	—	—	—	三万キ	ナテ	裡	に赤い緑	精緻	
261	縄文土器	浅鉢	B2・5層	—	—	—	三万キ	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	石英	
262	弥生土器	甕	SA1・上層	30.0	—	—	ナテ+ハケメ	ナテ	に赤い黄緑	淡黄	石英・長石・灰石・茶色砂粒	中漢式 回上復元 反転復元・スス付着
263	弥生土器	甕	SA1・一括	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い緑	緑	石英・長石・灰石・茶色砂粒	スス付着
264	弥生土器	甕	SA1・上層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い赤緑	緑	石英・長石・茶色砂粒	スス付着
265	弥生土器	甕	SA1・下層	—	—	—	ナテ	ナテ	淡黄緑	に赤い緑	石英・長石・灰石・茶色砂粒	スス付着
266	弥生土器	甕	SA1・上層	—	—	—	ナテ・新潟東南	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石・茶色砂粒	中漢式・久ス付着
267	弥生土器	甕	SA1・上層	—	—	—	ナテ・ハケメ, 羽目突刺	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石・茶色砂粒	中漢式・スス付着
268	弥生土器	甕	SA1・上層・西面一括/B2・1層	31.5	—	—	ナテ・ハケメ, 羽目突刺	ナテ・ハケメ	に赤い赤緑	に赤い緑	石英・長石・茶色砂粒	中漢式・反転復元・スス付着
269	弥生土器	甕	SA1・下層	—	6.5	—	ハケメ	ナテ・ハケメ	に赤い緑	黒褐	石英・長石	反転復元
270	弥生土器	甕	SA1・上層/B2・4層	—	6.5	—	ナテ	ナテ	に赤い緑	黒	石英・長石・灰色砂粒	反転復元
271	弥生土器	甕	SA1・下層/B2・4層	20.8	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石・茶色砂粒	反転復元・スス付着
272	弥生土器	甕	SA1・一括	—	—	—	ナテ・突縁	ナテ	黒褐	黒褐	石英・長石・茶色鉛石	
273	弥生土器	甕	SA1・上層/C2・4層	19.2	—	—	ナテ	ナテ	に赤い赤緑	に赤い赤緑	石英・長石	山ノ口式・反転復元
274	弥生土器	甕	SA1・下層	—	—	—	ナテ	ナテ	褐灰	に赤い緑	石英・長石	山ノ口式・スス付着
275	弥生土器	甕か	SA1・中層	—	7.5	—	ナテ・2.5キ, 剣端	ナテ・施輪	灰褐	に赤い黄緑	灰色・茶色砂粒	山ノ口式・反転復元
276	弥生土器	甕	SA1・上・下層/C2・1・4層一括	—	7.8	—	ハケメ	ナテ	裡	褐	石英・長石・金碧母	山ノ口式・反転復元
277	弥生土器	無頸甕	SA1・上層	23.6	—	—	三万キ	ナテ・ミカキ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石	反転復元
278	弥生土器	大甕	SA1・下層	—	10.9	—	ハケメ	ナテ	裡	褐	石英・長石・茶色砂粒	
279	弥生土器	甕	SA1・下層/C2・4層・3・4層一括 C2・4層	32.5	—	—	ナテ・施輪	ナテ・村落	淡黄緑	淡黄緑	石英・長石・茶色砂粒	
280	弥生土器	甕	SA1・上層	—	—	—	突縁・乳頭・赤彩	剥落	裡	褐	石英・長石	圓錐式 外蓋水印 412 と同一か
281	弥生土器	甕	SA1・上層	—	—	—	突縁	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	長石・茶色砂粒	
282	弥生土器	甕	SA1・下層	—	—	—	突縁	ナテ・村落	に赤い緑	に赤い黄緑	石英・長石	
283	弥生土器	甕か	SA1P4・上層/SA2・下層一括	22.8	—	—	ナテ	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	石英・灰色・茶色砂粒	反転復元
284	弥生土器	甕	SA1・下層	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石・茶色砂粒	
285	弥生土器	甕	SA1・一括/C4・4層	—	—	—	三万キ	三万キ	に赤い緑	に赤い緑	茶色砂粒	
286	弥生土器	甕	SA1・下層/SA5・中層	—	—	—	三万キ・突縁	剥落	に赤い黄緑	に赤い黄緑	石英・長石・茶色砂粒	
287	弥生土器	甕	SA1・下層/SA5・上層 SA5・下層	—	—	—	三万キ	ハケメ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石・茶色砂粒	反転復元
288	弥生土器	甕	SA1・中層	—	5.6	—	三万キ	ナテ	灰黄褐	灰黄褐	石英・長石・灰色砂粒	反転復元
289	弥生土器	甕	SA1・上層	—	7.1	—	施輪	ナテ・ハケメ	黑褐	褐灰	石英・長石	反転復元
290	弥生土器	甕	SA2・上層	23.6	—	—	ナテ	ハケメ	に赤い赤緑	に赤い赤緑	石英・長石・灰色砂粒	反転復元・スス付着
291	弥生土器	甕	SA2・上層	18.8	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ・ハケメ	に赤い緑	に赤い黄緑	灰色砂粒	反転復元・スス付着
292	弥生土器	甕	SA2・中層/SA3・下層	20.0	—	—	ナテ・村落	ナテ	裡	に赤い緑	長石・石英・灰色・茶色砂粒	反転復元
293	弥生土器	甕	SA2・上・中層/C2・4層	25.5	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	長石・石英・灰色・茶色砂粒	反転復元・スス付着
294	弥生土器	甕	SA2・上・中層	18.4	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	茶色砂粒	反転復元
295	弥生土器	甕	SA2・上層・一括	19.0	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ・ハケメ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石・茶色砂粒	反転復元・スス付着
296	弥生土器	甕	SA2・上・中層	18.0	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ・ハケメ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石・灰色砂粒	反転復元・スス付着
297	弥生土器	甕	SA2・上層・一括	24.8	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ・オサエ	裡	に赤い緑	石英・長石・茶色砂粒	反転復元・スス付着
298	弥生土器	甕	SA2・上・下層・一括	—	—	—	ナテ・ハケメ	ハケメ	灰褐	に赤い緑	石英・長石	スス付着 左曲あり 306 上四分之一 299 と同一か
299	弥生土器	甕	SA2・下層/SA3・中層	—	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石	スス付着 左曲あり 306 上四分之一 299 と同一か
300	弥生土器	甕	SA2・中・下層	—	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ・ハケメ	灰褐	に赤い緑	石英・長石	スス付着
301	弥生土器	甕	SA2・上・中層	—	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ・ハケメ	黑褐	に赤い緑	石英・長石	スス付着
302	弥生土器	甕	SA2・上層	—	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ・ハケメ	に赤い緑	に赤い黄緑	灰色砂粒	スス付着
303	弥生土器	甕	SA2・上層	—	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ・オサエ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石・茶色砂粒	スス付着
304	弥生土器	甕	SA2・上層	—	—	—	ナテ・オサエ	ナテ・オサエ	に赤い黄緑	に赤い緑	石英・長石・灰色砂粒	スス付着
305	弥生土器	甕	SA2・下層・一括	—	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石・灰色砂粒	
306	弥生土器	甕	SA2・上層	—	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ	に赤い黄緑	灰黄褐	石英・長石・灰色砂粒	
307	弥生土器	甕	SA2・上・中層	—	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石・灰色砂粒	スス付着
308	弥生土器	甕	SA2・下層	—	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ	裡	裡	石英・長石・灰色砂粒	スス付着

遺物観察表(7)

遺物 番号	種別	器種	出土遺構・地名・層位	法面(cm)			文様・調整		色調		施土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
309	弥生土器	甕	SA2・中層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い黄緑	に赤い黄緑	石英・長石・灰色砂粒	
310	弥生土器	甕	SA2・一括	—	—	—	ナテ・ハケメ	ハケメ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石・灰色砂粒	スヌ付着
311	弥生土器	甕	SA2・上層	—	—	—	ナテ	ナテ	緑	緑	石英・長石	スヌ付着
312	弥生土器	甕	SA2・下層	—	—	—	ナテ	ナテ	浅黄緑	に赤い緑	石英・長石・灰色砂粒	スヌ付着
313	弥生土器	甕	SA2・上層	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐	に赤い赤褐	石英・長石・灰色砂粒	スヌ付着
314	弥生土器	甕	SA2・上・中・下層/B3・4層	—	—	—	ナテ	ナテ	明赤褐	明赤褐	石英・長石・灰色砂粒	圓上復元・スヌ付着
315	弥生土器	甕	SA2・中・下層/B3・4層	—	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ・ハケメ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石・灰色砂粒	中漢式・スヌ付着
316	弥生土器	甕	SA2・上層	—	—	—	ナテ・奈良灰系	ナテ・ハケメ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石・灰色砂粒	中漢式・スヌ付着
317	弥生土器	甕	SA2・上層/SAS・上層	—	—	—	奈良灰系・深軽	ナテ	に赤い黄緑	に赤い黄緑	石英・長石・灰色砂粒	中漢式・スヌ付着
318	弥生土器	甕	SA2・上層	—	—	—	ナテ・奈良灰系	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石・灰色砂粒	中漢式・スヌ付着
319	弥生土器	甕	SA2・中層	—	—	—	ナテ・奈良灰系	ナテ	暗褐色	に赤い緑	石英・長石	中漢式
320	弥生土器	甕	SA2・上・中層	—	7.0	—	ナテ・ハケメ	ナテ・ハケメ	に赤い緑	に赤い緑	長石・灰色砂粒	反転復元
321	弥生土器	甕	SA2・上層	—	7.3	—	ナテ	ナテ	に赤い黄緑	に赤い緑	石英・長石	反転復元・スヌ付着
322	弥生土器	甕か	SA2・一括	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石・灰色砂粒	穿孔あり
323	弥生土器	甕	SA2・一括	—	—	—	ナテ・凹線	ナテ	に赤い赤褐	に赤い赤褐	黒色砂粒	凹線文系
324	弥生土器	甕か	SA2・一括	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い赤褐	に赤い赤褐	長石・金雲母	
325	弥生土器	甕	SA2・上・中・下層/床面・一括 B1・4層	26.8	—	—	ナテ・突堤	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石	山ノ口式・反転復元・スヌ付着
326	弥生土器	甕	SA2・上・中層	20.2	—	—	ナテ・ハケメ	ナテ	に赤い赤褐	に赤い赤褐	石英・長石・金雲母	山ノ口式・反転復元・スヌ付着
327	弥生土器	甕	SA2・上・下・床面/C3・4層	26.8	—	—	ナテ・突堤	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石	山ノ口式・反転復元・スヌ付着
328	弥生土器	甕	SA2・下層	—	—	—	ナテ	ナテ	灰褐	灰褐	石英・長石	山ノ口式・スヌ付着
329	弥生土器	甕	SA2・下層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い緑	に赤い赤褐	金雲母・長石	山ノ口式・スヌ付着
330	弥生土器	甕	SA2・中層	—	—	—	ナテ・突堤	ナテ	褐色	褐色	金雲母・長石	山ノ口式・スヌ付着
331	弥生土器	甕	SA2・上層/C1・4層/C2・5層	26.8	—	—	ナテ	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石	山ノ口式・反転復元・スヌ付着
332	弥生土器	抹頭甕	SA2・上層/B2・4層	24.6	—	—	ミガキ・突堤	ハケメ	に赤い黄緑	に赤い黄緑	石英・灰色砂粒	反転復元
333	弥生土器	抹頭甕	SA2・SC・上層/SA2・一括/ A2・1・4層/B3・3・4層/C2・4層	17.6	—	—	突堤・ミガキ	ミガキ・オサエ	に赤い黄緑	に赤い黄緑	石英・灰色砂粒	反転復元
334	弥生土器	甕	SA2・下層	—	—	—	ミガキ・突堤	ハケメ	灰黃褐	灰黃褐	石英・長石	
335	弥生土器	瓜口甕	SA2・上・下層	24.8	—	—	ハケメ	ミガキ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石・灰色砂粒	反転復元
336	弥生土器	甕	SA2・中層	—	—	—	ミガキ・磨耗	剥落	に赤い緑	浅黄緑	石英・長石・灰色砂粒	
337	弥生土器	甕	SA2・上層/SA4・床面	—	—	—	ミガキ	ナテ・ハケメ	灰褐	黑	石英・長石	圧痕あり
338	弥生土器	甕	SA2・上層	—	5.0	—	ナテ	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石・黑色砂粒	
339	弥生土器	甕	SA2・下層	—	6.6	—	ナテ	ナテ・オサエ	明赤褐	黑	石英・長石	反転復元
340	弥生土器	縁台	SA2・上層	—	24.8	—	ナテ・ハケメ	ハケメ	に赤い緑	に赤い緑	石英・灰色・灰色砂粒	反転復元
341	縄文土器	深鉢	SA2・中層	—	—	—	凸線・ミガキ	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	石英・長石	中岳II式
349	弥生土器	甕	SA3・上層	—	—	—	ナテ・突堤	ナテ・ハケメ	に赤い緑	緑	石英・長石・灰色砂粒	山ノ口式
350	弥生土器	甕	SA3・上層・1括	—	—	—	剥落	ナテ	—	に赤い黄緑	石英・長石・灰色砂粒	山ノ口式
351	弥生土器	ミニチュア 土器	SA3・下層	—	—	—	ナテ・オサエ	ナテ・オサエ	灰黃褐	灰黃褐	白色砂粒	
352	弥生土器	甕	SA3・上層	—	—	—	ナテ	ナテ・ハケメ	に赤い黄緑	に赤い緑	石英・長石・灰色砂粒	スヌ付着
353	弥生土器	甕	SA3・中層	—	—	—	ナテ・突堤	ナテ	灰白	浅黄緑	石英・長石・灰色砂粒	
354	弥生土器	甕	SA3・上層	—	—	—	ナテ・ハケメ	磨耗	に赤い黄緑	に赤い緑	石英・長石・角閃石	
356	弥生土器	甕	SA4・上層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い緑	に赤い緑	長石・灰色砂粒	スヌ付着
357	弥生土器	甕	SA4・上層	—	—	—	ナテ・磨耗	磨耗	に赤い緑	灰白	石英・長石・灰色砂粒	
358	弥生土器	甕	SA4・床面	—	—	—	ナテ	ナテ	浅黄緑	浅黄緑	石英・長石・灰色砂粒	
359	弥生土器	甕	SA4・下層	—	—	—	ミガキ・突堤	ハケメ	に赤い緑	黑	長石・金雲母	
361	縄文土器	深鉢	SAS・床面	—	—	—	ナテ	ナテ	灰黃褐	灰黃褐	石英・長石・灰色砂粒	
362	縄文土器	深鉢	SAS・下層	—	—	—	ナテ	ナテ	機	に赤い緑	石英・長石・灰色砂粒	
363	縄文土器	深鉢	SAS・床面	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い赤褐	灰黃褐	微細白色粒	
364	縄文土器	深鉢	SAS・上層/C2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	に赤い黄緑	浅黄緑	石英・長石	
365	縄文土器	深鉢	SAS・上層・C2・5層	—	—	—	ナテ	ナテ	ナスリ模の子子	灰褐	微細白色粒	久文付着
366	縄文土器	深鉢	SAS・床面・上層	—	—	—	ミガキ	に赤い緑	に赤い緑	微細白色粒		
367	弥生土器	甕	SAS・上層・1括/C2・5層	22.4	—	—	ナテ・オサエ	ナテ・オサエ	に赤い黄緑	浅黄緑	石英・長石・灰色砂粒	反転復元・スヌ付着

遺物観察表(8)

遺物 番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量 (cm)			文様・調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面		
368	弥生土器	壺	SA5 上層 /B3-4層	-	-	-	磨耗	磨耗	灰白	灰白	石英・長石・灰色砂粒	
371	弥生土器	壺	C5-4層	-	-	-	ナテ・ハケメ	ナテ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	灰色砂粒・黄色砂粒	
372	弥生土器	壺	B3-4層	-	-	-	ナテ	ハケメ	に赤い褐	に赤い黄褐	灰色・紫色砂粒	
373	弥生土器	壺	B3-3・4層一括	-	-	-	磨耗	ナテ	に赤い褐	に赤い褐	石英・長石	
374	弥生土器	壺	D1-3層	-	-	-	磨耗	磨耗	に赤い黄褐	に赤い黄褐	灰色・茶色砂粒	
375	弥生土器	壺	C4-4層	-	-	-	磨耗	磨耗	褐	褐	石英・長石・灰色砂粒	
376	弥生土器	壺	D2-3層	-	-	-	ナテ	ナテ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	石英・黑色砂粒	
377	弥生土器	壺	C4-4層	-	-	-	ナテ・ハケメ	ナテ	に赤い褐	に赤い褐	石英・灰色・茶色砂粒	
378	弥生土器	壺	D2-4層	-	-	-	ナテ	ナテ	に赤い黄褐	に赤い褐	石英・灰色砂粒	スス付着
379	弥生土器	壺	C4-3層	-	-	-	ナテ	ナテ	褐	褐	石英・長石	
380	弥生土器	壺	B2-4層	-	-	-	ナテ	ナテ	黒褐	に赤い赤褐	長石・茶色砂粒	
381	弥生土器	壺	C3-4層	-	-	-	ナテ	ナテ	灰黃褐	に赤い黄褐	石英・長石	
382	弥生土器	縁か	D2-3層一括	-	-	-	ナテ	ナテ	明赤褐	に赤い褐	石英・長石	スス付着
383	弥生土器	縁か	C1-4層	-	-	-	ナテ	ナテ	に赤い褐	明赤褐	石英・長石	
384	弥生土器	壺	D1-3層	-	-	-	ハケメ・斜肩突起	ナテ	浅黄褐	浅黄褐	石英・灰色・茶色砂粒	中溝式
385	弥生土器	壺	C3-4層	-	-	-	ハケメ・斜肩突起	ハケメ	に赤い褐	灰褐	石英・長石	中溝式
386	弥生土器	壺	B5-4層	-	-	-	ナテ	ナテ	褐	褐	石英・長石・金雲母	山ノ口式
387	弥生土器	壺	B2-1層	-	-	-	ナテ	ナテ	明赤褐	明褐	石英・長石	山ノ口式
388	弥生土器	壺	壁一括	-	-	-	ナテ	ナテ	灰黃褐	に赤い黄褐	石英・長石	山ノ口式・スス付着
389	弥生土器	壺	B5-4層	-	-	-	ナテ	ナテ	黒褐	に赤い褐	石英・長石・金雲母	山ノ口式・スス付着
390	弥生土器	壺	B3-4層	-	-	-	ナテ	ナテ	に赤い褐	黒褐	長石・金雲母	山ノ口式・スス付着
391	弥生土器	壺	C2-4層	-	-	-	ナテ	ナテ	に赤い褐	明赤褐	石英・長石・金雲母	山ノ口式
392	弥生土器	壺	B5-4層	-	-	-	ナテ	ナテ	に赤い褐	褐	石英・長石	山ノ口式
393	弥生土器	壺	B4-3・4層一括	-	-	-	ナテ	ナテ	に赤い褐	に赤い褐	石英・長石	山ノ口式
394	弥生土器	壺	C4-4層	-	-	-	ナテ・突帯	ナテ	に赤い赤褐	褐	石英・長石・金雲母	山ノ口式
395	弥生土器	壺	B4-3層	-	-	-	ナテ・突帯	剥落	に赤い赤褐	赤褐	石英・長石・黄色砂粒	山ノ口式
396	弥生土器	壺	C2-4層	-	-	-	ナテ・突帯	ナテ	に赤い褐	褐	石英・長石・金雲母	山ノ口式
397	弥生土器	壺	B4-4層	-	-	-	ナテ・突帯	ナテ	に赤い赤褐	に赤い赤褐	石英・長石・金雲母	山ノ口式・スス付着
398	弥生土器	壺	C4-3層	-	-	-	ナテ・突帯	ナテ	に赤い褐	褐	石英・長石・金雲母	山ノ口式
399	弥生土器	壺	D1-1層	-	-	-	ナテ	ナテ	に赤い赤褐	に赤い赤褐	石英	スス付着・圧痕あり
400	弥生土器	壺	C2-4層・S-3・4層一括/C3-4層	-	7.2	-	ナテ・磨耗	ナテ	に赤い褐	に赤い黄褐	石英・長石・灰色砂粒	反転復元
401	弥生土器	壺	C2-4層	-	6.0	-	ナテ	ナテ・オサエ	に赤い褐	に赤い褐	石英・長石	反転復元
402	弥生土器	壺	B2-4層	-	8.2	-	ナテ	剥落	に赤い褐	-	石英・黒色・灰色砂粒	反転復元
403	弥生土器	壺	B3-1層/C3-3・4層	-	7.6	-	ナテ	ナテ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	石英・長石・灰色砂粒	
404	弥生土器	壺	C2-3・4層	-	6.9	-	ナテ	ナテ	灰黃褐	灰黃褐	石英・長石・灰色砂粒	反転復元
405	弥生土器	壺	D2-4層	-	-	-	ハケメ	ナテ	に赤い褐	に赤い褐	石英・長石・灰色砂粒	反転復元
406	弥生土器	帶領蓋	B2-3・4層/C2-4層	24.6	-	-	三万キ	ハケメ	浅黄褐	浅黄褐	石英・長石・黑色砂粒	反転復元
407	弥生土器	無領蓋	C4-4層	16.2	-	-	三万キ・ハケメ	ナテ・三万キ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	奥色・灰色砂粒	反転復元
408	弥生土器	壺	B2-4層	14.2	-	-	ナテ・突帯	ナテ・磨耗	灰褐	黑褐	石英・長石・黄色砂粒	反転復元
409	弥生土器	壺	B2-3・4層	-	-	-	ナテ・突帯	剥落	に赤い黄褐	に赤い黄褐	灰色・茶色砂粒	
410	弥生土器	壺	D1-4層	-	-	-	突帯	ナテ	に赤い黄褐	に赤い褐	石英・長石・茶色砂粒	
411	弥生土器	壺	D2-4層	27.0	-	-	三万キ・円形浮文	三万キ	に赤い赤褐	に赤い赤褐	茶色砂粒	反転復元
412	弥生土器	壺	C2-4層	-	-	-	突帯・剥落・赤彩	剥落・赤彩	褐	褐	石英・長石	球形丸・内外面赤茶 280上羽一か
413	弥生土器	壺	D2-4層	-	-	-	ナテ・赤彩	ナテ・赤彩	褐	褐	石英・長石・茶色砂粒	
414	弥生土器	壺	B2-4層/C2-4層	-	-	-	磨耗	磨耗	浅黄褐	浅黄褐	角閃石・灰色・茶色砂粒	
415	弥生土器	壺	B3-1層	-	-	-	ナテ	ナテ	に赤い褐	浅黄褐	石英・灰色・茶色砂粒	
416	弥生土器	壺	D2-4層/C2-3層一括	-	-	-	三万キ	ナテ	明赤褐	に赤い褐	茶色砂粒	
417	弥生土器	壺	C2-4層	-	-	-	沈線・ナテ	ナテ	に赤い赤褐	に赤い赤褐	石英・長石・灰色砂粒	凹縞文系か
418	弥生土器	壺	C2-4層	-	6.0	-	三万キ	ナテ	に赤い褐	剥落	石英・長石・茶色砂粒	反転復元
419	弥生土器	壺か	B2-4層	-	-	-	斜肩突起・筋目	磨耗	浅黄褐	浅黄褐	灰色・茶色砂粒	

遺物観察表⑨

遺物 番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量 (cm)		文様・調整		色調		胎土	備考	
				口径	底径	基部	外面	内面	外面	内面		
420	弥生土器	台付鉢か	D1 4層	—	—	—	ナテ・三万キ	ハケメ	にぶい褐色	褐赤褐色	石英・長石・含雲母	
421	弥生土器	壺	B2 4層	—	8.4	—	三万キ	三万キ	褐	褐灰	石英・長石・灰色・褐色鉱物	反転復元
422	土師器	壺	S81P2 中層	14.4	—	—	回転ナテ	回転ナテ	にぶい褐色	にぶい褐色	鐵錫黑色粒	スヌ付着 反転復元
423	土師器	壺	S81P2 一筋	—	—	—	回転ナテ	回転ナテ	灰褐色	灰褐色	鐵錫	
424	弥生土器	大甌か	S81P4 上層	—	—	—	ナテ	ナテ	にぶい褐色	—	石英・長石・灰色・褐色鉱物	大甌の突堤部か
425	土師器	壺	P2 中・下層 /D1 3層 /D2 3層	14.4	—	—	回転ナテ	回転ナテ	灰褐色	にぶい褐色	鐵錫黑色粒	反転復元
426	白磁	壺	SC1 上層	11.2	—	—	施錫	施錫	弱オーブ底	弱オーブ底	精緻	田V類 買入あり 反転復元
427	土師器	小壺	SC1 下層・床面	8.8	6.8	1.6	回転ナテ	回転ナテ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	精緻	ヘラ切り 反転復元
428	白磁	壺	D1 3層	—	—	—	施錫	施錫	灰白色	灰白色	鐵錫黑色粒	細IV類
429	白磁	壺	C2 3層	—	—	—	施錫	施錫	灰白色	淡黄色	鐵錫黑色粒	細IV類
430	白磁	壺	D2 3層	—	—	—	施錫	施錫	灰白色	灰白色	鐵錫黑色粒	細IV類
431	白磁	壺	B2 3層	—	—	—	施錫	施錫	灰白色	灰白色	鐵錫黑色粒	細IV類
432	白磁	壺	B2 1層	—	4.8	—	施錫・露胎	施錫	淡黄色	淡黄色	鐵錫黑色粒	細II類 化粧土あり
433	土師器	壺	C2 3層	15.8	—	—	回転ナテ	回転ナテ	にぶい褐色	にぶい褐色	鐵錫黑色粒	反転復元
434	土師器	壺	D1 3層 /D2 3層	16.0	—	—	回転ナテ	回転ナテ	にぶい褐色	にぶい褐色	鐵錫黑色粒	反転復元
435	土師器	壺	32 4層一括 /D2 3層一括 / 南東Tr 3・4層一括	15.8	—	—	回転ナテ	回転ナテ	にぶい褐色	にぶい褐色	鐵錫黑色粒	反転復元
436	土師器	壺	C2 3層	16.4	—	—	回転ナテ	回転ナテ	褐	褐	精緻	反転復元
437	土師器	壺	C1 3層 /C2 3層	—	—	—	回転ナテ	回転ナテ	褐	褐	鐵錫黑色粒	
438	土師器	壺	B2 1・4層一括	—	8.8	—	回転ナテ	回転ナテ	にぶい褐色	にぶい褐色	精緻	ヘラ切り 反転復元
439	土師器	壺	D2 1層	—	8.8	—	回転ナテ	回転ナテ	灰褐色	褐褐色	精緻	ヘラ切り 反転復元
440	土師器	壺	B2 1・4層一括 /C1 3層	—	8.7	—	回転ナテ	回転ナテ	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	精緻	ヘラ切り 板状压痕 反転復元
441	土師器	壺	C4 3層	—	10.0	—	回転ナテ	回転ナテ	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	精緻	ヘラ切り 反転復元
442	土師器	壺	84 3層	—	9.2	—	回転ナテ	回転ナテ	にぶい褐色	にぶい褐色	精緻	糸切り 反転復元
443	土師器	壺	D2 3層	—	9.0	—	回転ナテ	回転ナテ	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	赤褐色粒	糸切り 反転復元
444	土師器	小壺	D1 4層	9.8	7.8	1.2	回転ナテ	回転ナテ	にぶい黃褐色	灰黃褐色	赤褐色粒	糸切り 反転復元
445	土師器	小壺	C1 3層 /C2 3層 /D2 3層	—	7.0	—	回転ナテ	回転ナテ	褐	褐	精緻	ヘラ切り 反転復元
446	土師器	小壺	C5 3層	—	9.0	7.2	1.4	回転ナテ	回転ナテ	にぶい褐色	にぶい褐色	糸切り 反転復元
447	土師器	小壺	D1 3層	—	8.6	8.8	1.3	回転ナテ	回転ナテ	灰褐色	精緻	糸切り 反転復元
448	土師器	小壺	D2 3層一括	—	7.0	—	回転ナテ	回転ナテ	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	精緻	ヘラ切り 反転復元
449	土師器	小壺	北Tr 3・4層一括	10.4	—	—	回転ナテ	回転ナテ	にぶい褐色	にぶい褐色	精緻	反転復元
450	土師器	小壺	C2 3層 /D2 3層	10.2	—	—	回転ナテ	回転ナテ	褐	褐	精緻	反転復元
501	土師器	小壺	B4 1・4層一括	—	—	—	回転ナテ	回転ナテ	にぶい褐色	にぶい褐色	精緻	ヘラ切りか
502	土師器	小壺	D2 1層	—	6.4	—	回転ナテ	回転ナテ	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	赤褐色粒	糸切り 反転復元
503	土師器 (三万キ柄)	高台付壺	C3 3層一括 /地Tr 3・4層一括 / 4層一括	18.2	—	—	三万キ	三万キ	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	鐵錫黑色粒	反転復元
504	土師器 (三万キ柄)	高台付壺	B4 1層	—	—	—	三万キ	三万キ	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	精緻	
505	土師器 (三万キ柄)	高台付壺	D2 3層一括	—	—	—	三万キ	三万キ	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	鐵錫黑色粒	
506	土師器 (黒色土器B)	高台付壺	D1 3層	—	17.8	—	三万キ	三万キ	灰褐色	黑褐色	精緻	反転復元
507	土師器 (黒色土器B)	高台付壺	C2 3層	—	—	—	三万キ	三万キ	黑褐色	黑褐色	精緻	
508	土師器 (三万キ柄)	高台付壺	B3 1・4層一括	—	—	—	磨耗	磨耗	にぶい褐色	にぶい褐色	精緻	
509	土師器	壺	B4 3層	—	—	—	ナテ	ナテ・ケズリ	にぶい褐色	にぶい褐色	石英・長石・灰色鉱物	
510	土師器	壺	B3 1・4層一括 /B4 3層	—	—	—	ナテ	ナテ・ケズリ	にぶい褐色	にぶい褐色	灰色鉱物	
511	土師器	壺	B3 1層	—	—	—	ナテ	ナテ・ケズリ	にぶい褐色	にぶい褐色	石英・長石・茶色鉱物	
512	土師器	壺	北Tr 1・4層一括	—	—	—	ナテ	ナテ	褐灰	にぶい褐色	石英・長石・灰色鉱物	

遺物観察表(10)

遺物番号	種別・器種	出土場所・地点・層位	法量(cm)				地土・石材	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
67	打製石器	SC5 上層	2.0	1.6	0.35	0.9	チャート	
68	石器未製品	SC5 上層	2.5	2.5	0.3	2.0	頁岩	
69	スクレイパー	SC5 上層	3.4	2.0	0.9	8.4	チャート	
70	不明	SC5 下層	2.7	1.6	1.1	4.5	チャート	
71	横刃型石器	SC5 上層	2.7	5.0	0.6	8.8	頁岩	
72	横刃型石器	SC5 下層	4.2	7.3	0.5	15.4	頁岩	微細剥離あり 有機物馳化する
73	石斧	SC5 中層/B2 5層	(20.4)	(23.6)	(12.3)	(4400.0)	輝石安山岩	
290	粗製刮削石器	SA1 中層	8.2	14.0	2.3	170.2	輝石安山岩	
342	磨製石器	SA2 中層	2.2	1.2	0.25	0.9	頁岩	
343	磨製石器	SA2 下層	3.0	1.8	0.15	0.7	頁岩	
344	磨製石器	SA2 一括	1.8	1.0	0.2	0.3	頁岩	
345	磨擦石	SA2SC 上層	25.8	9.4	7.8	2900.0	砂岩	
346	石皿	SA2 上・中層	(17.0)	(11.8)	(2.8)	(775.0)	砂岩	
347	粗製刮削石器	SA2 下層	11.9	18.1	4.7	955.0	輝石安山岩	
348	粗製刮削石器	SA2 上層/C3 4層	(22.7)	(23.6)	(2.5)	(1498.0)	輝石安山岩	
355	磨製石器	SA3 下層	3.9	2.3	0.2	2.4	頁岩	
360	磨製石器	SA4 丸道	2.3	1.9	0.15	0.8	頁岩	
369	磨製石器未製品	SA5 上層	2.3	1.8	0.2	1.1	頁岩	研磨あり
370	磨製石器未製品	SA5 上層	3.2	1.8	0.4	2.5	頁岩	全体的にやや摩滅
422	打製石器	B2 3層	2.35	2.05	0.3	1.0	頁岩	
423	磨製石器	B2 4層	3.7	1.9	0.2	2.3	頁岩	
424	磨製石器	C1 4層	1.9	2.2	0.2	1.1	頁岩	
425	磨製石器	B2 4層	3.0	1.5	0.25	1.2	頁岩	
426	磨製石器	C2 4層	2.0	1.8	0.2	0.8	頁岩	
427	磨製石器	B3 3・4層一括	2.6	2.7	0.2	2.7	頁岩	
428	磨製石器未製品	C4 4層	1.4	1.6	0.15	0.5	頁岩	研磨あり
429	磨製石器未製品	B1 4層	1.4	1.6	0.2	0.4	頁岩	研磨あり
430	磨製石器未製品	D2 4層	3.9	2.7	0.6	6.1	頁岩	
431	磨製石器未製品	C2 3層	3.3	2.2	0.3	2.5	頁岩	研磨あり
432	磨製石器未製品	B2 5層	4.1	2.6	0.5	4.2	頁岩	研磨あり
433	磨製石器未製品	B2 5層	2.3	2.1	0.3	1.8	頁岩	研磨あり
434	磨製石器未製品	C2 4層	3.6	2.0	0.5	3.4	ホルンフェルス	研磨あり
435	磨製石器未製品	C4 3層	4.2	3.4	0.25	10.5	頁岩	
436	磨製石器未製品	C4 4層	2.1	1.9	0.3	1.5	頁岩	研磨あり
437	磨製石器未製品	B2 4層	3.2	2.5	0.2	2.1	頁岩	
438	加工痕のある剥片	C2 5層	4.0	2.0	0.6	3.8	安山岩か	
439	使用痕のある剥片	C1 4層	5.0	3.6	1.2	20.7	チャート	微細剥離あり
440	石鉗	C1 4層	3.1	5.2	1.4	15.0	チャート	
441	使用痕のある剥片	C1 4層	4.9	2.2	0.6	8.5	チャート	微細剥離あり
442	加工痕のある剥片	B2 4層	2.3	1.4	0.9	2.8	チャート	
443	使用痕のある剥片	C2 4層	1.15	1.05	0.25	0.1	黒曜石	微細剥離あり
444	使用痕のある剥片	C1 4層	1.6	1.4	0.2	0.5	黒曜石	強烈剥離あり
445	使用痕のある剥片	C1 5層	2.2	1.5	0.9	3.0	チャート	
446	石核	B2 4層	1.5	4.8	1.1	8.0	黒曜石	
447	石核	C2 5層	1.65	2.15	1.2	5.0	チャート	
448	剥片	B2 5層	1.7	2.6	0.6	3.6	黒曜石	
449	剥片	B1 5層	3.5	3.3	0.3	3.9	頁岩	磨製石器or横刃型石器の可能性あり
450	磨製石斧	B1 5層	8.5	4.7	1.7	102.0	ホルンフェルス	敲打による溝あり
451	打製石斧	D2 4層	(8.3)	(4.05)	(1.6)	54.6	ホルンフェルス	刃部折損
452	横刃型石器	C1 5層	3.9	7.0	0.6	19.4	頁岩	

遺物観察表(11)

遺物番号	種別・器種	出土場所・地点・層位	法量(cm)				地土・石材	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
453	横刃型石器	C1・4層	3.8	9.8	1.0	32.3	頁岩	
454	横刃型石器	B1・5層	3.9	5.1	0.75	16.0	頁岩	
455	横刃型石器か	B2・5層	6.1	7.4	1.9	67.3	ホルンフェルス	
456	横刃型石器か	C2・5層	3.8	3.6	0.65	10.5	頁岩	
457	横刃型石器か	B2・4層	3.4	5.6	0.55	16.3	ホルンフェルス	
458	スクレイパー	B2・5層	3.6	6.3	1.3	52.0	砂岩	
459	スクレイパー	B1・5層	5.5	2.9	0.5	7.5	ホルンフェルス	
460	スクレイパー	C1・4層	2.6	3.1	1.0	10.0	チャート	
461	粗製剥片石器	B2・5層	6.8	7.3	1.4	78.0	ホルンフェルス	
462	粗製剥片石器	C1・5層	5.0	6.7	0.5	32.0	ホルンフェルス	一部磨耗する
463	砾石	B2・4層	(7.3)	[10.7]	15.8	(675.0)	砂岩	
464	磨擦石	B2・5層一括	(5.9)	(3.2)	(2.8)	(103.0)	砂岩	
465	磨擦石	B1・5層	(11.3)	(8.2)	15.4	(505.0)	砂岩	
466	石皿	B2・3層	(9.0)	(8.2)	4.9	(338.0)	砂岩	
467	砾石	C1・5層	3.9	3.1	2.4	34.0	砂岩	
468	砾石	B1・4層	5.0	4.2	2.5	75.0	砂岩	
469	砾石	D2・3層	(8.2)	(5.5)	(2.4)	(149.0)	砂岩	
470	砾石	C2・4層	17.9	13.1	7.3	2040.0	砂岩	
478	砾石	SC1・床面/D2・3層	(7.8)	(4.5)	(3.4)	220.0	砂岩	
513	滑石製石錐	C2・3層	—	—	—	—	滑石	穿孔・墨跡あり
514	滑石製品	D2・3層	(3.0)	(5.2)	(1.5)	(31.7)	滑石	石綿軸用品か
515	滑石製品	C1・3層	(3.7)	(3.7)	(1.0)	(21.3)	滑石	石綿軸用品か穿孔・墨跡あり
516	刀子	C4・3層	(6.0)	(1.8)	(0.3)	(10.0)	—	
517	刀子	C2・3層	(3.1)	(2.2)	(0.2)	(7.0)	—	
518	鉄滓	D1・3層	4.7	3.1	3.1	43.0	—	
519	鉄滓	D2・3層	4.4	5.2	3.4	82.0	—	
520	鉄滓	C2・3層	3.8	2.6	1.3	15.0	—	
521	鉄滓	D2・3層	2.7	2.6	2.4	24.0	—	
522	鉄滓	D2・3層	3.5	3.0	2.0	28.0	—	
523	鉄滓	C4・3層	3.1	2.6	1.7	18.0	—	
524	鉄滓	D1・3層	2.6	2.2	1.6	9.0	—	
525	鉄滓	B3・3層	2.6	2.4	1.9	16.0	—	
526	鉄滓	C2・3層	4.5	2.1	1.7	22.0	—	
527	滑石製品	D2・3層	(17.8)	(14.0)	(10.9)	(920.0)	絆石	

第4章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第1節 上針谷・下針谷遺跡における放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

2. 試料と方法

次表に、試料の採取箇所、種類、前処理・調整法および測定法を示す。

試料名	採取箇所	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	土器付着炭化物 (報告書番号 53)	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

3. 測定結果

加速器質量分析法 (AMS : Accelerator Mass Spectrometry) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および曆年代 (較正年代) を算出した。次表にこれらの結果を示す。

試料名	測定No. (Beta-)	未補正 ^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年BP)	曆年代 (較正年代) $2\sigma:95\%$ 確率
No. 1	391962	2930±30	-25.1	2930±30	Cal BC 1220~1020

BP : Before Physics, Cal : Calibrated, BC : 紀元前

(1) 未補正 ^{14}C 年代

試料の $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,730年であるが、国際的慣例により Libby の5,568年を用いている。

(2) デルタ $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(3) ^{14}C 年代

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。曆年代較正にはこの年代値を使用する。

(4) 曆年代 (Calendar Years)

^{14}C 年代値を実際の年代値 (曆年代) に近づけるには、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動、および ^{14}C の半減期の違いを較正する必要がある。曆年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値、サンゴの U/Th 年代と ^{14}C 年代の比較、および湖の縞状堆積物の検討などにより作成された較正曲線 (IntCal 13) を使用した。曆年代は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した年代の幅を表し、ここでは信頼限界 2 シグマ σ (95% 確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。

4. 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No.1の土器付着炭化物では 2930 ± 30 年BP(2 σ の暦年代でBC 1220~1020年)の年代値が得られた。

文献

Paula J Reimer et al., (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, p. 1869–1887.

中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正、環境考古学マニュアル、同成社、p. 301–322。

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12 = -25.1 ‰; lab. mult = 1)

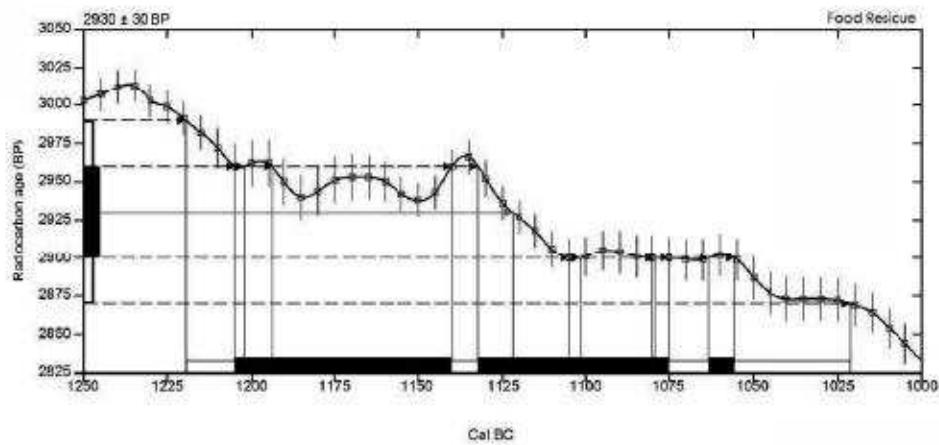
Laboratory number Beta-391962

Conventional radiocarbon age 2930 ± 30 BP

2 Sigma calibrated result
95% probability Cal BC 1220 to 1020 (Cal BP 3170 to 2970)

Intercept of radiocarbon age with calibration curve Cal BC 1120 (Cal BP 3070)

1 Sigma calibrated results
68% probability Cal BC 1205 to 1140 (Cal BP 3155 to 3090)
Cal BC 1130 to 1075 (Cal BP 3080 to 3025)
Cal BC 1065 to 1055 (Cal BP 3015 to 3005)



Database used INTCAL13

References

Mathematics used for calibration scenario:
A Simplified Approach to Calibrating GM Dates; Palma, R. S.; Vogel, J. U.; 1993. Radiocarbon 35(2):317-322

References to INTCAL13 database

Reimer P.J. et al. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4):1869–1887.

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305) 667-5167 • Fax: (305) 663-0964 • Email: beta@radiocarbon.com

第56図 暦年較正結果

第2節 上針谷・下針谷遺跡における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

2. 試料

分析試料は、C 3 グリッドのIII層～VI層から採取された計 7 点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1 g に対し直徑約 40 μm のガラスピーズを約 0.02 g 添加（0.1 mg の精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6 時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散
- 5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山, 2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

（1）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第 1 表および第 57 図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族 A（チガヤ属など）、ウシクサ族 B（大型）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

その他

（2）植物珪酸体の検出状況

下位のVI層（試料7）からIV層（試料4、5）にかけては、ネザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、ウシクサ族B、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、および樹木（その他）なども認められた。III層（試料1～3）では、ネザサ節型、メダケ節型、ススキ属型が増加し、イネ、マダケ属型が出現している。イネの密度は600～700個/gと低い値であり、稻作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。なお、畑稲作（陸稲栽培）の場合は、連作障害や地力の低下を避けるために輪作を行ったり休閑期間をおく必要があるため、イネの密度は1,000～2,000個/g程度と比較的低い場合が多い（杉山, 2000）。なお、ムギ類やヒエ属などのイネ科栽培植物に由来する植物珪酸体は、いずれの試料からも検出されなかった。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねネザサ節型が優勢であり、III層ではメダケ節型やススキ属型も多くなっている。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

霧島御池テフラ（Kr-M, 約4,600年前）混のVI層から弥生時代中期とされるIV層にかけては、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などの竹笹類を主体としてススキ属やチガヤ属、キビ族なども生育する日当たりの良い草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺には何らかの樹木が分布していたと推定される。

これらのイネ科植物は陽当たりの悪い林床では生育が困難であり、ススキ属やチガヤ属の草原が維持されるためには定期的な刈り取りや火入れ（焼き払い）が必要である（堀田, 1991, 近藤, 1995）。このことから、当時は何らかの目的で火入れなど人間による植生干渉が行われていた可能性が考えられる。また、このような草原的な植生環境下で土壤中に多量の有機物が供給され、炭素含量の高い黒色土壌（黒ボク土）が形成されたと推定される（杉山ほか, 2002）。

桜島文明軽石（Sz-3, 1471年）直下で中世～古代とされるIII層では、少量ながらイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。遺跡の立地や周辺の植生などから、ここで行われた稲作は畑作の系統（陸稲）であった可能性が考えられる。同層の堆積当時は、IV層～VI層と同様の草原的な環境であったと考えられるが、メダケ属やススキ属が増加し、マダケ属も見られるようになったと考えられる。マダケ属には、マダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高い。

文献

- 近藤鉢三（1995）日本における植物珪酸体研究とその応用。近堂祐弘教授退官記念論文集刊行会：p. 31-56.
- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケアシ科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—。考古学と自然科学, 19, p. 69-84.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社, p. 189-213.
- 杉山真二・渡邊眞紀子・山元希里（2002）最終氷期以降の九州南部における黒ボク土発達史。第四紀研究, 41(5), p. 361-373.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p. 15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学, 17, p. 73-85.
- 堀田満（1991）日本列島の植物、カラー自然ガイドII。保育社：p. 68-69.

第1表 上針谷・下針谷遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

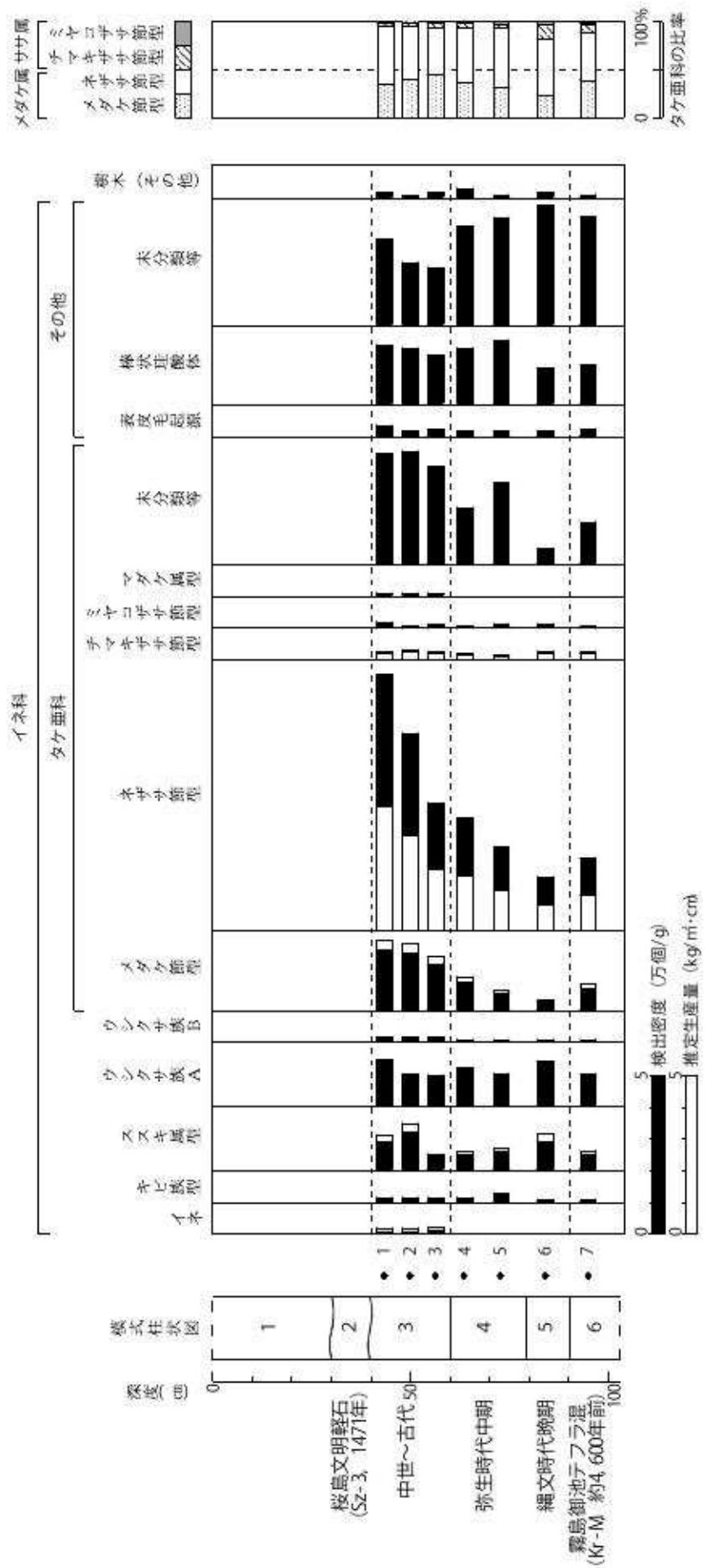
分類群	学名	地点・試料		C 3 グリッド				
		1	2	3	4	5	6	7
イネ科	Gramineae							
イネ	<i>Oryza sativa</i>	6	6	7				
キビ族型	Paniceae type	13	13	13	14	28	7	7
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	90	120	40	47	55	91	48
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	147	101	100	122	104	140	103
ウシクサ族B	Andropogoneae B type	13	13	13	7	7	7	7
タケ亜科	Bambusoideae							
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	198	190	153	95	55	28	75
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	826	638	413	365	270	174	233
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	26	32	27	20	14	28	27
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	19	6	13	7	14	14	7
マダケ属型	<i>Phyllostachys</i>	6	6	7				
未分類等	Others	346	354	306	176	256	49	130
その他のイネ科	Others							
表皮毛起源	Husk hair origin	32	13	20	14	14	14	21
棒状珪酸体	Rod-shaped	186	177	153	176	201	112	123
未分類等	Others	269	196	180	311	339	377	342
樹木起源	Arboreal							
その他	Others	13	6	13	27	7	14	7
植物珪酸体総数	Total	2189	1871	1458	1379	1365	1053	1129

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m³・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.19	0.19	0.20				
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	1.11	1.49	0.50	0.59	0.69	1.12	0.59
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	2.30	2.20	1.78	1.10	0.64	0.32	0.87
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	3.96	3.06	1.98	1.75	1.30	0.84	1.12
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.19	0.24	0.20	0.15	0.10	0.21	0.21
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.06	0.02	0.04	0.02	0.04	0.04	0.02

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	35	40	44	36	31	23	39
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	61	56	50	58	62	59	50
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	3	4	5	5	5	15	9
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	1	0	1	1	2	3	1
メダケ率	Medake ratio	96	95	94	94	93	82	90



第57図 上針谷・下針谷遺跡における植物珪酸体分析結果

上針谷・下針谷遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）



— 50 μ m —

第3節 上針谷・下針谷遺跡におけるリン・カルシウム分析

1. はじめに

土壤中に含まれるリンやカルシウムの起源としては、土壤の母材、動物遺体、植物遺体などがあり、遺跡の生活面や遺構内には遺体、排泄物、代謝物、食物残渣、燃料灰などに由来するリンやカルシウムが蓄積している。人骨など動物の骨はリン酸カルシウムが主成分であるが、貝殻や石灰石は炭酸カルシウムが主成分であり、リンはほとんど含まれていない。カルシウムは一般に水に溶解しやすいが、リンは土壤中の鉄やアルミニウムと強く結合して難溶性の化合物となるため、土壤中における保存性が高い（竹追、1993）。このようなリンやカルシウムの性質を利用して、墓状遺構などにおける生物遺体（人骨など）の確認および生活面や遺構面の確認などが試みられている。

2. 試料

分析試料は、SC5 の内部から採取されたNo.2（①層 - 上層）、No.3（④層 - 下層）、No.4（床面白色粘土）および比較試料として採取されたNo.1（B1 区 V 層）の計 4 点である。試料の詳細を第 58 図に示す。

3. 分析方法

X線分析顕微鏡（XGT-5000）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP 法）による定量分析を行った。試料の処理法は次のとおりである。

- 1) 試料を絶乾（105°C + 24 時間）
- 2) 試料を粉碎して塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力 20t/cm² でプレスして綫剤試料を作成
- 3) 測定時間 500 秒、照射径 100 μm、電圧 50kV、試料室内真空の条件で測定

今回の分析では、まず元素マッピング分析による元素の分布図からリン（P）の輝度の高い箇所を選び、各試料ごとに 5 ポイント（a～e）についてポイント分析を行った。

4. 分析結果

各元素の定量分析結果（wt%）を第 2 表に示し、リン（P₂O₅）とカルシウム（CaO）の含量を第 58 図に示す。定量分析結果は、慣例により代表的な酸化物名で表記した。

5. 考察

一般に、未耕作地の土壤中におけるリン酸含量は 0.5% 以下であり、耕作地では 1.0% 程度である。農耕地では施肥による影響が大きく、目的とする試料の分析結果のみから遺構・遺物内における生物遺体の存在を確認するのは困難である。このため、比較試料（遺物・遺構外の試料）との対比を行う必要がある。

分析の結果、リン（P₂O₅）の含量が 1.0% を超えているのは、No.1（V 層）のポイント d と No.2（①層 - 上層）のポイント b の 2 箇所である。このうち、No.2（①層 - 上層）のポイント b では、リン（P₂O₅）の含量が 6.7% と高い値であり、比較試料である No.1（V 層）のポイント d の 1.6% よりも明らかに高くなっている。また、カルシウム（CaO）の含量も 6.6% と高い値である。

以上のことから、SC5 内の①層については、リンやカルシウムを多く含む人骨などの生物遺体が存在していた可能性が高いと考えられる。なお、墓遺構や貯蔵穴の分析では、リンやカルシウムの分布が平面的および層位的に大きく偏る傾向があることから、生物遺体等が存在したと思われる部分を中心に、より多くの試料について検討を行うことが望まれる。

文献

- 竹追 紘（1993）リン分析法、第四紀試料分析法 2、研究対象別分析法、日本第四紀学会編、東京大学出版会、p. 38-45。
藤根久・佐々木由香・中村賢太郎（2008）蛍光 X 線装置を用いた元素マッピングによるリン・カルシウム分析、日本文化財科学会第 25 回大会研究発表要旨集、p. 108-109。

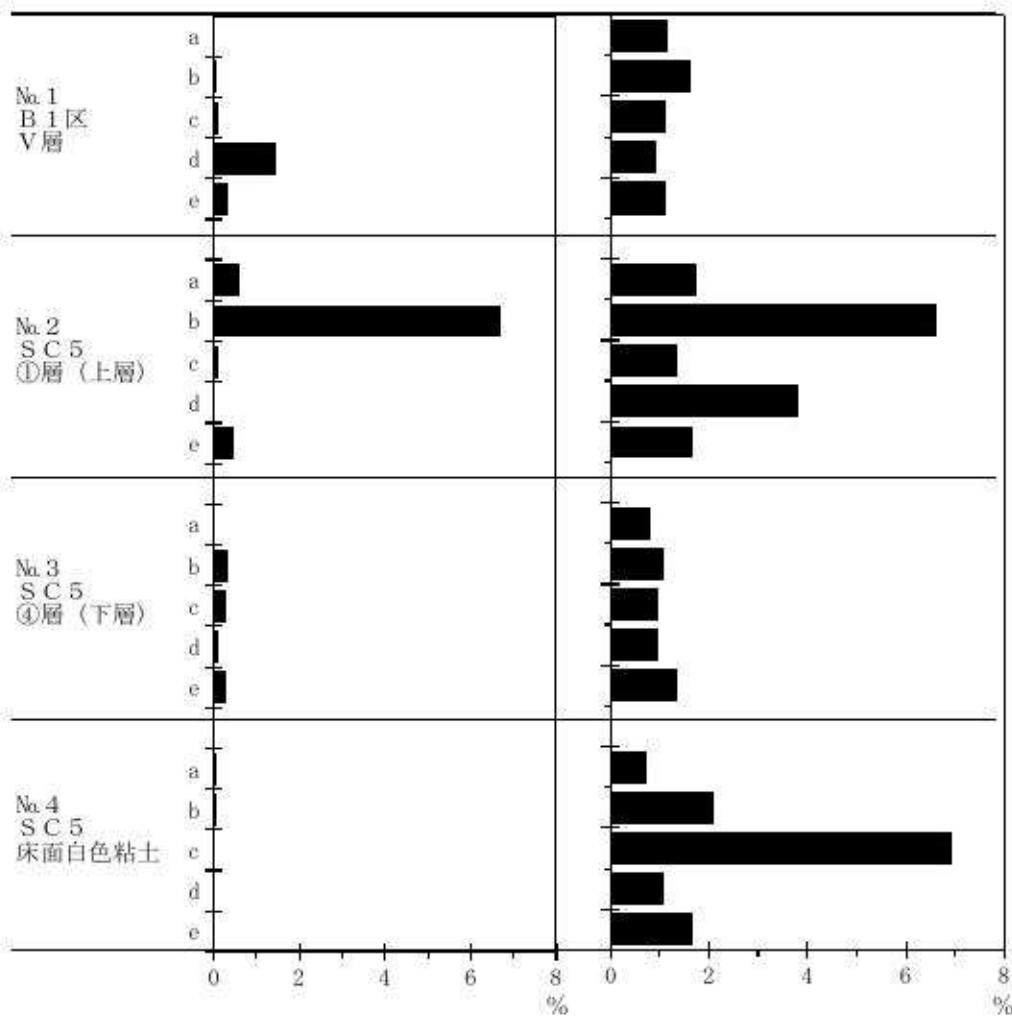
第2表 上針谷・下針谷遺跡における蛍光X線分析結果

単位: wt%

No.	ガラス	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO ₂	Fe ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂
1	a	0.00	10.53	74.93	0.00	0.09	3.01	1.13	1.86	0.14	8.22	0.01	0.03	0.00	0.03
	b	0.18	26.17	55.32	0.05	1.20	1.18	1.60	1.10	0.55	12.43	0.01	0.11	0.01	0.08
	c	0.70	25.91	61.30	0.09	1.19	0.43	1.11	0.66	0.35	8.17	0.01	0.02	0.01	0.04
	d	0.23	33.06	50.31	1.42	1.59	0.61	0.91	1.13	0.39	10.28	0.00	0.01	0.01	0.04
	e	0.53	25.92	59.87	0.33	1.11	1.11	1.11	0.81	0.26	8.87	0.01	0.01	0.01	0.05
2	a	0.00	30.39	57.05	0.56	1.11	1.27	1.72	0.72	0.29	6.77	0.01	0.03	0.01	0.06
	b	5.37	13.32	43.21	6.69	0.14	0.35	6.61	0.89	0.82	22.54	0.00	0.03	0.01	0.03
	c	0.64	28.73	57.78	0.08	1.00	0.98	1.33	0.77	0.40	8.20	0.01	0.02	0.02	0.05
	d	1.69	15.24	64.66	0.00	0.16	1.61	3.80	0.81	0.13	11.82	0.01	0.04	0.00	0.03
	e	0.66	27.70	59.79	0.44	0.84	0.75	1.63	0.81	0.34	6.84	0.00	0.13	0.01	0.05
3	a	0.45	30.93	53.87	0.00	0.77	0.72	0.78	1.29	0.28	10.77	0.01	0.02	0.02	0.08
	b	0.64	28.85	56.31	0.31	0.58	1.04	1.06	1.30	0.28	9.51	0.00	0.06	0.02	0.05
	c	0.69	26.68	60.07	0.27	0.71	0.78	0.95	1.15	0.30	8.31	0.01	0.02	0.01	0.07
	d	0.57	32.40	52.58	0.09	0.75	0.79	0.95	1.48	0.47	9.87	0.01	0.01	0.01	0.04
	e	0.71	24.77	61.59	0.25	0.69	0.72	1.33	1.47	0.24	8.11	0.02	0.02	0.01	0.06
4	a	0.61	29.80	57.69	0.04	0.40	0.73	0.70	1.09	0.23	8.61	0.02	0.01	0.01	0.05
	b	0.66	26.49	58.06	0.04	0.37	1.08	2.08	1.31	0.26	9.57	0.00	0.02	0.01	0.05
	c	0.78	20.77	66.41	0.00	0.23	1.06	6.89	0.33	0.10	3.33	0.00	0.05	0.01	0.04
	d	0.82	20.37	71.07	0.00	0.23	3.44	1.07	0.84	0.06	2.02	0.03	0.01	0.01	0.03
	e	0.73	23.00	61.32	0.00	0.27	1.45	1.66	1.37	0.27	9.82	0.01	0.03	0.01	0.08

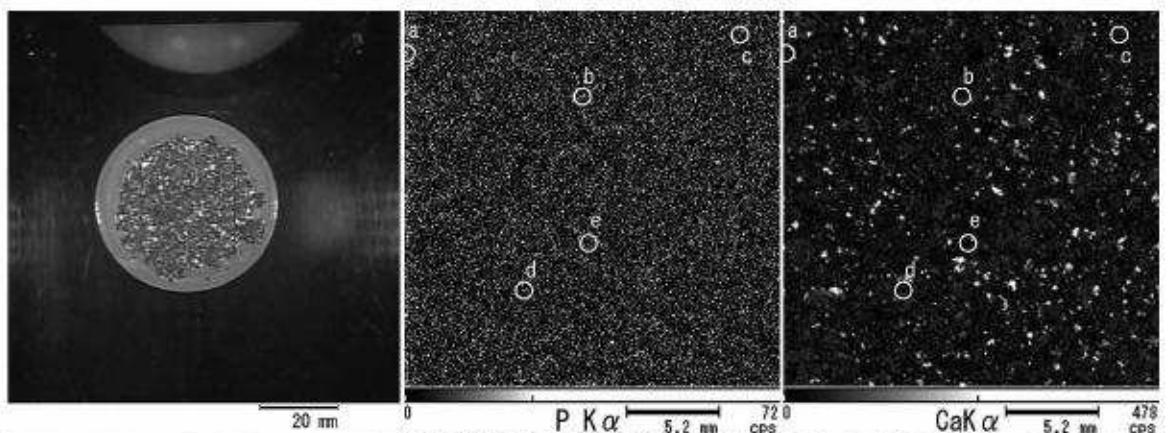
リン P₂O₅

カルシウム CaO

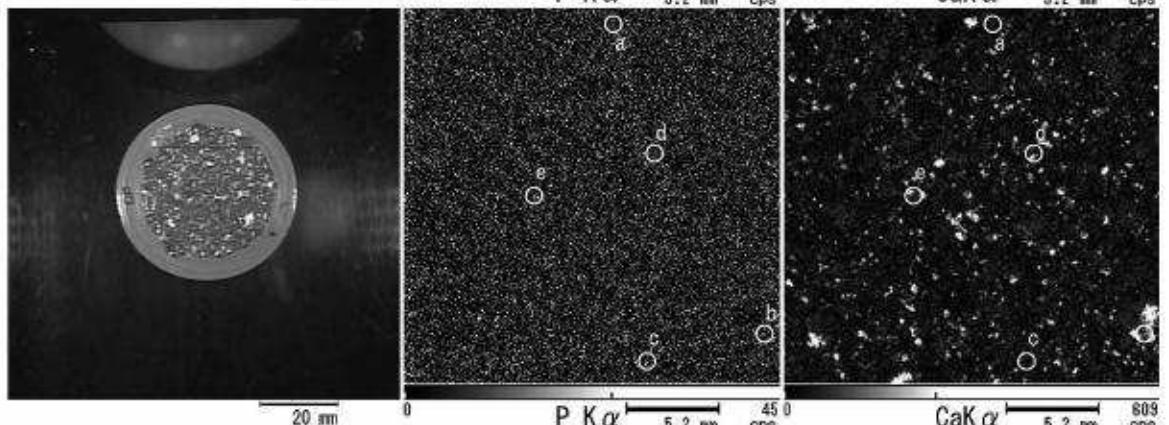


第58図 上針谷・下針谷遺跡におけるリン・カルシウム含量

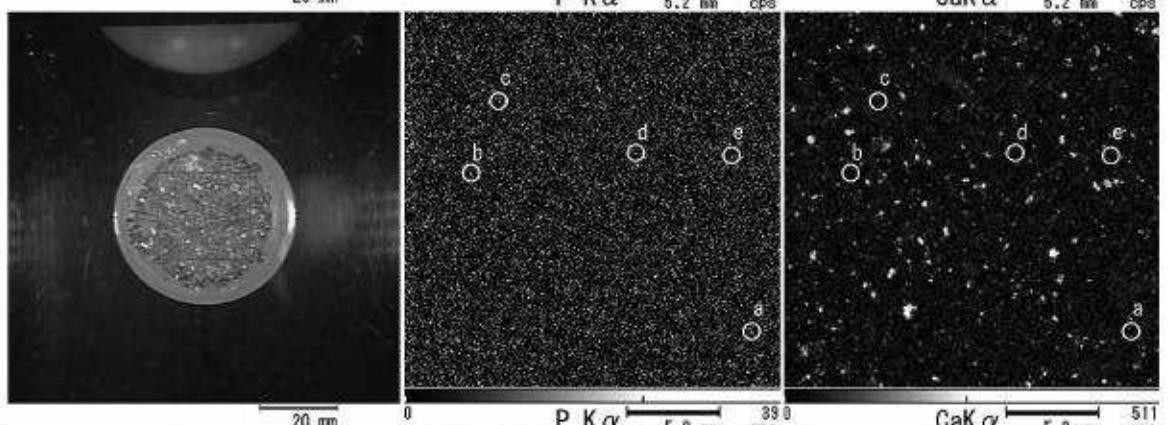
No. 1



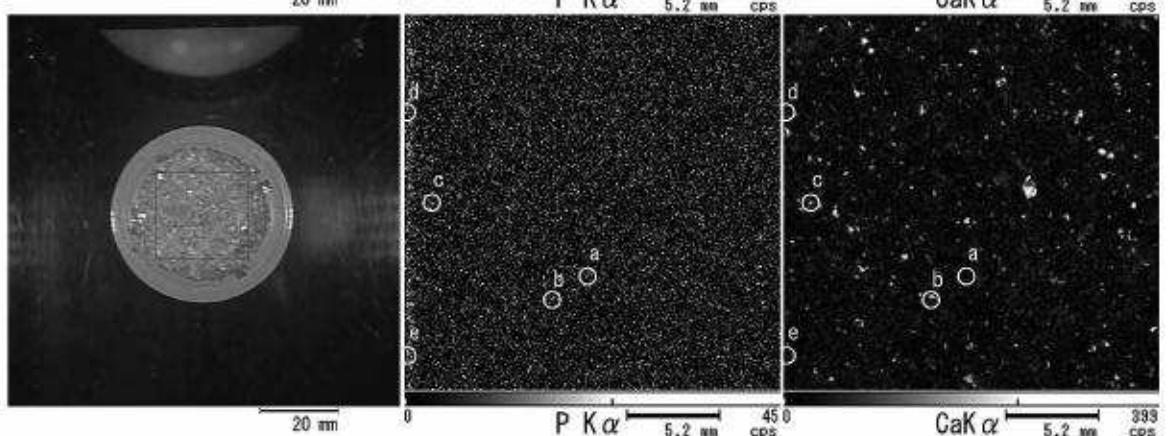
No. 2



No. 3



No. 4



第 59 図 プレス試料と元素マッピング図およびポイント分析箇所

第4節 上針谷・下針谷遺跡出土土器の圧痕調査報告

中村直子・小畠弘己

1 対象資料および調査方法

1) 調査対象と調査

土器圧痕調査の対象としたのは、上針谷・下針谷遺跡から出土した土器のうち、縄文後期・晩期 3456 点（38034g）、弥生時代中期後半の山ノ口式・中溝式土器 149 点（15000g）である。調査は、2015 年 8 月 6・7 日に都城市教育委員会文化財課整理室において行った。調査者は、大西智和・小畠弘己・寒川朋枝・中村直子・宮崎大和である。

2) レプリカ法の作業手順

作業手順については、以下の通りである。

①資料を収納されているコンテナケースごとに肉眼および実体顕微鏡により土器圧痕部を観察し、植物・昆虫・貝などの可能性のあるものを抽出する。

②圧痕部を洗浄し、土器全体写真および実体顕微鏡による圧痕部の拡大写真を撮影する。

③離型剤（アセトン・パラロイド B-75 溶液）を圧痕部に塗布し、印象剤（ブルーミックスソフト）を圧痕部に充填する。

④やや硬化した印象剤をマウントに盛り、圧痕部と接合して硬化させる。

⑤硬化後、レプリカを取り外し、圧痕部の離型剤をアセトンで洗浄する。

⑥作成したレプリカを走査電子顕微鏡（日本電子製 JCM-5700）で観察、撮影し、同定する。

なお、印象剤以外の手順や材料は比佐陽一郎氏・片多雅樹氏が考案した方法（比佐・片多 2005）に基づくものである。圧痕種類の同定は小畠が行った。

2 調査結果と成果（第3表、第60・61図）

同定結果は第3表のとおりである。

0004 は細長い羽状の葉であり、中心に 1 本の葉脈が観察できる。シダ類の羽片の可能性もあるが、その他の部分には明瞭な葉脈は観察できず、その形態からイヌガヤやイチイのようなイチイ科 *Taxaceae* の葉である可能性が高い。

0005 は長楕円形の形態をもち、周辺が細い土手状に盛り上がり、中央主軸方向に細い溝が観察できる。ダイズ属種子のヘソ部の圧痕である。「ワクド石タイプ圧痕」と呼ばれるもので、その大きさから栽培ダイズ *Glycine soja* の範疇に含まれる。

0008 は表面全体が顆粒状突起で覆われ、主軸方向中央部に幅広の隆起部がある。イネ *Oryza sativa* の穎果であり、護穎と芒を欠く（イネ有稃果）。0010 も表面全体に顆粒状突起が認められ、縦方向の半分のみで全体形は知り得ないが、イネ *Oryza sativa* の穎果と判断した。

0001・0002・0003・0006・0007・0009 は種を特定できなかったものである。ただし、0007 が円形に近い形態をもち不明種子である可能性はあるが、その他は種実である可能性は低い。

今回の圧痕調査では、縄文時代晩期の黒川式から「ワクド石タイプ」の圧痕、大型マメ科のダイズ属が検出された。都城市内でダイズ属の可能性があるものとしては、縄文晩期の正坂原遺跡で検出されているが、今回の検出はほぼ同時期で確定的なものが検出された事になる。弥生時代中期後半では、イネ 2 点が検出された。都城市内での穀類の検出例を見ると、縄文晩期突帯文期にはイネ・アワが、弥生時代中期にキビが加わるが、今回のイネ検出例はそれと矛盾しない結果となった。

本稿の作成にあたって、SEM 画像の撮影と図版の作成は小畠が、本文の執筆は中村が行った。本調査には小畠が研究代表者として受けている日本学術振興会平成 27 年度研究費補助金・挑戦的萌芽研究（課題番号 15K12946）「軟 X 線・X 線 CT を用いた圧痕法の革新的研究」の一部を使用した。

文献

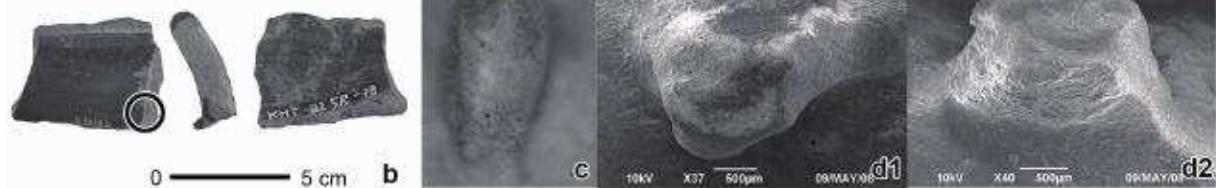
比佐陽一郎・片多雅樹 2005『土器圧痕レプリカ法による転写作業の手引き』福岡市埋蔵文化財センター

第3表 上針谷・下針谷遺跡出土土器と圧痕属性

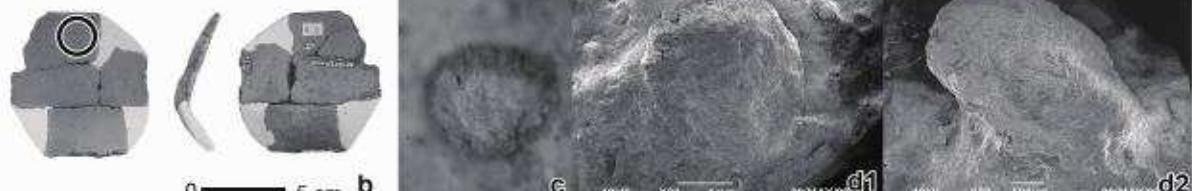
資料番号 (報告書番号)	出土地点・層位	精粗	器種	型式/時期	部位・検出面	圧痕の種類	長さ・幅・厚さ/mm	備考
KSH-0001 (-)	B2・5層	精	浅鉢	黒川/縄文晚期	胴部・断面	不明	2.46・1.73・2.35	
KSH-0002 (5)	SC5・上層 2776/B2・5層 2712	粗	深鉢	黒川/縄文晚期	口縁部・断面	不明	3.10・2.90・1.69	
KSH-0003 (188)	B1・4層/B2・4層 1754 /B2・5層 /C1・3層	粗	深鉢	黒川/縄文晚期	底・底外付近	不明	2.29・2.01・1.24	
KSH-0004 (195)	C2・5層 2902	粗	深鉢	黒川/縄文晚期	底・内面	葉	10.93 ^b ・3.22・0.89	
KSH-0005 (-)	SA5・SE一括	粗	深鉢	黒川/縄文晚期	胴・外面	ダイズ殻	5.46・20.2・0.43	ワクト石タイプ
KSH-0006 (-)	C2・4層 2306	粗	深鉢	黒川/縄文晚期	胴・外面	不明	8.06・2.72・2.16	
KSH-0007 (337)	SA2・上層 1456/SA4・床面 1456	精	壺	弥生中期	底・内面	不明	1.55・1.42・0.99	
KSH-0008 (299)	SA2・下層 944・1377/SA3・中層 986	粗	甕	無文/弥生中期	口・内面	イネ穎果	6.13・2.91・1.57	0009 (300) と同一個体か
KSH-0009 (300)	SA2・中層 1324・1340/SA2・下層 1198	粗	甕	無文/弥生中期	口・断面	不明	5.05・2.20・2.39	0008 (299) と同一個体か
KSH-0010 (399)	D1・3層 199	粗	甕	弥生中期	底付近・内面	イネ穎果	5.61・1.43 ^b ・1.82	

^b: 欠損部の残存長

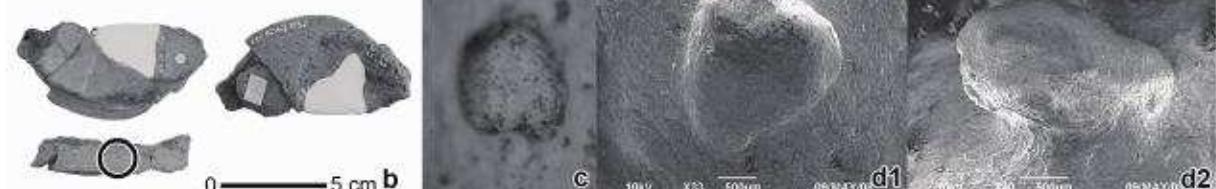
1. KSH0001



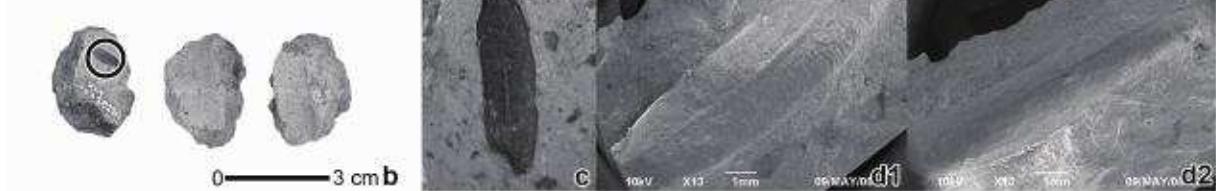
2. KSH0002



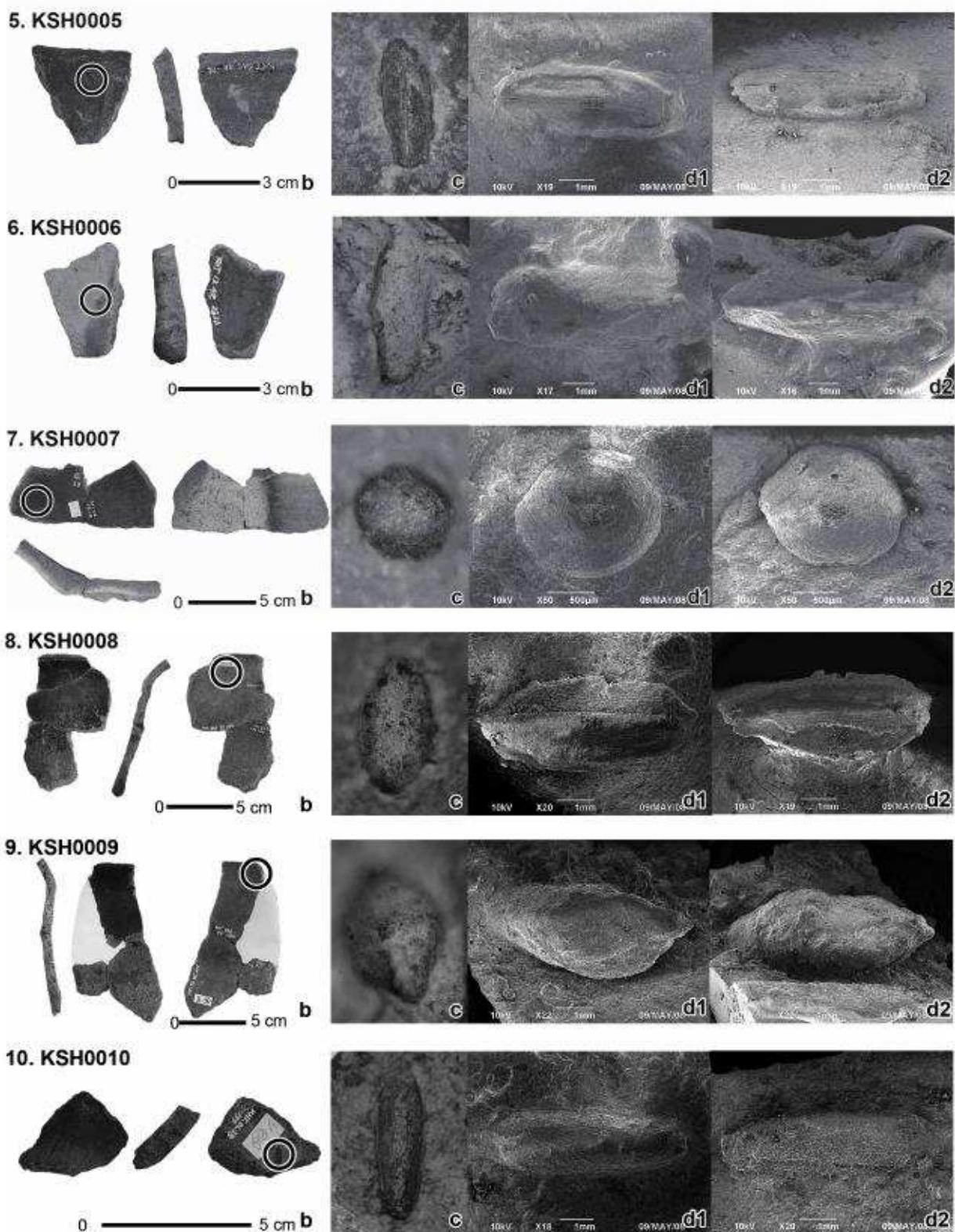
3. KSH0003



4. KSH0004



第60図 上針谷・下針谷遺跡 土器圧痕・レプリカ SEM 画像 1



第 61 図 上針谷・下針谷遺跡 土器圧痕・レプリカ SEM 画像 2

第5章 調査のまとめ

第1節 繩文時代晚期について

本遺跡では、調査対象面積が狭小であったにもかかわらず、当該時期の遺物がまとまって出土している。出土した土器資料からは、晩期中葉黒川式期の遺跡であると判断できる。

検出した遺構については、土坑が2基とピット4基のみであるが、土坑のうちSC5は墓の可能性のある遺構として注目される。この土坑は、平面プランや深さ、遺物の出土状況などから調査段階より土坑墓である可能性を考えていた。ただし、先に報告したように、人骨や副葬品と考えられる遺物等、直接的にそれを支持する証拠は得られていない。リン・カルシウム分析によれば、遺構埋土の上層部ではリン、カルシウムともに高い数値が検出されており、人骨等なんらかの生物遺体が存在していた可能性が高いとされる。埋土の下層からは目立つ値は検出されていない。

SC5の遺物出土状況に目を移してみると、既に報告したように多くの遺物が出土していることが分かる。その中でも遺構内埋土上層からの出土が多く、下層あるいは床面からの出土量は少ない。下層から出土した破片と上層出土の破片が接合関係にあることや、アカホヤ火山灰のブロックを含む層が確認できることなどから、遺構は時間をかけて徐々に埋没したのではなく、短期間のうちに埋め戻された可能性が高い。リン・カルシウム分析の結果も含め、これらを総合的に判断すると、SC5は遺体を埋葬した土坑墓で、出土した多量の遺物の中には遺体とともに埋葬した副葬品が存在していた可能性が考えられる。しかし、完形あるいはそれに近いところまで復元できる資料がないことや、出土遺物の接合関係が土坑内で完結するものではなく、約10m以上離れた包含層出土資料とも接合する事実から、その可能性を指摘するにとどめておきたい。今後同様のプラン・深さを有する土坑について、積極的にリン・カルシウム分析等を導入するなど具体的な遺構の解釈について調査者の意識を高めていく必要がある。

上述のようなSC5出土土器については、比較的広い範囲での接合関係が認められるものの、遺存度の高さや土坑内での出土状況を鑑みても一括性を見込める資料と考える。SC5からは深鉢、半粗半精製の鉢、浅鉢と各器種がセットをなして出土しているが、これらの資料の型式学的特徴は包含層出土資料とも共通しており、遺跡内出土資料という、より大きなまとまりとして認識可能といえる。

黒川式土器の各器種をセットで捉えた上の細分研究としては、堂込秀人氏の古・中・新の3段階に分ける編年案がある（堂込 1997）。これに対し水ノ江和同氏は、「古段階の存在は型式学的に説明はできても、実際の一括資料としてはなかなか認めがたい段階である」とし、「大きく新古の2段階に分ける分類が適当」と考えた（水ノ江 2009）。実際にSC5出土資料を堂込氏の編年に照らし合わせてみると、深鉢と鉢は古段階に、浅鉢については古～中段階にかけての資料といえる。これは対象を包含層出土資料に広げた際にも同様である。一方、水ノ江氏の提示する新古2細分案でみると、SC5および包含層出土資料はいずれの器種も古段階の資料として理解できる。SC5での出土状況を勘案すると、複数段階の資料が混在して出土しているのではなく、一括性の高い複数器種のセットが出土していると理解する方が妥当であろう。よって、本遺跡出土の黒川式土器は、水ノ江氏が提示する黒川式古段階の良好な一括資料としての位置づけが可能である。また、SC5出土鉢（53）の付着炭化物の¹⁴C年代測定で得られた2,930±30BPという値も、黒川式土器の年代を考える際に一つの定点となろう。

このような充実した土器資料に対し、出土石器は多くない。SC5においても完形の石鎌（67）が1点と横刃型石器と考えられる資料（71・72）が2点出土しているものの、相対的に出土石器の数は少ない。これは包含層出土資料も同様で、弥生時代の石器と明確に分離できない状況を考慮しても土器資料とのギャップを感じざるを得ない。しかし横刃型石器は、植物の摘み取り等収穫具としての機能が想定されており（宮田 1996、板倉 2015）、この時期の農耕の存在を考える上で最も重要な道具の一つといえる（板倉 2007）。これが黒川式土器と土坑内で共伴して出土したことは貴重な事例といえよう。

以上のように、上針谷・下針谷遺跡では検出された縄文時代晚期の遺構は少なかったものの、土坑内一括資料および良好な器種のセット関係が分かる包含層出土資料が得られたことは大きな成果といえる。今後は周辺に展開する同時期の遺跡における遺構・遺物の様相と比較検討することで、当該時期の集落構造やその変遷、生業形態の復元についても言及できればと考える。

第2節 弥生時代中期について

本遺跡の調査において、弥生時代中期後半期と考えられる竪穴住居跡を5基確認している。その内、SA4は大部分が調査区外に延びるため、全体像は不明であるが、それ以外はいずれも長方形の平面プランを基調とする。

平面規模では SA2 と SA3 が似通っており、主軸の方向も同様である。また、SA4 も検出できた範囲から推測すると同様の主軸を有すようである。SA1 と SA5 についてはベッド状遺構と呼ばれる低いテラス状の段差や突出壁はもたないが、SA2・3・4 ではこのようなテラス等をもち、構造上でも似通っている。主柱穴の配置に規則性は読み取れないが、床面中央に 2～4 本の主柱穴を有しているようである。床面積の規模は SA2 が 30 m² を超える他、SA3 も約 28 m² と大型である。SA1 も 16 m² 程で、最も小規模なものは SA5 の 9 m² 程となる。

住居跡内からの出土遺物をみてみると、いずれも中溝 2 式（桑畠 2000）や山ノロ II 式（中園 1997）を主体とするようである。SA1 からは須玖式甕が共出しており、SA2 では回線文系の壺が出土している。包含層出土資料をみても同様の様相が看取できる。

確実に住居跡に伴うような床面出土等の資料は極めて限定期であるが、住居間で出土遺物が接合関係にあるものが多いことが特徴的である。検出面の異なる SA5 は別として、それ以外の堅穴住居跡の検出面のコンターラインはかなり緩やかで、調査中には地形の傾斜はほとんど感じられなかつたほどである。そのような地形的環境の中、遺構の埋没過程において遺物が風雨により広範にわたり頻繁に移動したとは考えにくい。遺構埋没後の生物擾乱による移動も頻繁に且つ広範に起こっていた可能性は否定できないが、中には異なる住居跡の柱穴内出土破片と埋土下層出土資料が接合しているものもあり、住居跡自体が同時期に廃絶されたものと推測されるような状況もみられる。お互いに接合関係にある遺物が出土した住居跡の組み合わせは、① SA1 + SA2、② SA1 + SA5、③ SA1 + SA2 + SA3、④ SA2 + SA3、⑤ SA2 + SA4、⑥ SA2 + SA5 というようにほぼ全ての住居跡の出土遺物が接合関係にあることが分かる。それぞれの住居跡の出土土器の様相から、大きな時期差が読み取れないこととも併せ、これらの堅穴住居跡が同時期ないしは極めて近接した時期に使用ないしは廃絶されたことが推測される。

このような、弥生時代の住居跡にみられる遺物の遺構間接合の実態は、今後、遺跡形成のタフォノミー的視点からも、遺跡の調査を行っていく必要性を示すものといえる。

本遺跡と同時期の集落の様相として、南横市町所在の加治屋 B 遺跡の調査では、「大きめの堅穴住居跡が時間的・空間的に近接した状態で営まれており、おおむね同じ場所で何回も堅穴住居が構築され続けたという状況を窺うことができる」ことが指摘されている（桑畠 2007）。調査面積が狭く、一集落の様相を完全に把握できたわけ

はないが、今回の上針谷・下針谷遺跡の調査においても、加治屋 B 遺跡と同様の状況が指摘できよう。

また、出土土器にみられる圧痕調査の結果、当該時期の土器片 2 点からイネの圧痕が検出されている。今回の調査では水田跡はもちろん、石包丁等の稻作を示すような遺構・遺物は出土しておらず、植物珪酸体分析からもこの時期の包含層からはイネのプラント・オパールは検出されていない。水田稻作に適さないシラス台地に立地しているという本遺跡の地形環境によるものであろうが、今後も自然科学分析等を積極的に導入し、集落内の居住域のみではなく、水田稻作や畑作の場等の生産活動の環境も含めた総合的な集落景観の復元に努める必要がある。

第3節 平安時代～中世について

今回の上針谷・下針谷遺跡の調査では、他の時代に比べ、平安時代～中世にかけての遺構・遺物は多くない。遺構としては、庇を有す掘立柱建物跡や土坑、ピットを検出している。この内、掘立柱建物跡は一部が調査区外に延びるため、全形を把握できたものではないが、東側に 1 面庇を有している。また、柱穴は深くしっかりとおり、中には柱痕跡と考えられる土層が確認できたものもある。柱穴内から出土した遺物は少なく、その全形を復元できるものではないため、帰属時期を推定するのは難しい。しかし、その他の土坑やピットから出土した資料、さらには包含層出土資料を総合的にみてみると、本遺跡出土資料は、概ね 11 世紀後半～12 世紀代に比定されるものが大部分を占めるようである。この時期は都城盆地では南部を中心に遺跡が爆発的に増える時期もあり、本遺跡もこの都城盆地における島津荘成立後の「第 2 次開発ラッシュ」（桑畠 2009）に伴い形成された遺跡と判断できる。

出土したこの時期の遺物に関しては、土師器壺と小皿を中心に、ミガキ調整を加えた高台付碗や黒色土器、土師器甕など当該時期の他遺跡出土遺物と共に通する。その中で、全体的な出土量に比して多くの鉄滓が出土していることは注目される。この時期の遺跡の中には、安久町王子原第 2 遺跡、同永田藤束遺跡など、鍛冶関連の遺構が検出されていないにも関わらず、比較的多くの鉄滓を出土する遺跡がある。今回はこの鉄滓について金属学的分析は実施できていないが、多量の鉄滓出土はこの時期の開発ラッシュに伴う鉄製品生産および利用の実態を反映する可能性があり、より詳細な分析・検討が求められよう。

【本文中の引用・参考文献】

(論文等)

- 板倉有大 2007 「打製石斧と横刃型石器の器種認定」『考古学研究』53-4 考古学研究会
板倉有大 2015 「石器から見た九州晩期農耕論の課題」『第25回 九州縄文研究会福岡大会 九州縄文晩期の農耕問題を考える 発表要旨・資料集』九州縄文研究会
加賀淳一 2014 「都城盆地における弥生時代中期から後期前葉の土器様相」『新田栄治先生退職記念論文集 Archaeology from the South II』 新田栄治先生退職記念事業会
桑畠光博 1992 「都城盆地における縄文骨器集成」『宮崎考古 石川恒太郎先生追悼論文集』宮崎考古学会
桑畠光博 2000 「中溝式系土器の検討 - 宮崎県における弥生時代中期後半から後期前半にかけての土器編年における - 」『古文化談叢』45 九州古文化研究会
桑畠光博 2004 「都城盆地における中世土器の編年に関する基礎的研究 (1)」『宮崎考古』第19号 宮崎考古学会
桑畠光博 2009 「島津荘は無主の荒野に成立したのか」『季刊南九州文化』第109号 南九州文化研究会
堂込秀人 1997 「南九州縄文晩期土器の再検討 - 入佐式と黒川式の細分 - 」『鹿児島考古』第31号 鹿児島県考古学会
中園 晴 1997 「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』9 人類史研究会
水ノ江和同 2009 「黒川式土器の再検討 - 九州の縄文時代晩期土器 - 」『新弥生時代のはじまり 弥生農耕のはじまりとその年代』第4巻 雄山閣
宮田栄二 1996 「鹿児島県の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成 2 九州』国立歴史民俗博物館資料調査報告書
7 国立歴史民俗博物館
山本信夫編 2000 『大宰府条坊跡XV - 陶磁器分類編 - 』太宰府市の文化財 第49集 太宰府市教育委員会

(発掘調査報告書等)

- 桑畠光博 2007 「2. 弥生時代～古墳時代初頭 (2) 集落変遷について」『加治屋B遺跡 (縄文時代・弥生時代編)』都城市文化財調査報告書 第81集
都城市教育委員会 1991 『大岩田村ノ前遺跡』都城市文化財調査報告書 第14集
都城市教育委員会 1994 『黒土遺跡』都城市文化財調査報告書 第28集
都城市教育委員会 2000 『池ノ友遺跡 (第1次調査)』都城市文化財調査報告書 第49集
都城市教育委員会 2004 『王子原第2遺跡』都城市文化財調査報告書 第66集
都城市教育委員会 2005 『高田遺跡』都城市文化財調査報告書 第70集
都城市教育委員会 2006 『坂元A遺跡 坂元B遺跡』都城市文化財調査報告書 第71集
都城市教育委員会 2007 『加治屋B遺跡 (縄文時代・弥生時代編)』都城市文化財調査報告書 第81集
都城市教育委員会 2011 『永田藤東遺跡』都城市文化財調査報告書 第102集
都城市史編さん委員会編 2006 『都城市史 資料編 考古』都城市
宮崎県埋蔵文化財センター 2002 『鶴尾遺跡 坂ノ下遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第65集
宮崎県埋蔵文化財センター 2003 『大岩田上村遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第77集
宮崎県埋蔵文化財センター 2008 『筆無遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第166集
宮崎県埋蔵文化財センター 2008 『諸麦遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第168集
宮崎県埋蔵文化財センター 2011 『梅北針谷遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第204集
宮崎県埋蔵文化財センター 2011 『働女木遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第205集
宮崎県埋蔵文化財センター 2012 『平峰遺跡 (3次調査)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第219集
宮崎県埋蔵文化財センター 2012 『平峰遺跡 (1次・2次調査)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
第211集

図版1 上針谷・下針谷遺跡の調査



上針谷・下針谷遺跡遠景（南東上空より霧島を望む）



上針谷・下針谷遺跡調査区全景

図版2 土層断面・縄文時代の調査



調査区土層堆積状況



B1 区 縄文土器出土状況（西から）



B1 区 縄文時代の遺物出土状況(北西から)



B1 区 磨製石斧（450）出土状況（西から）



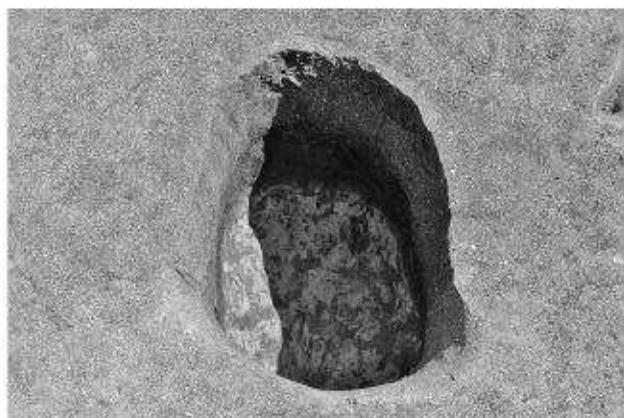
SC5 土層断面①（東から）



SC5 土層断面②（北東から）



SC5 白色粘土塊（北東から）



SC5 完掘状況（北から）

図版3 弥生時代の調査①



SA1 検出状況（北から）



SA1 調査風景（北西から）



SA1 遺物出土状況（南東から）



SA1 土層断面①（南東から）



SA1 土層断面②（北西から）



SA1 完掘状況（北東から）



SA2 検出状況（北から）



SA2 土層断面①（北東から）

図版4 弥生時代の調査②



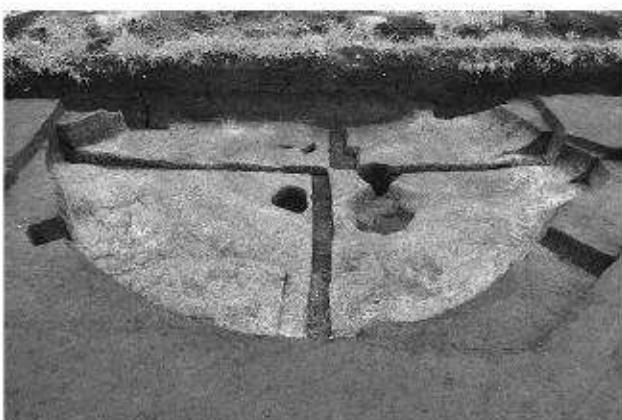
SA2 土層断面② (南西から)



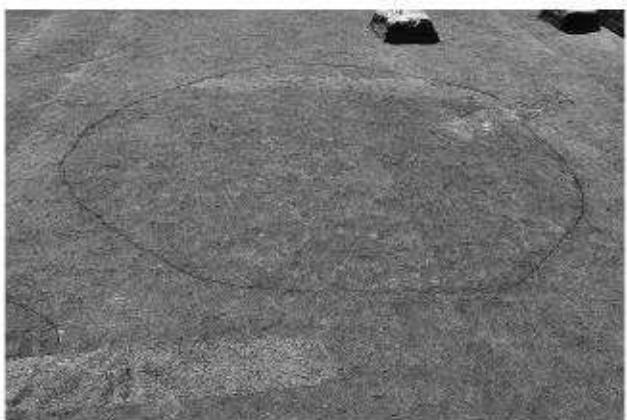
SA2SC 内遺物出土状況 (南東から)



SA2 柱穴完掘状況 (東から)



SA2 完掘状況 (南から)



SA3 検出状況 (西から)



SA3 土層断面① (南東から)



SA3 土層断面② (北西から)



SA3 完掘状況 (南西から)

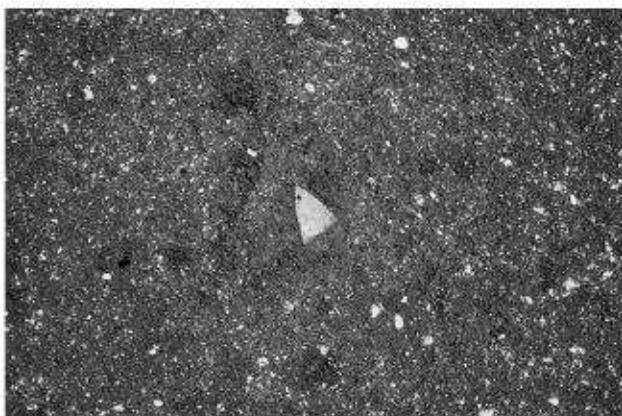
図版5 弥生時代の調査③



SA4 検出状況（西から）



SA4 土層断面（南から）



SA4 磨製石鏟（360）出土状況（北から）



SA4 完掘状況（西から）



SA5 検出状況（北西から）



SA5 土層断面①（北西から）



SA5 土層断面②（南東から）



SA5 完掘状況（北西から）

図版6 平安時代～中世の調査



SB1・SC1 検出状況①(西から)



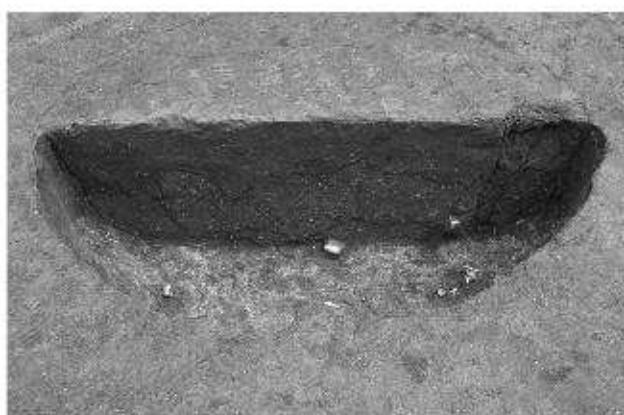
SB1・SC1 検出状況②(東から)



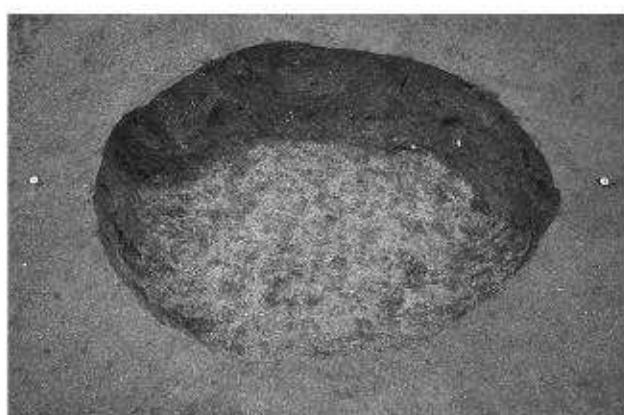
SB1・SC1 完掘状況①(西から)



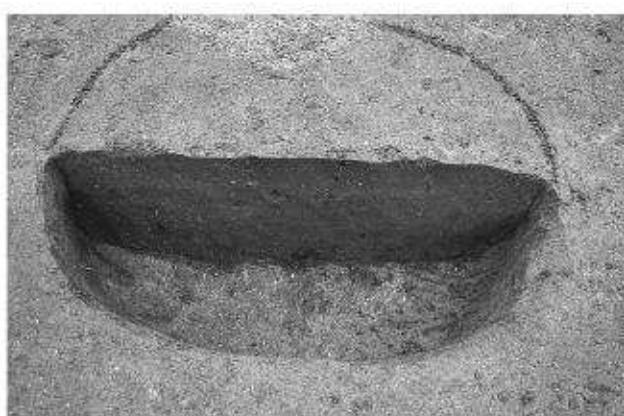
SB1・SC1 完掘状況②(北から)



SC1 土層断面 (北から)



SC1 完掘状況 (北から)

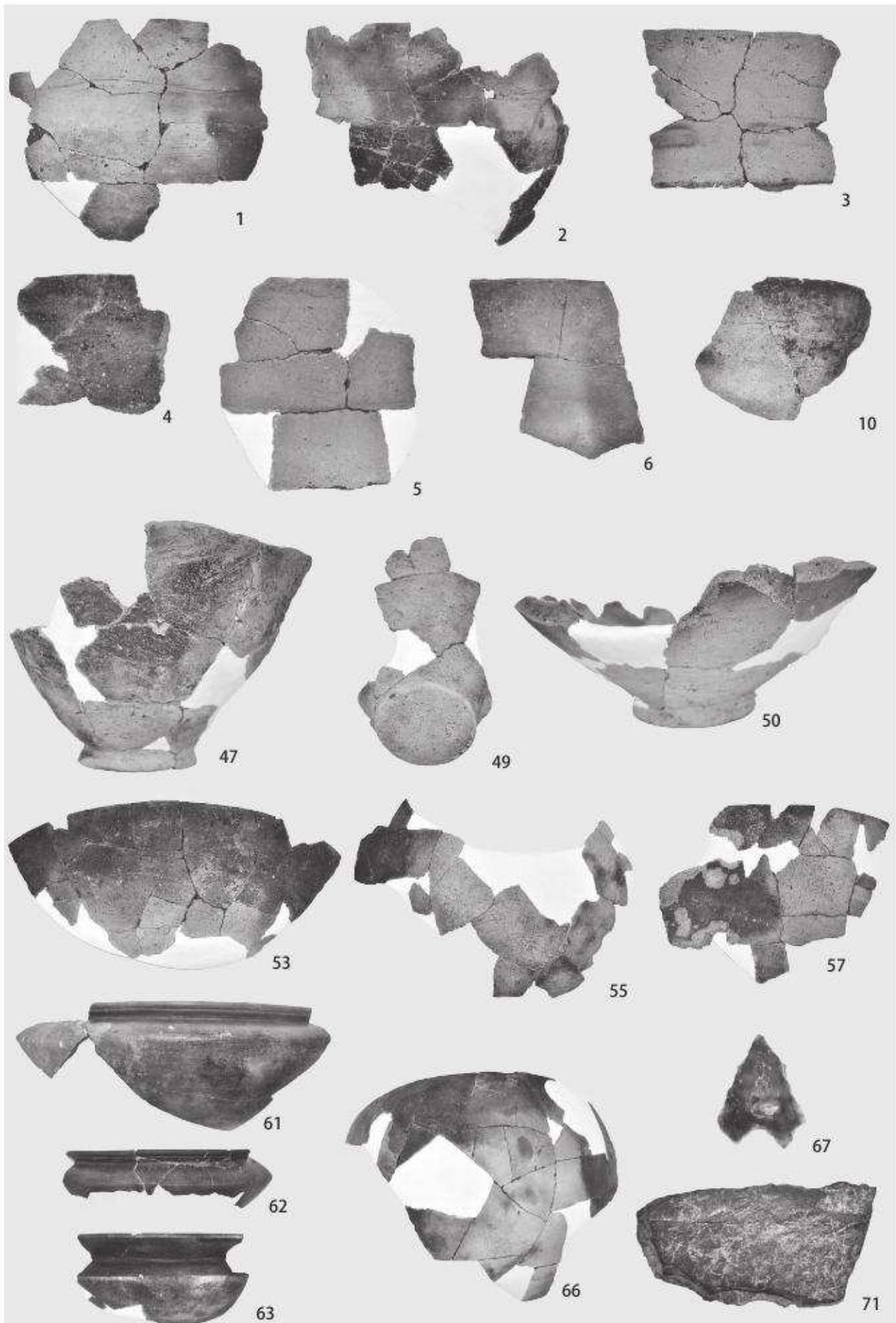


SC3 土層断面 (東から)

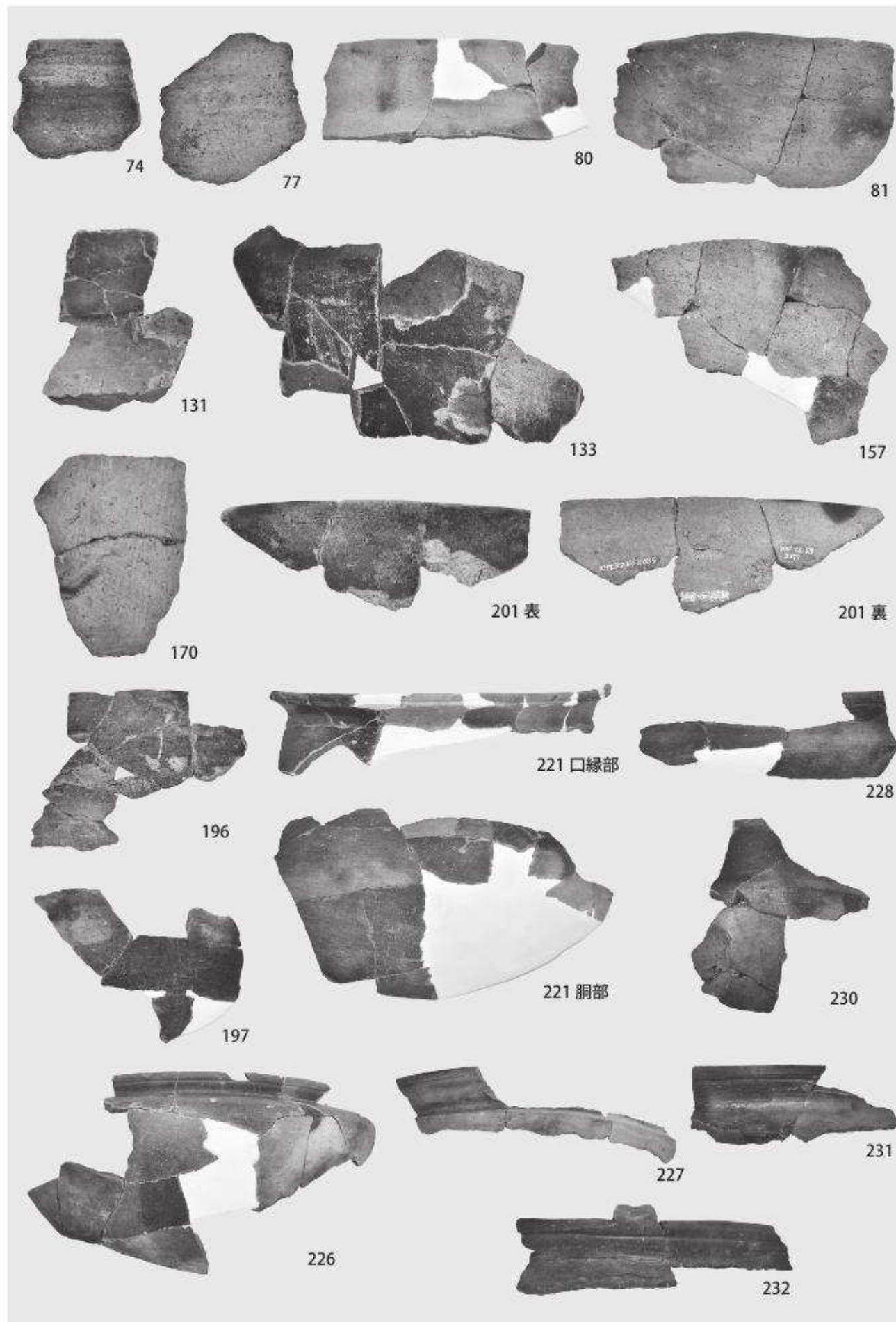


SC3 完掘状況 (東から)

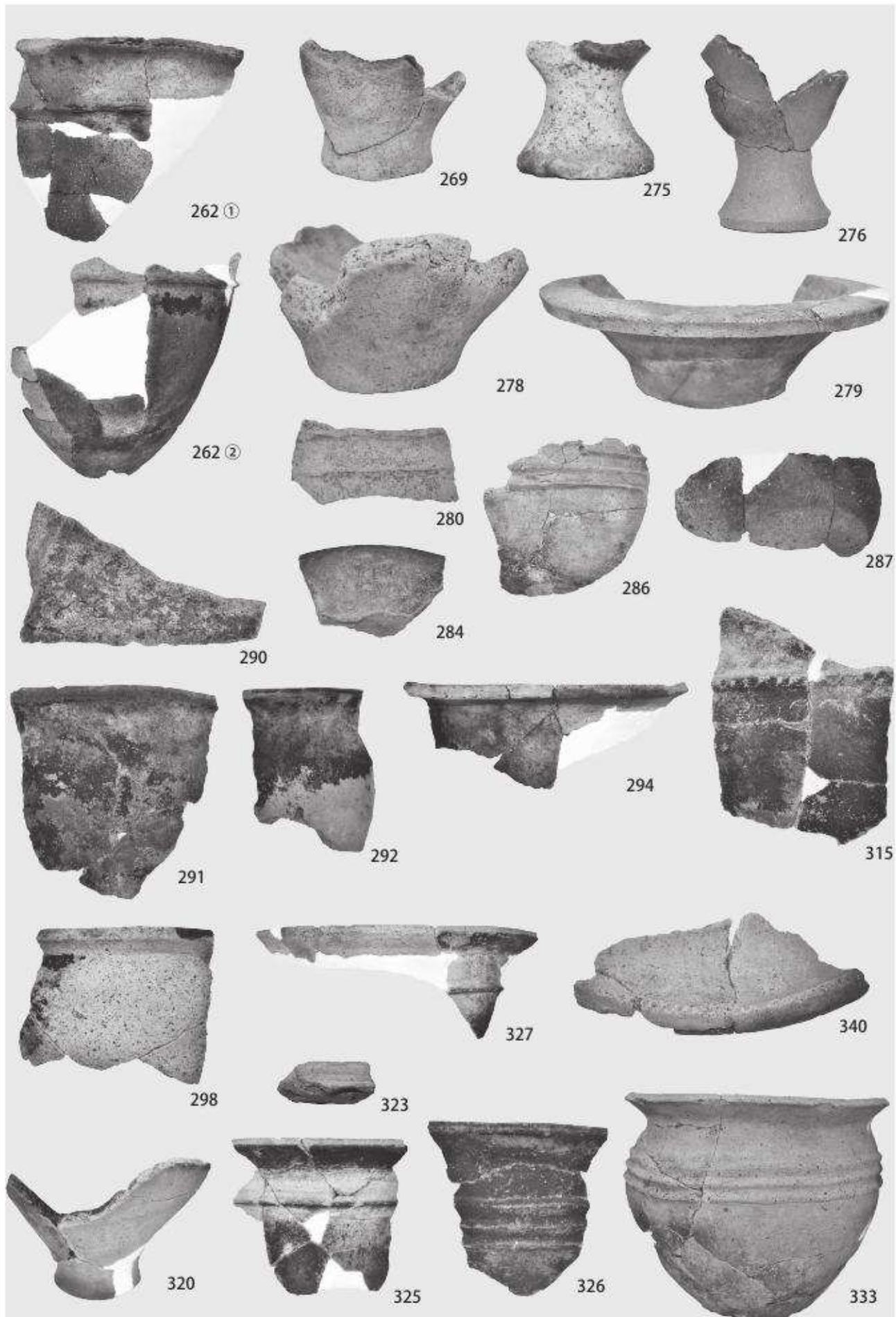
図版7 繩文時代の遺物① (SC5 出土遺物)



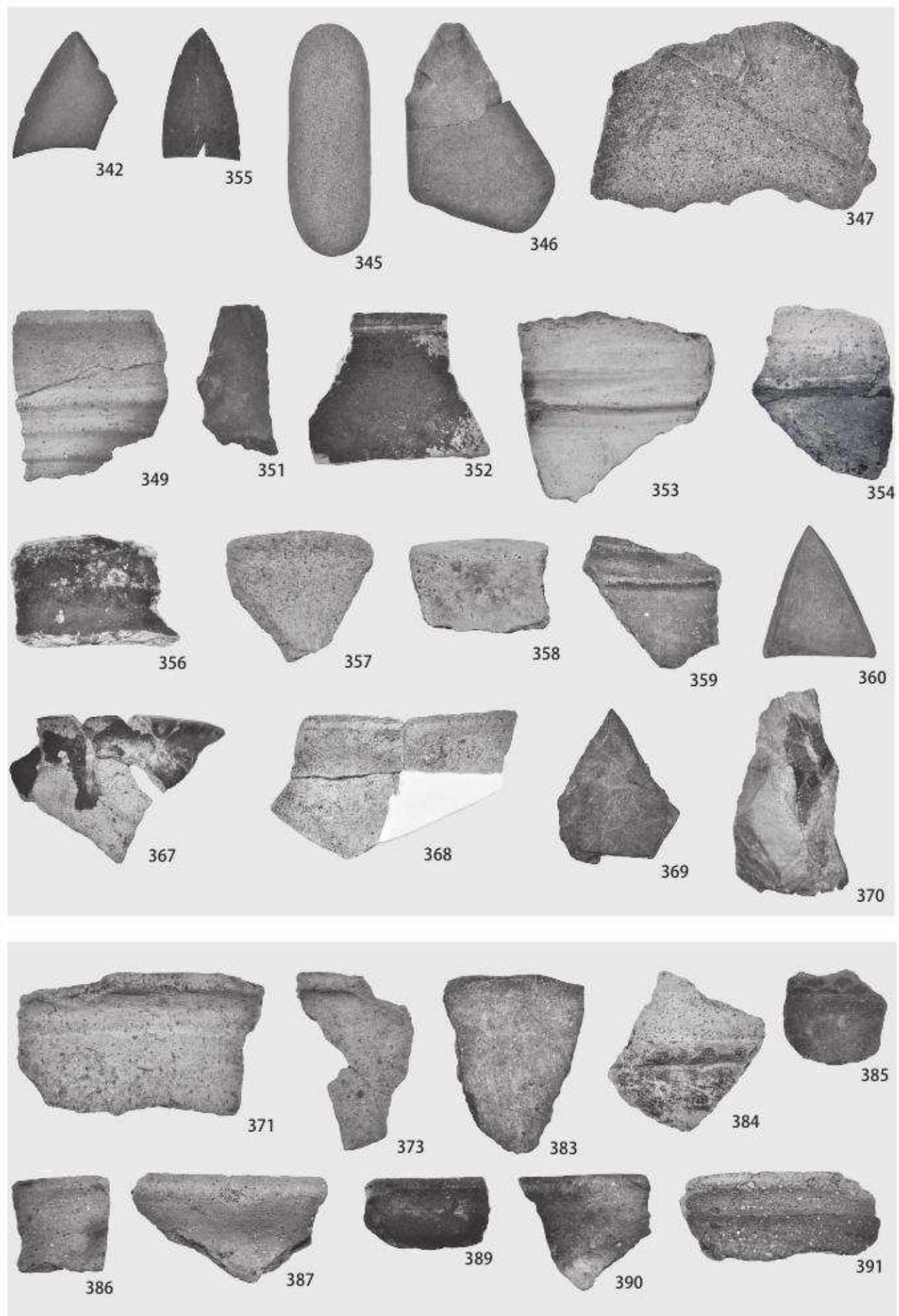
図版8 縄文時代の遺物②（包含層出土遺物）



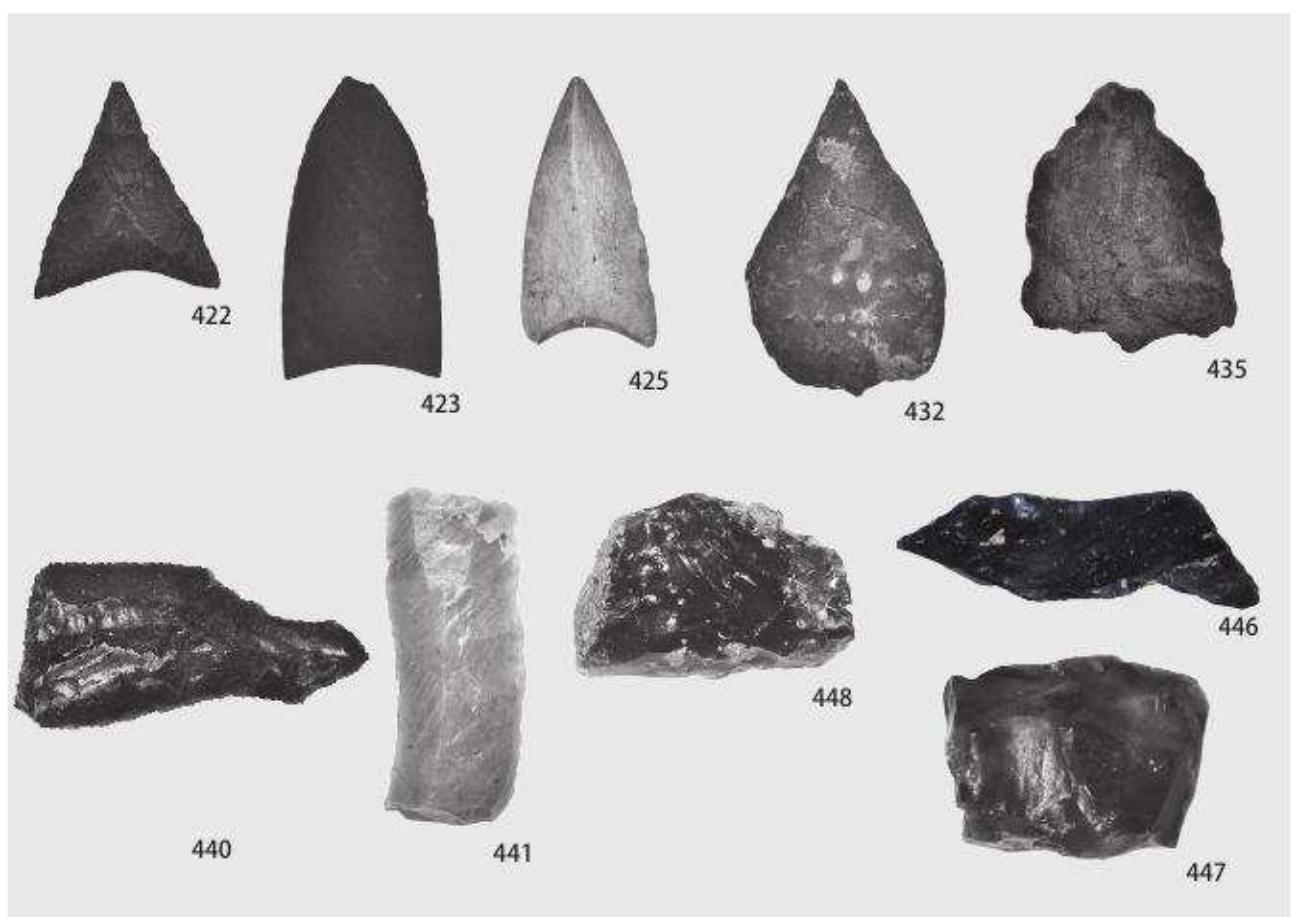
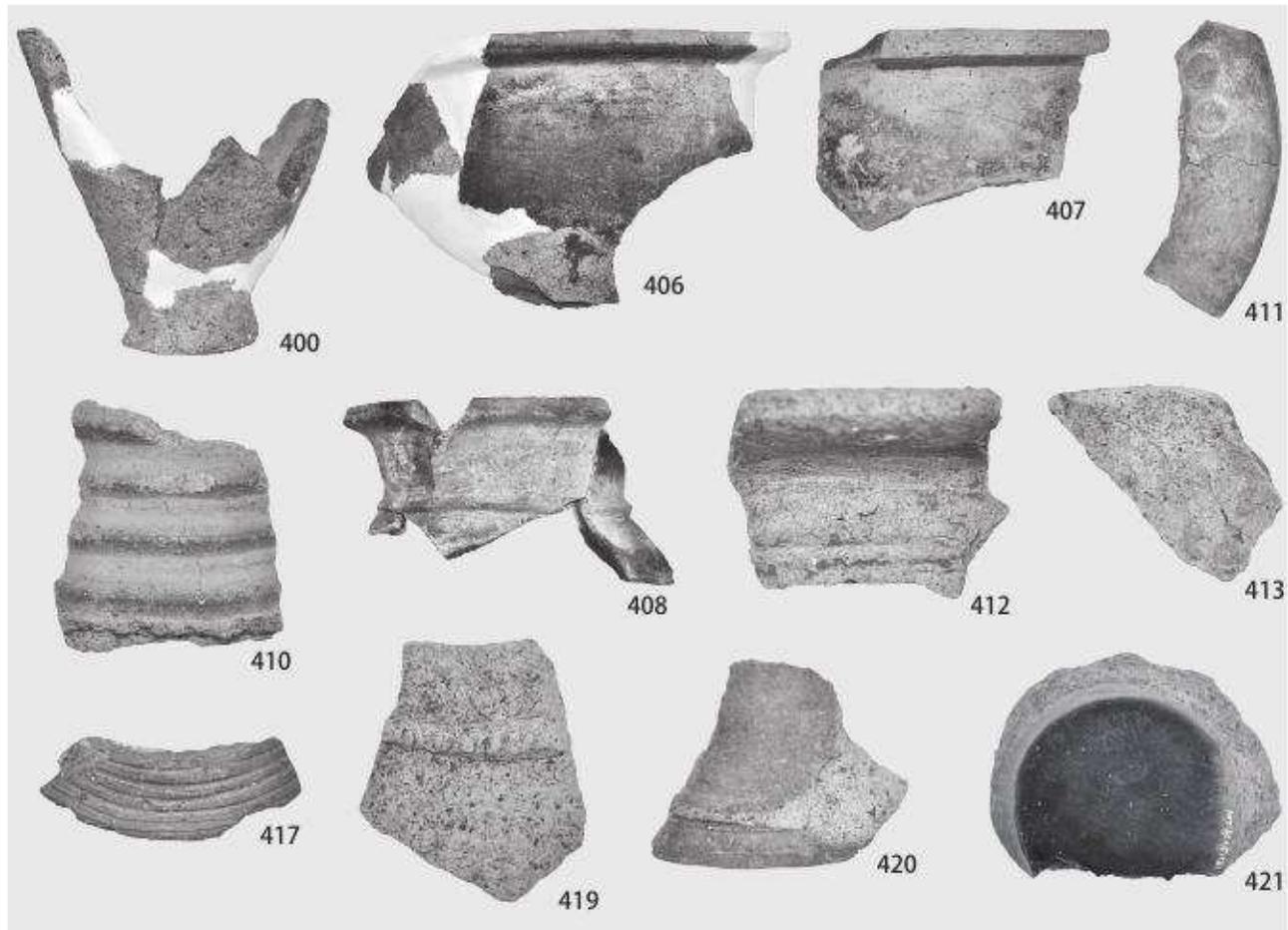
図版9 弥生時代の遺物① (SA出土遺物)



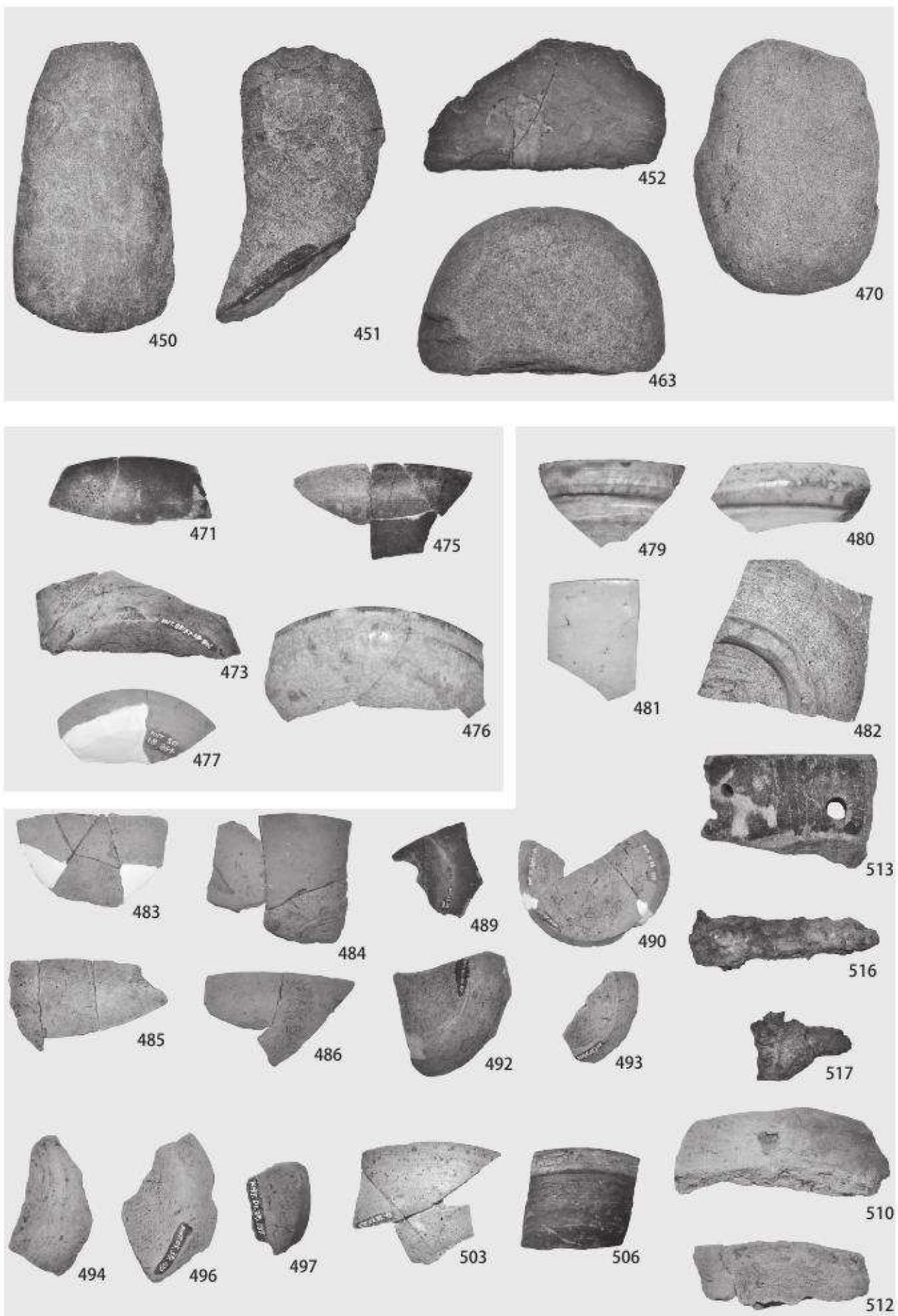
図版10 弥生時代の遺物② (SA 出土遺物・包含層出土遺物)



図版 11 弥生時代の遺物③（包含層出土遺物）・包含出土石器①



図版 12 包含層出土石器②・平安時代～中世の遺物



報告書抄録

ふりがな	かみはりたに・しもはりたに							
書名	上針谷・下針谷遺跡							
副書名	私立保育園園舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	都城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第126集							
編著者名	山下大輔							
編集機関	都城市教育委員会							
所在地	〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町 19-1 TEL 0986-23-9547 FAX 0986-23-9549							
発行年月日	2016年3月25日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上針谷・下針谷遺跡	宮崎県 都城市 今町 8917番	45202	M5041	31° 69' 26" 付近	131° 3' 43" 付近	2014.4.17 ～ 2014.7.30	666 m ²	私立保育園 園舎建設
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上針谷・下針谷遺跡	集落跡	縄文時代	土坑・ビット	縄文土器・石器	土坑墓の可能性のある遺構から縄文時代晚期黒川式土器の深鉢・鉢・浅鉢がセットで出土。			
	集落跡	弥生時代	堅穴住居跡	弥生土器・石器	近接した時期に存在したと考えられる堅穴住居跡5基を検出。			
	集落跡	平安時代 中世	掘立柱建物跡 溝状遺構 土坑 ビット	土師器 貿易陶磁器 鉄製品・鐵滓 滑石製品 軽石製品	底をもつ掘立柱建物跡を検出。			

都城市文化財調査報告書 第126集

上針谷・下針谷遺跡

—私立保育園園舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016年3月25日

編集 宮崎県都城市教育委員会
発行 〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町19-1
都城市役所菖蒲原町別館
TEL (0986) 23-9547 FAX (0986) 23-9549
印刷 有限会社 都城新生社印刷
〒885-0004 宮崎県都城市都北町7284-1
TEL (0986) 38-3500 FAX (0986) 38-4187
